

黒い球と共に エロ版

八雲ネム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世で事故った俺は、気が付いたらGANTZの世界に来ていた。始めは即死ゲーじゃね?と思ったら思わぬ才能を發揮して……

注意：

本作はR-18ではない方の「黒い球と共に」にR-18の部分を付け足しただけの作品になります。

そのため、他の展開を読みたい!と思っただ方はお気に入り登録してから他の作品も読んで、どうぞ(ステマ)

また、エロシーンがある部分にはタイトルに☆マークを付けますので、よろしく願います。

さらにリクエストを受け付けるようにしました。

下記のURLにて受け付けます。

<https://syosetu.org/?mode=kappa&view&pid=206911&uid=166204>

目次

本編

プロローグ	1
第1話 戦闘	6
第2話 説明	11
第3話 日常と変化	18
第4話 初心者はやかましい	23
第5話 ボス？ああ、弱かったよ	28
第6話 仏像戦、突入！	35
第7話 千手戦、それはヌルゲーとは言い難く……	41
第8話 仏像戦、終了	46
第9話 互いに求め合う ☆	53
第10話 情報共有	57
第11話 吸血鬼	63
第12話 集いし、猛者達	69
第13話 新宿大虐殺	75
第14話 かつぺ星人討伐戦、開始	80
第15話 恐竜も飛び道具には負ける	86
第16話 死ぬ時はあつさり	92
第17話 デートと奇襲	100
第18話 ローター責めにした ☆	105
第19話 2連続ミツシヨン	107
閑話 竜崎という男について	111
第20話 オニ星人討伐戦①	116
第21話 オニ星人討伐戦②	121

第22話	オニ星人討伐戦③	127
第23話	フリーライターと強襲	134
第24話	吸血鬼との決着	139
第25話	ぬらりひよん戦、開始	144
第26話	加藤はギゼンシヤ星人なのか、否か	149
第27話	1000点の星人	154
第28話	共闘	159
第29話	スクラップアンドビルド（星人が）	164
第30話	勝利	169
第31話	帰還	174
第32話	ダブルパイズリ ☆	180
第33話	海外との交流	184
第34話	ラストミッション	189
第35話	文明崩壊の序章	195
第36話	崩壊する世界の中で	199
第37話	宇宙船の中は……	204
第38話	再結集	209
第39話	集った意思は名も無き勇者か、それとも抵抗組織か	214
第40話	人命救助と戦闘	220
第41話	不利ではあるが絶望的ではない	225
第42話	戦場では想定外が当たり前	229
第43話	危険な賭け	234
第44話	決別	241
第45話	事実	248

第46話	死んだ先は……	253
第47話	決闘とその結果	258
最終話	戦後	264
IFストーリー	エロメイン	
番外編①	メアリーとの性行為	268

本編

プロローグ

人生は一度きりだ

それ以上でもそれ以下でもない

人間の存在価値なんて、地球や宇宙全体では埃以下のものではかない。

だからせいぜい、自分の満足できる程度に生きていこうと思っただ。

しかし、二度目の人生まで生きることになるなんて思ってもいなかった。

「うっ、この感じ……今日がその日か」

俺は竜崎誠^{まこと}、表向きには平凡な大学生だが裏では黒い球に呼ばれて、侵略してくる星人をやつつける戦闘員だ。

そんな俺の外見は、「身長が190cm、髪は茶、筋肉モリモリマツチヨマンの変態」ではなく、黒髪短髪の筋肉質な体格で目つきが悪く、表情を変えれば相手を挑発しているかのように見えるらしい。

これは決して、厨二病が継続して発症している訳ではなく、転生した時に持った生まれつきの外見と実際に起こっている出来事だから困る出来事である。

数分後には、黒い球がある部屋に転送されて戦いに出ることにな

る。普通の社会では、味わえない非日常な戦闘がな。

そう思いながら、部屋でグダグダとしていた服から黒い球から、支給されたワードスーツに着替えてその上に普段着を着て転送されるのを待つ。

そして、転送が始まると既に何人かの人が来ていたが俺のようにスーツを着ているのは、既に戦い慣れた西以外にいない。

どうやら、俺と西以外は初心者で何かしらの理由でくたばったのか。

「あの〜……」

「ん？」

俺がそう思っていると、メガネを掛けた会社員風の男性が俺に声を掛けてきた。

「あなたはここの住人ですか？」

「ん、ああ……別に住人って訳じゃないが少なくともここにいる殆どのメンバーよか、ある程度の情報を知っているぐらいだ」

「良かったらその情報、教えて頂けませんか？」

「まあ、生き残ったらな……ってオイオイ、また来たのか」

俺の答えに、会社員の男性は困惑していたがそれと同時に転送が始まって誰もいない空間から、肌色の体が出てきた。

ん？肌色？そういう服なのか？

俺がそう思っていると、転送は続いていって見えてきたのは女性特有の股間の部分や乳房などで、どうやら裸の状態で死にかけたようだな。

そして、全身が現れると力無く倒れそうになったので意識のない女性の腕を持って支えると、そっと倒してきていたトレンチコートを被せた。

手首などを確認すると、鋭い刃物で切ったような傷と出血が確認されたので自殺を図ったようだ。

全く、自殺しようとして地獄よりも酷いところに来るなんて彼女も運がないな。

そう思っていると、どうやら意識が戻ったようだ。

「うつ、ここは？」

「地獄よりも酷い場所さ」

彼女の問いに、俺は答えつつもこの部屋に居合わせた住人を見回した。

まず、前々から知っていた西と俺に話しかけてきた会社員風の男性、男子高校生2人に病院服の老人、パーカーを着た男性外人と柄の悪そうな男性2人、そして裸の女性だ。

戦力になりそうなのは、今の段階ではないな。いや、平凡な日本人なら当たり前か。だって、グロテスクな現場に居合わせる方が稀なんだからな。

それに、非日常な状況に置かれると前もって意識しながら生活していないと行動できないだろう。

まあ、そう言う俺も始めは逃げ回るしかできなかつたのでとやかく言うのはよしておこう。

そう思っていると、寝かせていた女性が起き上がって俺に聞いてきた。

「あの……これ、どうすれば？」

「状況が変わるまで着ている。じゃねえと襲われちまうぜ？」

そんな彼女を、ちらつと見てから柄の悪そうな男共を見た。

彼らはどう見ても、アウトローな雰囲気醸し出しているので警戒していると、ガンを飛ばしたように受け止められたようで声を荒げながら俺に近づいてこう言ってきた。

「オイゴルア、さつきから何見てんだよ!!」

「いや何、てつきりヤクザみたいな雰囲気だなあと」

「ふぎけんじゃねえ!!」

「ぶっ、アホス」

（おい、西。見てねえで止めろよ。てか、吹いただろ、テメー。後で覚えておけよ）

西の小言に、俺は目をそらしながらそう思っているとアウトローな雰囲気な男性は、その態度が癪に障ったようで殴りかかったがすぐに驚愕の表情になった。

何しろ、普段着の下にはパワードスーツを着込んでいるからな。生身の殴りは通用しない。

せめて星人レベルの威力じゃないと何回、殴っても意味がない。

『あーたーらしいあーさがきた、きぼーうのあーさーが』

そう思っていると、黒い球からラジオ体操に使われる曲が流れてきたのでその場において、俺と殴った男を見ていた全員が黒い球に顔を向けた。

そして、黒い球の表面にはこう書かれた文字が浮かび上がった。

『てめえ達の命は、

無くなりました。

新しい命を

どう使おうと

私の勝手です。

と言う理屈なわけだす。』

「り」や「い」、「す」が左右逆転している文字の後にやっつける星人の特徴が出てきた。

しかし、事情を知っている西以外は何かのテレビ番組のように冗談だ、と解釈しているので真面目に受け取ってはいない。

そして変化はそれだけでなく、黒い球の左右と後ろから球を構成していたが壁面が飛び出してきて、左右には武器が収納されていて後ろにはケースがしまわっていた。

「さて、これはテレビの演出で星人を制限時間内をやっつけると1000万円がもらえるぞ！ しかも、ケースにしまわれている衣装を着込むと倍の金額になるらしいぞ！」

俺がそう言うのと、皆はこいつはなに言っただという顔で俺を見てきたがそれに便乗して、西がこう付け加えた。

「プロデューサーがうちの父さんで、アメリカのケーブル局との共同製作でやっているらしい。元々はエール大学の学生が考えた企画だっけ」

「はあ？ エール大学？」

「この地球には人間にバレないように犯罪者の宇宙人が入り込んで生
活しているんだって」

「そうそう、俺達は日本政府の秘密組織にスカウトされて君達と一緒に、
その宇宙人をやっつけに行くミッションを与えられたんだ」

俺達がそう言うと、その場にいた殆どの奴らは口車に乗せられて
スーツを着込もうと、スーツケースを取っていくが時間切れになった
ようで着込めずに転送が始まった。

そんな中、俺は裸だった女性のスーツケースを手を持ちながら戦い
に必要な武器を、持てる範囲で持って転送されていった。

第1話 戦闘

「ふーむ、それにしてもネギ星人か。弱そうだったな」

「あ、あのー！」

「ん？」

転送された俺が、そう呟くと後ろから声を掛けられた。

振り返ると、俺のトレンチコートを着ている裸だった女性が立っていてその隣には、2人の男子高校生がいたのでどうやら、他のメンバーは西と一緒にどこかに行っただらしい。

そのため、俺はスーツケースを女性に渡しながらこう言った。

「これを駐車場の物陰で着替えていけ。そうすれば少なくとも死にくくなる」

「あ、ありがとうございます」

俺の言葉に、女性は戸惑いつつも受け取って丁度よく空いていた車庫型の駐車場で、蛍光灯の光が当たらない場所で着替え始めた。

その間に、男子高校生達の疑問を解消するのでしょうか。まあ、肝心な話は誤魔化すかな。

「本当なのか？ テレビ番組って……俺達、死にかけてんだぜ？」

「催眠術の一種を使ったから幻覚を見せるのは簡単だよ。それに、皆もスカウトされたはずだよ？ あの部屋に来る前に誰かに話しかけられなかったか？」

俺がそう言うと、男子高校生の中で背の低い奴が何かに気が付いたようだった。

俺が言ったのは、あくまではったりだったがどうやら心当たりがあるようだ。上手く、引っ掛かってくれて助かったよ。

そんな訳で、軽く談笑していると女性がパワードスーツを着替え終えたようで、空のスーツケースを持って物陰から出てきた。

しかし、状況が状況なので女性は戸惑っていた。

「あの……今の状況って何なんですか？」

「さつきも言っただろう？ テレビ番組の一環だった」

「い、いえ……そう言うことではなくて……」

「ま、細かいことは後で話すよ。じゃないと制限時間をオーバーしちゃうし」

まあ、この話に穴がありすぎるから細かいところに突っ込まれると反応に困る。

なので、俺がそう言っただけで切り上げて歩き始めると女性は納得できない様子だったが渋々、男子高校生と一緒に歩いてきてくれた。

そうして、歩いているとターゲットとなる星人が二階建ての 아파트 から飛び出してきた。

しかも、二階の廊下から勢いよく飛び出したので軽く、数メートルもの距離を飛んでから顔面から着地した。

人間だったら、救急車を呼ぶところだが耐久性に定評のある星人だ。この程度で死にはしない。

と言っても、今までに戦ってきた星人の中では戦闘力は著しく低そうだな。

しかし、大金に目を眩んだ奴らにしてみればそんなことはどうでも良いようで、子供の星人が逃げ出した方向へと向かっていった。

「お、おい！ ……行っちゃまった」
「……………」

その際、大柄な男子高校生が呼び止めようとしたが反応されずにスルーされたので、やや呆然としていたので俺は彼に声を掛けた。

「どうする？ ……このまま、歩き続けても意味は無いと思うけど？」
「俺はあいつらを止めるために追うよ。いくら何でも殺すほどじゃないだろ」

「まあ……せやな」

彼の返事に、戸惑いながらも答えたのだが結局は殺すことになる。理由はわからないが、少なくとも黒い球が求めているのは星人を殺すことであり、俺達はそのために死んだ瞬間にあの部屋に転送された。

そのことを思い出したので、俺に答えた大柄な男子高校生が走り始めたのを止められなかった。

「やれやれ、正義感だけは1人前だな。悪いことじゃねえけど」

「……………」

「君らはどうする？ あの高校生を追うかい？」

「!? お、俺は……………」

「行きます。私、状況がわからないんですけど何もしないよりかはマシですから」

「そ、なら行くぞ」

もう1人の男子高校生は、答えに困っていたがスーツを着込んだ女性はずぐに決断した。

まあ、自殺しようとしたら変なテレビ番組に参加させられた挙げ句にコスプレまで、させられたんだから引くに引けないといった感じだな。

そのため、大柄な男子高校生を追う形で走り始めるとそのすぐ後ろには、もう1人の男子高校生が走ってついてきた。

しかし、俺達は一步遅れたようで途中で大柄な男子高校生を見失ったようだ。

とは言え、俺達がいるのはエリアの端の方なので小型の端末を取り出して、マップを確認するとメンバーが1人減っている。

あの星人がやった、とは思えないのでどうやらエリア外に踏み出したようだ。

そうになると、頭の中に埋め込まれた爆弾によって頭が粉々に吹っ飛ぶので、適当な言い訳を考えてからこう言った。

「どうやら状況が変わったようだ。ターゲットとなる星人は10体いて、その内の半分は大柄でパワーがあるらしい」

「!?」

「なので、俺はそのターゲットを倒しに行く。君達はどうする?」

「お、俺はそんなのやってられないからすぐに帰らせてもらう。ドロップアウトしても問題ないだろ?」

「確かに。全部、やつつけに行くから問題ないさ」

「わ、私は……………」

俺がそう言うと、男子高校生はすぐに逃げる選択をしたが女性の方は戸惑っていた。

なので、俺は手持ちの武器の中で一つだけ、彼女に渡した。

「これは？」

「俺達が使っている武器の中では最弱だが星人相手には十分な威力がある。どうするかは好きに決めると良い」

俺はそう言うと、星人を倒すために走り出した。

初心者の方が戦えるとは思っていないし、女性の方にスーツと武器を渡したのも打算があつてやったことだ。

それに、あくまで戸惑っている彼らの歩調に合わせているだけで本来はそこまで優しくはない。

元々、俺個人は他人のことをどうでも良いと思つている上にあまり、人とは絡まずに単独行動をするタイプだ。

今回の場合、女性の方はスタイルが良かったので下心があつてやつただけだった。

そのため、この後に死んだとしてもやり損ねたなあと思うぐらいで特に気にしない。

そう思いながら、目標に向かって走っているとそこは惨劇となつていた。

「あーあ、今回もダメだったか」

俺はそう言いつつ、持っていたXショットガンを構えた。

女性に渡したのは、Xガンと呼ばれる拳銃のような銃でこれはライフル型をしている。

そのため、俺はそれを構えてロックオンしてから引き金を2回、引いた。

なんせ、大柄な男子高校生がついていった奴らはネギ星人の大人版に惨殺されてしまつているので、こういう場合は先制攻撃に限る（ちなみに大柄な男子高校生は無傷な模様）。

すると、大人のネギ星人は胴体のはじけ飛んで上半身と下半身が泣き別れになった。

まあ、黒い球から支給される武器の中では初期装備になる訳だがそれでも、当たれば星人に対しては充分な威力を発揮する。

如何せん、引き金を引いてから数秒間のタイムラグがあるので俺と

しては、強敵の場合は遠距離からスナイプする方が良い、

その方が、リスクは低い上に武器自体もかなり強いがあるので、今回の敵は弱そうだったらこの2つにした。

「オイ！ お前、人を殺してもなんともないのかよ!？」

「はあ?」

俺がそう思っていると、大柄な男子高校生がそう言ってきたので思わず、聞き返してしまった。

「どうやら、あの星人も人間と同等に考えているようだったのでこう言い返した。」

「まあ、それも含めて説明してやるからあの部屋に戻ってからな」

「なっ……てああ!？」

俺がそう言うと、転送が始まって俺は一足先にあの部屋に戻った。

今回の敵には、あまり得点が期待できないな。

第2話 説明

「……大したこと、なかったな」

「おー、お前が倒したのか」

「ああ、結局は腕力だけの星人だった。点数も低いだろう」

俺が転送され始めて、頭が例の部屋に来た時に先に来ていた西が俺のつぶやきに反応したため、俺がそう言うのと西は軽く舌打ちした。

正直な話、ネギ星人の前の星人討伐の際には多数の死者を出して結局、俺と西しか生き残らなかった。

その結果、彼は死んでいった仲間の中で戦闘力に長けた者を再生しようとしている。

まあ、そうは言っても今回の点数で俺の点数がトータル100点になるはずだ。

そう思っていると、俺の転送が終わったようで次の奴の転送が始まった。

そして、全員が転送を終えると今回は俺達以外では男子高校生2人とトレンチコートを貸した女性が生き残った。

その事実が確定すると、黒い球からアラムの様な音が鳴ったので俺はこう言った。

「ガンツ、採点を始めろ」

「採……点……?」

俺の言葉に、何も知らない彼らは戸惑っていたが続けてこう言った。

「でかいあんちゃん、あんたは俺に聞いたな? 何故、奴らを殺すのか、と」

「あ、ああ……」

「それはこいつが映し出す採点結果からわかる。今からあんたらの疑問は、ある程度解消されるだろう」

俺がそう言うと、ガンツと呼ばれた黒い球に画像が映し出された。

犬

0点

やる気なさすぎ

ベロ出しすぎ

シツポふりすぎ

「そう言えば犬もいたな」

「ははは、一丁前に落ち込んでやんの」

俺や西の言葉と、画像を見た犬はそれなりに落ち込んでいる素振りをしてガンツの前から退いた。

巨乳

0点

ちち でかすぎ

りゅーぎきみすぎ

「巨乳ってやっぱり私イ!? って、違うの! 誤解だから!」

「なんだ? 惚れたのか?」

「誤解なのになによこれ〜、0点だし」

次は女性だったが、ガンツのネーミングセンスは妙に的確だから俺も来た当初は散々な言われようだった。

昔のことを、思い出していると次に映し出した。

かとうちや (笑)

0点

なにもしなさすぎ

さけびすぎ

「……………」

「……………」

「次回から頑張ればいいじゃん」

ガンツの受け狙いは、軽く明るくなった雰囲気白けさせたので俺はフォローを入れる。

西くん

0点

TOTAL 87点

あと13てんでおわり

あともう少し

ガンバ

「竜崎に取られちゃったからな。仕方ないか」

「次の獲物は譲ってやるよ」

「勝手にやってる」

俺達のやり取りに、首を傾げる彼らだったが次の奴が表示された。
くろの

0点

巨乳みて ち○こたちすぎ

「はあ!? あっ……あっ!」

「オイオイ、ああいう状況で発情すんなよ」

ガンツからの評価で、俺がそう言うのと女性はくろのと書かれた男子
高校生から離れるような行動を取った。

全く、現実逃避も良いところだぜつと、画面が切り替わったな。
りゅーざき

3点

TOTAL 101点

100点めにゆくから選んで下さい

「100……点……」

「100点メニューって何だ?」

「ガンツ、メニューを出してやってくれ」

俺がそう言うと、画面が切り替わって3つの選択肢が出てきた。

1. 記憶を消されて解放される
2. より強力な武器を与えられる
3. MEMORYの中から人間を再生できる

「こいつを見ればわかるように、俺や西は100点を目指して星人を
殺しまくっている訳だ。だよな、西」

「そゆこと。ついでに、そいつは俺が来た時から既に5回はクリアし
ている猛者だ」

「えっ……」

「なっ……」

俺の言葉に、西が肯定してからそう返すと玄野や加藤達や俺から距離を取った。

何せ、俺がこの部屋に呼ばれたのは2年ぐらい前のことだったし、何よりも神様特典であらゆる武術に精通した肉体を持って、この世界に転生してきたからな。

そのおかげで、不良に絡まれても1発KOできる上に武道家に挑戦しても全くと言って良いほど、面白味もなく倒せてしまった。

そのため、今では適度に自主トレしながら勉学に励んでアメリカで通用する英語検定で、資格を取れるほどに頑張った。

そのおかげで、交友関係はあまりよろしくないがそれでも海外の友人は一定数、いるので年に1回は武術サークルをアメリカで開いている。

それも、神様特典によって可能としているのでそれが無かったら今頃、この世には俺という人格は存在していなかっただろう。

そして、何よりもガンツによって呼び出された俺はとにかく星人を倒しまくって7回ほど、100点クリアするレベルになっていた。

今回みたいに、星人が弱い場合もあったが時には俺以外が全滅するほどに強かった星人もいた。

特に、今みたいに装備が整っていなかった初期の頃はスーツ以外にXガンとXショットガン、そしてYガンぐらいしか、戦える装備がなかった。

あの時は、戦いに出れば死が隣り合わせな状態だったからとにかく大変だったよ。

それはともかく、こいつらに説明が必要だと思って話し始める。

「西の言う通り、100点にまで点数が達したらこうやってメニューが出てきて3つの選択肢から選べるって訳さ。ガンツ、今回も2番で頼む。次回までによろしく」

俺がそう言うと、俺の点数である101点から100点分が引かれてトータルが1点になった。

そのことを、確認した黒野達はおずおずと尋ねてきた。

「な、なあ。色々と聞きたいことがあるんだが良いか？」

「俺らが知っている範囲でな。ついでに具体的な質問で頼む」

「おい、俺も巻き込むなって」

彼らの質問に、俺がそう言うのと西が何か言ってきたが聞こえんな。ネギ星人をやっつける前にバカにしたツケだな。

そのため、玄野達はそれぞれが聞きたいことを決めてから俺達に聞いてきた。

「あんたらは何モンだよ」

「俺は竜崎誠、世間一般ではただの大学生さ。んで、そっちの中坊は西丈一郎。西も世間一般じゃ、ただの中学生さ」

「中坊って言うんじゃないよ」

「じゃあ、俺からも質問」

小柄な男子高校生である玄野の質問に答えると、今度は大柄な男子高校生が質問してきた。

「あんたらはこの戦いになれているようだけど、どれぐらいの期間、戦っているんだ？」

「俺は2年、西は1年だったかな。俺は自動車に轢かれてくたばったが西の方は知らん。興味もなかったしな」

「言っておくけど、俺は転落事故でくたばっただけだからな」

俺達がそう言ったが、玄野達は要領を得ない表情をしていたので付け加えた。

「昔っから繰り返してんだよ。今夜のような戦いをな。俺達が来るずっと前から、この部屋には数名ずつ送られてきては、死んだら補充される。俺が来てからもう、100人以上は星人との戦いでくたばったんじゃないだろうか」

「100人……」

「ガンツに聞いてみれば良い。ガンツ、死んだ奴の画像を出してくれ」

西の言葉に、ガンツが反応して画面が切り替わると縦横20マスぐらいの写真が出てきた。

その1マス1マスに、人の顔写真が載っていて1番右下には今回の戦闘で、くたばった奴らの写真が載っていた。

「そいつら全員、生き返らせようとした奴もいたがそいつが頑張る以

上に人が死んでいたからな。結局、助けようとした奴も発狂してくたばっちまったよ」

「……………1つ、聞かせてくれ」

「なんだい？」

「お、俺達ははつきり言つて1度死んだと思つた。そしてさつき、外の人間に見えてないようだった。それつて…生きてんのか？ それとも俺ら、本当に死んでんのか？」

玄野の質問に、俺達は顔を見合わせた。西は言いたがらないので俺が言うことにした。

「死ぬ寸前、助けられた奴がここにやってくると思っているだろ？」

「……………違うのか？」

「これは俺の推測になるが、この場にいる全員のオリジナルは本当にくたばっている」

「[!:]」

俺の言葉に、西以外は戸惑っているがそんなことはお構いなしに続ける。

「ファックスつて知ってるかい？」

「あ、ああ…………」

「あれとおんなじで、俺達は何かに備えて揃えるコピーのロボットみたいなものだ」

「ん？ それがどうかしたのか？」

戸惑う加藤に対して、玄野はバカ丸出しの質問をしてきたのでざつくりと説明する。

「ガンツの下で戦わされている奴らは、どんなに傷を受けようが上半身だけになるうが意識があるうちに星人を倒しきると元通りに再生されるんだよ。ガンツは差し詰め、ファックス本体だな」

俺がそう言つと、玄野達は啞然としていたので話を切り上げて帰ることにした。

「さて、さらに詳しく説明をしても良いんだが今日の出来事が印象的すぎて、話が頭に入らんだろうから、ひとまず俺は帰らせてもらう」
「……………」

「ついでに、このことを他人にばらすと頭が吹っ飛ぶから気を付けろよ」

俺がそう言うと、既に西はスーツについているコントローラーを使って透明になっているので、俺も透明になってガンツがいる部屋から出た。

そして、俺と西は特に会話もせず別れてそれぞれの家に帰った。

その結果、家に帰った後でトレンチコートを忘れたことに気が付いたが後の祭りだった。

第3話 日常と変化

「竜崎、お疲れ〜」

「おー、お疲れ〜」

ネギ星人を討伐した翌日、俺は普通に大学の授業に出席した。

大学に入学した当初から戦っている俺からすれば、今回の戦闘はヌルゲーの類であって別に疲れるほどではなかった。

そして、今日の授業は午前に1つで午後は2つだけだったので特に問題ではない上に、基本的に楽な内容だったので余裕もあった。

そのため、大学での数少ない友人と適度に遊んでから自宅に戻ると、普段とは違った光景が玄関で起こっていた。

「すう……………すう……………」

「……………」

予め、言っておくが俺は東京の大学に進学して来たお上りさんであり、決して誰かを玄関先で待たせておくような性格はしていない。

ましてや、実家の家族や親戚な訳がなく、玄関先で座りながら寝ているのはトレンチコートを貸した少女だった。

彼女の脇には、トレンチコートが入った紙袋が置いてあるから返すに来たのだろうが、寝るまで待つのは如何なものかと思う。

だから、彼女を起こすことにした。

「おい、嬢ちゃん。こんな所で寝てると風邪引くぞ。ほら起きろって」

「……………!? わっ、わあ」

「よお」

俺が、彼女の肩を持って揺らしながら起こすと彼女は驚いた様子で起きたが、相手が俺だとわかると安心したかのようにため息をついた。

そして、彼女を部屋に入らせてから玄関先で待っていた理由を聞いた。

「へえ〜、もう一人いたんだ」

「う、うん。だからどうしようかと思ったんだけど、あのコートの中に運転免許証があったからここまで来れたの」

彼女の言い分はあの後、玄野達と無事に家に帰れたがどうやら手首

を切った時に深さが足りなかった様で死に損ねてしまった、という訳だ。

そのため、俺のコートを持って彼女の自宅から飛び出した方がいいが財布や携帯なんかも置いて来てしまったので、先立つものがない。

そんな中、偶然にも小銭の入った財布と運転免許証があったのでここまで来れたらしい。

しかし、俺の家に着いたものの当の本人は外出中だったので仕方なく、玄関先で待っていたとのこと。

そして、眠気の襲われて寝ているところに俺が帰って来たから驚いたらしい。

驚いたのは仕方ないとして、今後の課題は彼女の寢床だ。

一応、俺もバイトをしているがあくまで趣味に使うお金を稼いでいる程度なので、一人一人分の宿泊費は出せない。

そんな背景から、そのことを彼女に聞いてみた。

「まあ、来ちゃったもんは仕方ないとして寢床とか、どうすんのさ」

「それは……………その……………」

「……………そう言えば、あんたは家事はできる方？」

「え？まあ、多少はやったことあるかな」

俺の問いに、彼女は答えに窮した様だったので話を変えて聞くと、そっちはすぐに答えてくれた。

そして、その答えを聞いた俺は2つの選択肢の中で片方をすぐに決めた。

それは――

「なら決定、住み込み家政婦として雇ってやるよ」

「え？……………って、エエエエ!？」

「安心しろ、住み込みと言ってもR―18みたいな展開は起きねーから」

「ああ、よかった〜」

そう、住み込み家政婦だ。

俺は1人で、上京して来たから親しい友人がいないし、俺を追いかけてくれる幼馴染もない。

小さい頃から、単独行動をしていたからぼっちだのなんだのと言われていたが、決して1人であることが好きという訳でもない。

あくまで、他人にあまり興味がなかっただけだ。

そのため、基本は一人やもめで大学の友人を部屋に招き入れたこともない。

だから、彼女1人が増えただけでは問題なく生活できるし、家事ができるんだったらお金さえあれば料理もある程度できるはずだ。味のよし悪しは別にしてな。

まあ、結局は自分の利益になるかどうかという打算で動いているので、今回は損失よりも利益の方が多かっただけだ。

とは言え、もしも家事ができないなんて抜かすなら適当なことを言って追い返していたところだ。

只でさえ、一人暮らしであまり広くないのに利益なしに今以上の狭さになるんだったら、彼女には悪いが他のところに行ってもらわない。

現実是非情である、という言葉がよく似合う光景なるな。

「ところでよお」

「何ですか？」

「名前を聞きたいのと服はどうするんだ？俺、そこまで金を持ってねーぞ」

「ああ、なるほど。確かに言ってますでしたね」

そんな訳で、俺が話を振るとさっきまで不安がっていた態度を変えたので、『こいつ、強かだな』と思いつながら彼女の話を聞いた。

彼女の名前は岸本恵、家の事情に苦心して自殺を凶った様だが運悪くガンツに転送された挙句、本体は生きていたんだから不運体質なのかもな。

そして、服に関しては今着ているやつ以外にないとのことで、仕方ないが彼女の家からくすねて来るしかないな。

「え、それって空き巣なんじゃ……………」

「大丈夫大丈夫、バレなきや罪に問われないんだよ」

「キメ顔で言ってますけど言ってる内容が酷すぎる」

「それとも男装系女子になってみるか？男物の服ならたくさんあるが」

「いやよ」

俺の答えに、彼女は呆れ返っているが男装は余りしたくない様で即答された。

幸いにも、ガンツスーツも持って着たらしいからそれを着させてから、彼女の自宅がある場所まで行った。

空き巣をするにしても、ガンツスーツの透明化する技術があるので監視カメラが設置されていても問題ないし、顔がバレなきや、犯罪を立件するのは難しいからだ。

翌日

そんな訳で、彼女の自宅近くまでやってきました。

「……………ちよつと待て、透明になるぞ」

「え？どうしてですか？」

「今から透明になっておけば怪しまれずに済む」

「なるほど……………」

俺が理由を言うと、岸本が納得した顔になったので互いに透明化した。が、同じスーツを着ているので俺達からすればバレバレだ。

「うう、本当にバレてないよね？」

「大丈夫大丈夫、何度も実証したから問題ないよ」

「より一層、不安になってきた」

失礼な。実証した当時はかなり恥ずかしかったんだぞ。今は、思っただけでは問題ないがからかわれてしまう要素だった。

今では、その事実を知っているのは誰一人として知っている奴はいないがな。

そんな訳で、彼女の自宅前まで来た訳だがそこで変化が起きた。

なんと、その家から出て来たのはもう一人の岸本であるオリジナルの岸本だ。

これで確定した。俺達はコピー商品で、星人と戦わせる道具でしか

ない。

そう思っていると、岸本が俺の袖を握って来たので振り返ると顔を俯かせ、肩を震わせていた。

どうやら、この事実は彼女にとってショックが大きかった様で俺は何も言わず、彼女が泣き止むまで待った。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫。ごめんね、待たせちゃって」

「気にしなくていい。踏ん切りがつけばそれでいいさ」

「誠は強いね。私はあんなに泣いたのに」

「まあ、こういうのには慣れたからなあ」

（強い、か。俺もガンツに呼ばれた当初は夢でフラッシュバックして不眠症になりかけたんだよなあ）

今でこそ、淡々と星人をやつつけているがガンツに呼ばれてあの部屋に来た当初は、心構えができていなかったから精神的に弱かった。

何度も吐いたり、悪夢にうなされたりして大変だったが当時、あの部屋の先人達に救われてここまでやってこれた。

だから当面はあの部屋で戦い続けるし、やめることはいつでもという訳ではないが100点を取ればやめることはできる。

なので、やめるんだったら自分が納得できるやめ方をしたいと思っている。

俺がそう思っ、彼女の言葉に返事を返すと彼女は笑ってこう言った。

「じゃあ、私の服。持ってくるね」

「ああ、足音に注意しろよ？ 見えなくたって音は出るんだからな」

「わかってるわ」

俺の注意に、彼女は明るくそう言うと言いつつ彼女の家に向かって行った。

第4話 初心者はやかましい

「うっ……………（ゾクゾク）」

「? どうしたの……………っ!？」

岸本と同居を始めてから、しばらくは服を買ったり、色んな本を買って勉強させたりしていた。

家事ばかりだと退屈だろうし、彼女自身も暇つぶしに本を読んで勉強したいと言っていたので丁度よかった。

あの部屋に行くまでは、普通の女子高生だったということ基礎知識はしっかりと身に付いていた。

俺自身は、彼女に何かを求めている訳ではなく、彼女自身がそう望んだからである。

じゃないと、一冊2〜3000円する資格の本を買ったりしない。

あまりの熱心さに、軽い気持ちで聞いてみるといつかは俺と肩を並べるほどに知識をつけたいとのことだ。

そこまで、俺は偉くねえぞと思いつつながら同居生活を送っていると、俺にとっては慣れた感覚が首筋を通った。

そのため、念のために岸本に尋ねてみた。

「岸本、寒気を感じたか？」

「う、うん。ゾクゾクって」

「久し振りにあの部屋に行くことになった。転送されるから早めに着替えた方がいい」

「……………わかったわ」

俺の質問に、答えた岸本はやや憂鬱そうな表情になったので俺は1つのフォローを入れた。

「別に無理して倒そうとは思わな。自分のペースでいい。始めのうちはゆっくりでいいから確実に倒していけ」

「……………」

「この俺も最初のうちはそうだった」

俺の言葉に、彼女は何も返さなかったが自分のスーツを持って洗面台に向かった。

そのため、俺もスーツに急いで着替えてからその上に普段着を着ると丁度よく転送が始まった。

「……………相変わらず、と言ったところか」

俺と岸本がレイの部屋に転送されると、柄の悪い奴らが4人とカップルと思わしき高校生が2人、そして老婆と孫が1人ずつ。

柄の悪い奴らは、大声で怒鳴り散らしているだけなので問題ないとして可能なら、老婆と孫にはスーツを着させたい。

あの人達には罪はないんだからな。……いや、これは俺のエゴか。

この部屋に来た以上は、あの人達も死んでいる訳でそれをどうしようなんておこがましいことこの上ない。

なので、俺は岸本と一緒に壁際で佇んでいると前回の生き残りである加藤が新入り達に、必死の助言をした。

しかし、彼らはそれを受け取らずに逆に馬鹿にするような笑い方をしたが、黒い球から武器を取り出せるようになる玩具を見るかのように取り出した。

加藤は、そんな中でも必死に訴えかけるが彼らにとってはパスワードスーツはダサいと感じたようで、全くと言って良いほど聞き入れない。

しかし、その一方でカップルの高校生や老婆と孫にはスーツを着せられたようだ。

まあ、柄の悪く我の強い奴ほど先に死んでいくので静かになって良いなあ、と思っているところあることに気が付いた。

それは――

「オイ、玄野。まさかだと思うが、スーツを忘れたのか？」

「あ、ああ……………どうすればいい？」

「取りあえず、生き延びることを考えろ。話はそれからだ」

「わかった」

俺がそう言うのと、緊張して上がっていた玄野は少し落ち着いていたが西はめざとく気が付いたようだ。

「まさか……はははは、持って帰ったのか？　はい、1人死亡。決してえ
〜」

「まだ決まった訳じゃなからうにそう言うなって」

「オイオイ竜崎、そいつの肩を持つんじゃねえだろうな？」

「持たねえよ。結局は自分でなんとかしてもらわんといけんからな」

西野発言に、俺がそう言うとか加藤が俺に聞いてきた。

「竜崎、何か方法はあるのか？」

「……………(チラツ)」

「……………(ふるふる)」

加藤の質問に、俺は西を見ると答えなくて良いという合図が来たので俺はこう言った。

「ホラー映画なんかの鉄則を思い出すことだな」

「そ、それだけかよ」

「まっ、なんとかするんだな」

俺がそう言うと、玄野は絶望的な顔になったが俺はそれを無視して壁際に寄りかかった。

岸本は、玄野を心配そうに見ていたが俺の影響だろう。とやかく言うことはなかった。

しかし、ここで側の悪い奴らが悪ふざけで西に対してある行為をした。

ギョーン

「……………」

玩具みたいな音だがやらかしたな。西は自分に敵意を向けられるのが大嫌いなんだ。

だから、その象徴である銃を向けられた挙句、撃たれたともなれば黙っているはずがない。

そのため、西は腕に隠し持っていたXガンをあつという間に取り出してから、撃った奴を撃ち返した。

その行為に、柄の悪い奴らが騒いでいるが数秒後には撃った奴の頭

が弾け飛んだ。

その光景に、周りは呆然としていたが返り血を浴びた奴らは叫び声を上げて阿鼻叫喚となったが、そんな中でも俺は淡々と老婆とお孫さんの元に行つてこう言った。

「この光景は見ない方がいい」

「……………（コクコク）」

老婆は顔を青ざめながらも、お孫さんに今の光景を見せまいと彼の顔を隠すように抱きつきながら俺の言葉に頷いた。

この騒ぎの中、転送が始まったので俺は必要な武器を取りに別の部屋に行くとそこにはZガンとエアバイクがあり、Xショットガンを太もものホルスターに取り付けるとZガンを持ってエアバイクに跨った。

今回のターゲットは田中星人で、ロボットじみた外見をしているので多数を倒さないといけないのかも、と思ったのでこの選択になった。Xショットガンは護身用だな。

そして、俺が転送されると他のメンバーが橋から川を見ていたので、何かかと思つて空中から見てみると西が叫んでいる。

「竜崎!!スーツが!スーツがオシヤカになった!!助けてくれ!!」

「はあ、何やつてんだよ。あの中坊は」

俺は状況を整理するために、西の周囲を見渡すと西と共に川にいるのは件の星人でその攻撃でスーツがダメになったようだ。

一方、玄野達は西の言葉が頭にきたようで助けようとしな。それに、玄野達は俺に対して助けるなどかほざいているがそう言うのは、一人前に星人を倒して100点クリアすることだな。

そのため、俺は持っていたZガンで田中星人を一撃で始末すると西は橋の近くの階段を使って登ってきたので俺も橋に降りた。

「助かったよ、竜崎」

「これで貸し1つな」

「……………チツ、何が望みだよ」

「今回は援護に回れ。そしたら助かるかもしれん」

俺がそう言うと、西は渋々ではあるが頷いたのでエアバイクとX

ショットガンを彼に渡すとすぐに飛び立った。

それを見た俺は、一息つくくと玄野が俺に突っかかってきた。

「おい、竜崎!!なんであいつを助けた!!あいつは仲間じゃないんだぞ!!」

「それはお前の都合だろ?俺は俺の都合で動く」

「そうじゃなくてだな!!」

「俺に指図したければとつとと100点クリアすることだな」

俺がそう言うと、玄野は何も言えない様子で言葉にならない声を上げていたが加藤と岸本、そして今回が初参加となる男子高校生は俺の指示を仰いだ。

「竜崎、これからどうすればいい。本来は転送が始まると思うんだが……………」

「さつき、コントローラを弄ってマップを見たらもう一つ、星人の反応があった」

「もう一体、いるんですね」

「まあ、一か所にまとまっているかもしれないから注意するんだな」

俺がそう言うと、今度は柄の悪い奴らが騒ぎ出した。

内容は、走っていたらいきなり彼らの1人の頭が吹っ飛んだらしい。

よく見れば、3人から2人に減っているなのでそれは事実として子供が家に帰りたいと駄々をこね始めたので、そいつらの意識はそっちに向いた。

それにしても、さつきから騒いでいるだけなのでいい加減、鬱陶しくて仕方ないな。

もう一つ、持ってきたXショットガンを彼らの足元に撃って注意を俺に向けると、こう言った。

「自由になりたかったら俺についてこい!それ以外の奴らは知らん!好きにしろ!!」

俺はそう言って、星人がいると示す場所へと向かった。

第5話 ボス？あぁ、弱かったよ

「ふう、2体討伐完了」

「こつちも1体倒した」

「おばあちゃん達、大丈夫かな」

西を助けた後、田中星人を倒しに来てくれたのは加藤と岸本、そして初参加の高校生達だった。

柄の悪い奴らは知らん。玄野も残ったが今頃、不良達に絡まれているかもな。西は今回、初っ端からスーツが駄目になったので雲隠れしているかもな。

そして、田中星人5体を共同で倒したのだが老婆とお孫さんは、恐怖におののいて逃げ出してしまった。

そのため、加藤達と探していたがガレージの中で光ったのを確認した俺達は岸本と男子高校生にそこを制圧させることにした。

なにぶん、Zガンは威力こそ大きいがそれに比例してサイズも大きいので、狭い空間では取り回しが利かない。

そのことから、同居人である岸本にやらせることに気が引けるが1体ぐらいはやって欲しい、と思っていたので行かせると無事に倒せたようだが老婆とお孫さんは駄目だったようだ。

鼓膜と目から、出血していることから音かそれに類似するもので田中星人は攻撃するようだ。

しかし、死んでいく人を見てそれに慣れた俺は冷静に考えることができるが、加藤達はまだ慣れていないようで吐いたり、死んだことへの悲しみを露わにしていた。

しかし、これだけやってもまだ転送されないとすると早めに星人の巣窟を特定して、破壊した方がいいな。

制限時間内に、全滅させないと倒した時の得点が無駄になる上にトータルの点数もゼロになってしまう。

なので、コントローラを弄って時間と星人がいる場所を特定すると加藤や岸本に伝えた。

「悲しんでいる時に悪いが、時間も押しているんでね。俺は先に星人

を倒しに行くよ」

「あ、あんたは……………」

「ん？」

「あんたは悲しくないのか？目の前で人が死んで、おばあちゃんと子供が死んで悲しまないのか？」

俺の言葉に、加藤が反応してそう言ったので行きそうになった足を止めた。

この戦いに、慣れた俺ではあるが加藤の言い分も分からなくもない。

何故なら今回、あの部屋に呼ばれたメンバーの中ではかなり非力な範囲に入る奴らだった。

だから助けたい、とか守りたいと言った気持ちがあるんだろうがそう言ったものは無駄になることが多い。

何故なら、最低限のルールを守らない奴らや非力な奴から死んで行くからだ。

人間と星人との間には、言語や外見などの決定的な壁や溝があつて、どうしても乗り越えることができない。

それ程までに、力関係に差があるからミッションとして討伐依頼が来る訳で別に人助けがメインじゃない。

あの部屋に呼ばれた当初、俺も加藤が持っている気持ちもあつたが守ろうとするとキリがない。

幾度となく、続けられるミッションと死んでいって補充されるコピー人間。それらを見続けた結果、俺は自分なりの答えに辿り着いた。

それは、この地獄を終わらせるんだつたらとつとクリアして強い武器を入手して、奴らを殲滅することだ。

これは、妙な正義感で動いている訳ではなく、自分が助かりたいからやっていることだ。

そのため、俺は加藤を見てこう言った。

「人助けしたいんだつたらそれ相応の力を持って。じゃないといい迷惑だ」

俺はそう言い残して、星人がたむろしている場所へと向かった。

「ふむ、ここだな」

俺はコントローラを弄って、場所を確認すると古びたボロアパートに星人がいるらしい。

とは言え、今回のミッションは複数体の星人が出てきたのでその親玉がいるかもしれない、と考えてZガンを用いてアパートを更地にするが如く、連続で引き金を引いた。

連続で撃つと、威力は下がるが強襲には充分な威力であり、更地になる頃には何体かの田中星人が破壊されたようだった。

とは言え、更地にしても転送されないから他にも星人がいるのかと周囲を見渡すと、俺の右斜め前方に何か落ちてきた。

よく見ると、それは人の頭で柄の悪そうな男性のものだった。

そのため、俺は夜空を見上げると親玉と思わしき鳥人間のような奴が物言わぬ存在になった死体を、地面に落としながら俺を目指しながら急降下してきた。

そのため、急いで距離を取ると地上に降り立ったそいつは威嚇しながら接近してきた。

しかし、鳥類特有の翼が邪魔をして上手く走れないようなので、急に距離を詰められることはなかった。

その結果、俺は落ちていてZガンを構えると星人の親玉と思われる鳥人間に向けて撃った。

そのコンマ数秒後に、空気の変化に気が付いた鳥人間は飛び上がるうとしたが頭上からの圧力で、膝をついたので俺は連射してそいつの息の根を止めた。

連射した後、そいつがいた場所は紙束に穴開け器で穴を開けたかのような窪みができていた。

それを確認した俺は、その場を後にして立ち去ろうとしたら丁度よく、イヤな笑みを浮かべたエアバイクに乗った西が現れた。

「よう、倒したんだな」

「どこかの間抜けと違って冷静に対応した結果だな」

「んだとこらア！」

余裕をかましていた西だが、俺の言葉に怒りを表したので軽く口論になりそうだったがその前に、転送が始まって俺達はあの部屋に向かうことになった。

「大分いなくなったが対処法を知らなきゃ、こんなもんだろう」

俺と西が、ガンツがいる部屋に転送すると既に俺達以外のメンバーは転送されていたようで、すぐに採点が始まった。

犬

0点

やるき感ぢられづ

なんかしろ

「なんかしろってハハハ、犬に無理言うなつて」

「……採点って何の意味があるんだよ」

「後で説明するよ」

初参加の高校生が、俺に聞いてきたが説明が面倒なので全員のが終わってからにする。

じゃないと、採点結果を見落としそうだからな。

巨乳

10点

TOTAL10点

あと90てんでおわり

「何……巨乳って」

「でも10点も採ってんじゃん」

星人を2体、討伐しているので1体あたり5点と言ったところか。かとうちゃ (笑)

5点

TOTAL5てん

あと95てんでおわり

「かなりの数、戦ってきたよね？」

「いや、実際に死なせたのは1体だけだ。死なせないと点数が入らないんだよな？」

「ああ、討伐未遂は点数に加算されない」

岸本の疑問に、加藤が答えて俺に聞いてきたので素直に答えた。隠していても意味ないし。

サダコ

0点

ホモのあと つけすぎ

いなくなりすぎ

「サダコって誰だ？」

「台所にいる人じゃない？」

「ホモって誰だ？」

「死んだ奴の中にいたんじゃないの？」

サダコは、初参加の女子で髪が異常に長くて顔がよく見えない奴だ。

ホモは……いったい誰だろう？ 玄野でも、柄の悪い男性でもなさそうだし。

ホモ

10点

TOTAL10点

あと90てんでおわり

ホモが誰なのか、判明した瞬間に俺や玄野達、柄の悪い男性は一気に壁際まで後ずさりした。

その内、ケツでも掘られるんじゃないだろうか。

「違うっての!!ふざけんなテメーら!!」

「キモいツツーの!!近づくなてめえツ」

「だッ誰がツ!!お前なんかツ!!」

「竜崎君まで……ホモだからってそこまでそんなにまで嫌わなくても」

俺達がドン引きしていると、岸本がクスクスと笑っていたがホモと書かれた男子高校生はやや照れながらも否定し続けた。

全く、ガンツは一体何を求めてんだか。

チンソウダンその1

0てん

目つき悪すぎ

パシリ使いすぎ

「俺かコラー！チンソウダンって!!んだこれ！チクシヨウ!!」

うん、まあアイツに関しては何も言うことはない。

てか、いい加減に音量を落としてくれ。うるさい。

パシリ

5点

TOTAL5てん

あと95てんでおわり

「へえ、一体倒したんだ」

「あ、ああ……なんとかな」

どうやら、玄野は安全圏からちまちまやっていたら倒せたらしい。

その直後、星人の親玉がチンソウダンのメンバーの1人を攫って殺したらしいがな。

西くん

15点

TOTAL102点

100点めにゆくから選んで下さい

「100点メニュー？」

「100点を取ると3つの選択肢が選べるんだ。1つ目はこの戦いからの解放、2つ目が強力な武器の入手、3つ目は死んだ人間を生き返らせる」

「そんなのができるのかよ!？」

「100点を取ったらな」

ホモの質問に、俺がそう答えるとチンソウダンが聞いてきたのでそう繰り返した。

目標が決まれば、俄然やる気になるのは当然で初参加の奴らもやる気に満ちていた。

一方、西は何を選んだかというとうっかり2番の強い武器を選んだため、訂正を求めたが結局それは通らずにかなり悔しがっていた。

死にそうになったもんね。シカタナイネ。

りゅーぎき

53点

TOTAL54てん

あと46てんでおわり

「当然だな」

「そう言えば、この中だと1番倒していたな」

「ボスも倒していたし」

今回のミツシヨンを思い出して、加藤と西がそう言ったが玄野は妙にふて腐れていた。

理由は知らん。興味もないし。

とは言え、今回の戦闘で親玉が18点で残る35点はロボットみたいな奴だろう。

西を殺そうとしていた奴と共同で倒した2体、ボロアパートにいた4体でこれも長年の経験だからこそできることだ。初めのうちは、加藤や岸本と同じぐらいの点数しか採れなかった。

とは言え、今回も死人を出しながらも無事に終わったようなのでドアが開いたため、俺達はそれぞれの家に帰還した。

第6話 仏像戦、突入!

「ほい、あの講義のまとめ」

「ああ、サンキュー。いつも悪りいな」

「そう思ってるなら、ちたあ努力しろや」

「いやー、目の前に大先生がいるなら使わない手はないでしょ」

「だったら昼飯奢れや」

「松戸屋の定食でどうや」

「ライス大盛りでな」

「シカタナイネ」

俺は今、大学の友人と駄弁っているがこいつとは妙に話が合っただけこれ、2年の付き合いになる。

こいつとは最初、必須科目の授業で同じになってから内容をまとめたルーズリーフを渡した時からの付き合いといったところだ。

いわゆる、腐れ縁で普段はあまり他人とは関わらない俺でもこいつとはよく駄弁る。

その結果、俺が講義内容をまとめてそいつに渡すとその日の昼食代が浮くという寸法だ。

俺自身、そういうった関係で良いと思ってるし、そいつも安い授業料だと思っただけ出してくれる。

これが「Win-Win」って奴で、互いに不満はないので当面はこの方法をとっていく。

そのため、俺はその日の昼食をそいつと一緒に食べてから家に帰った。

今日の講義は、午前中だけだったのでこの後はジムで運動をしようと思っただけだと、偶然にもよく知った奴と遭遇した。

「……ん？」

「あっ」

「……誰？」

そいつは加藤で、彼の隣には小学生のランドセルを背負った少年がいた。

そのため、話を聞くとうどうやら加藤の弟で歩と言うらしいが中学生の時に両親を亡くしているせいで、親戚の家で肩身の狭い思いをしながら生活しているとのこと。

まあ、俺とは正反対の生活を送っているようだが今の俺にはどうすることもできない。

タダでさえ、岸本と同居しているのにそこに2人が加わると足の踏み場がなくなるほど、狭くなるのでできれば彼らだけでなんとかしてもらいたい。

とは言え、このまま放置するのも気が引けるしなあ。

ん？ 加藤の話を聞いていると、どうやら彼はバイトをしているよ。うなのでそのお金が貯まれば、安いアパートに引っ越すらしい。

そのため、俺はある提案をした。

「そつちでも安いアパートを探してくれるのか？」

「こそ、仕事がない時は結構暇だね。こう見えてある程度の範囲は知っているよ」

「……何でそんなにしてくれるんだ。あの部屋に行ったら無関心を装うのに」

「何でってそりゃあ、戦場じゃないんだからのんびりとするさあ」

ガンツがある部屋とは、打って変わってのほほんとした性格に加藤は戸惑っていたがそれでも、俺が家庭環境を察してこう言ってくれたのはありがたかったようだ。

彼らと別れる際には、兄弟揃って頭を下げ感謝の言葉を口にしていたが結局は俺の暇つぶしでしかない。

人間というのは、退屈すぎるとやっていけないようになっていきやすい。だから普段はやらない行動もしてしまった。

俺も人間を捨てた訳じゃない、と実感した一時ではあったがそれからしばらくしてまたもやガンツからのミッションを言い渡されることになる。

「これはこれは。随分と多種多様な人間が揃ったようで」

「本当ね。前回までのが嘘のよう」

今日も相変わらず、岸本と一緒にガンツがおいてある部屋に呼び出されるとそこにはお坊さんからヤンキー風の派手な格好をした男性、ミリオタデブに胴着を着た男性、別嬪さんにメガネの男性と本当に多種多様だ。

それ自体は、特に悪いことではないがお坊さんが独自の世界観を恥ずかしがらずに、垂れ流すのには流石の俺ですら嘖き出してしまうものがある。

だってよお、これから始まる戦場でお経を唱えても意味がないってのよと思っていると、前回までの生き残り組が続々と集まってきた。

玄野に加藤、ホモにサダコ、犬に西とこれから起こる出来事を予想している奴らは、別にお経を唱えるほどのバカではないようだ。

特に、西なんかはお坊さんをニヤニヤとバカを見る笑みを浮かべているので察しの良い奴らは、ここが自分達が思い描いた地獄でも天国でもないことを悟ったようだ。

そして、加藤が事情を説明すると何人かは半信半疑で次に起こることを待っていると、いつも通りの音楽が流れて黒い球の壁面がそれぞれの方角に出た。

そのため、ミリオタデブは面白そうにXショットガンを持つと他のメンバーも、各々の銃を持っていく中で俺は西と岸本と一緒に隣の部屋に向かった。

そこにはZガンとエアバイク、そして高さが1メートルぐらいの台に乗っている横30cm、縦20cmほどのタブレット型コンピュータがあった。

そのため、俺がそれを操作するとハードスーツや巨大ロボなどが項目ごとに分かれているので、その中から装備していくものを選ぶようだ。

そして、今回のミッションはおこりんぼう星人という仏像星人らしいのでお寺かあ、仏像が多そうだなと思いつながらハードスーツを装備

することにした。

仏像と言えば木材や岩石、金属から出来ているものまでであるので今回の星人は気が抜けそうにないな、と感じたからで西は自分の得点で獲得したZガンを装備することにしたらしい。

それを見た俺は、自分の得点で獲得したZガンを岸本に持つていくことにしたが彼女は重たいと、呟きつつも手離すこともないままに転送するのを待った。

一方、俺はハードスーツの他に何も持つていかずにタブレット型コンピュータを台に置いて、元の部屋に戻ることにした。

如何せん、ハードスーツの太ももには何もつけない上に肘から肩に向けて刀剣が伸びていて、それを使った戦闘術を行えば大抵の星人は討伐できる。

元々、あらゆる武術をマスターしているので巨大な腕をトンファーのように使えば、余裕で肘から伸びる刀剣も使うことはできる。

それぞれが選り終えた後、ガンツがある部屋に戻ると転送が始まったようだが加藤の説得によって何人かはワードスーツを持つていた。

その一方で、前回生き残った柄の悪い男性は来なかったようなので、ここに来る間にくたばったようだが理由はおおよそ見当がつく。

どうせ、Xガンを他の人間に見せびらかしたり、ガンツのことを話したりしたんだろう。

まあ、うるさい奴が自爆しただけなので再生しようとは思わないし、あんな奴を復活させて何の得があるのかが疑問だ。

そして、最後まで残った俺が転送されるとそこは寺院のようだった。

「竜崎……なのか？そのスーツは一体……？」

「加藤、こいつは100点メニューで獲得した強武器だ。普通のスーツよりは耐久力はあるし、攻撃力もあるから結構使えるぞ」

「すごい……」

加藤の質問に、俺がそう答えると岸本は畏怖の感情と共にそう呟いた。

何故なら、ハードスーツを着込んだ俺の身長は2メートル以上になっている上に、腕は大木のように太くなっていて手は握り拳でも地面に着きそうなくらいに長い。

そして、顔には10個の蒼い光が縦2列に並んでいて如何にもメカメカしい出で立ちだからだ。

そのことに、ミリオタデブが興奮しているがその中でも何かの冗談だと思つて、帰ろうとした奴らが数名いた。

その行動に気が付いた加藤が、呼び止めに行つたが間に合わずに先頭を歩いてエリア外に出た男性の頭が吹っ飛んだ。

そのことに、帰ろうとした奴らが動揺したので加藤は大声で頭が吹っ飛ぶことを言つたが、それは脅迫じみたものでも効果はあつたようだ。

頭が吹っ飛ばなかつた奴らは、引き返してきてこれからどうするかを考え始めたので俺は単純明快なことを行つた。

「加藤、Xガンを使って扉を開けろ」

「え、でも……」

「どうせ、殲滅しないといけないんだから不法侵入しても問題ねえよ」
「……………わかつた」

俺の指示に、加藤は戸惑いながらも門の中心を縦に連続して撃つた。

すると、かんぬきと一緒に壊れたのでこれでは自由には入れるようになつた一方で変化が起きた。

それは、門の両側に立っていた阿吽の像が動き出したことでその場は軽い混乱状態になつたが、ハードスーツを着た俺とそれまで黙っていた西が、行動に移して一瞬で制圧した。

正確には、外から門を見て見て左側に立っていた仏像に対して俺がビームの連続発射で、蜂の巣にするのと同時に西は右側に建っていた仏像を、Zガンで汚いミンチにした。

た。これで、第一関門は突破したので俺達は慎重に寺院に入っている

第7話 千手戦、それはヌルゲーとは言い難く……

「大量に出てきたぞ!!」

「とにかく、1体でも多く潰してくれ。これを1人でやるのは面倒だ」「当然だ!!」

寺院の入ると、星人側は既に臨戦態勢を取っているようで10体ほどが待ち構えていた。

そのため、加藤達はすぐに戦闘態勢に入って岸本もZガンを構えてから、ロックオンして引き金を引いた。

すると、1体の星人が消えるのと同時に地面に丸い陥没ができたので、これで1体を倒したことになる。

それと同時に、武器を持ったメンバーがそれを使って戦い始めたが武器を持っていないメンバーは、俺や西にとつて雑魚同然のやつでも苦労しているようだ。

如何せん、パワードスーツすら着込んでないので筋力的には急激な上昇が求められないからだ。

そいつらの援護を、加藤達に任せて周りを見渡すと本殿から巨大な仏像が出てきた。

高さは10メートルほどあり、Xショットガンでは火力不足だと思えるので俺はハードスーツの掌からビームを発射して足を使えなくした。

すると、巨大な仏像は急に片足が短くなったのでよろけた後に片膝をつくと追い討ちをかけるように、もう片方の足も使えなくした。

これで、対象の機動力を奪ったのでいい的だなど思っているとそいつに対して、Zガンを使った奴がいた。

初めは西が使ったのかな、と思つて辺りを見渡すと俺から少し離れた場所で岸本がそいつに向けて撃つたことがわかった。

理由はわからんが、星人と戦うことを決断したようでその表情から迷いは見受けられない。

ただ、星人に殺される存在から星人を狩る存在になった岸本は1発では死なない巨大な仏像に対して、何度も何度も引き金を引いて念入

りに殺していった。

そして、周囲の戦闘が終わる頃には巨大な仏像がいた場所にはそれなりに大きいクレーターができていた。

「岸本、大丈夫か？」

「うん、私は大丈夫。それよりもこのマップを見て。星人の反応が2つもある」

「……………手分けして潰した方がいいな」

巨大な星人を倒したにも関わらず、呼吸の乱れが感じられないので戦うことを決めたようだ。

それを確認した俺は、彼女が示したマップを見ると確かに星人の反応が2つもあるので、俺は加藤達も集めて作戦会議を開いた。

「……………わかった。俺達はこつちをやるから竜崎はサダコ達と一緒に向こう側をやってくれ」

「わかった。迷いはあるだろうが確実にやってくれ。じゃないと挟み撃ちされるからよ」

「ああ」

俺の言葉に、加藤は短くそう言う俺達は二手に分かれて行動を始める。

加藤についていったのは、岸本の他に玄野と別嬪さんで、ホモ・サダコ・俺のグループについてきたのはワードスーツを着ていなかったり、初心者メンバーだった。

この時点で、お坊さんとミリオタデブは既に死んでいて自衛官の身分を持っているという男性は、屋根上に上って狙撃に専念してもらっている。

そのため、俺やホモ達についてきたのは今回が初参加の3人だけで俺達は、星人の反応があった建物に向かうと複数体の仏像があった。

仏像の前に立ったホモが、Xガンを構えて星人かを確認すると5体全部が星人らしい。

そのことがわかると、俺はすぐに腕を構えてビームを発射できる態勢に移ったが、胴着を着た男性が1体の星人に対してパンチを繰り出した。

しかし、いくら肉体的に強かったとしても星人の強さには敵わず、馬乗りまでは良かったが他の星人の蹴りでくたばってしまった。

スーツを着ていないメンバーは、すぐに外に出ようとしたが俺は構えた状態から、ビームを発射して立っていた3体を一気に殲滅した。

その後、出ようとした2人はそのまま加藤達を呼びに行つて俺とホモ、サダコは残る2体をどうやって倒すかを考えた。

「オイ、あんちゃん達」

「何だ、竜崎」

「俺は千手をやる。だから残る1体を倒してくれないか？」

「良いのか？」

「アイツの実力は未知数だ。半人前には荷が重すぎる」

「……………わかった」

ホモがそう言い、サダコと一緒に残っている仏像に向かうと俺は室内に入つて、千手観音に擬態した星人と対面した。

すると、今まで座っていた千手は立ち上がつて星人の言葉を発したが当然、俺が理解できるような内容ではないのでビームを6発連射した。

撃たれた星人は、避ける素振りを見せなかったので当然のことながら穴あきチーズのようになったが、腕に持っていた時計のようなものが動き出して傷が一気に修復した。

どうやら、それぞれの腕に持っている小道具を破壊しないと討伐の難易度がかなり高くなるようだ。この間にホモ達は手持ちのXガンで残る仏像を破壊したようだった。

視線を千手に戻すと、千手は酒瓶のようなものから液体を出したので俺はホモ達がいる方向に走つて、彼らを掴むと壁を壊しながら外に出た。

一方、ホモ達は状況が理解できていないようで俺が手を離すと彼らは俺に聞いてきた。

「竜崎、どうしたんだ？急に外に飛び出したから頭を打ったぞ」

「千手…………アイツは強いぞ。アイツと対面した時、強敵だった星人と対面しているかのように勘が危険信号を出していたんで外に飛び出

しちまった」

「!? そこまで強いのか?」

「ああ、少なくとも室内で戦うような相手じゃないな」

俺がそう言うと、ホモとサダコは驚愕したような表情を露わにした。

何故なら、前回の戦闘では余裕の表情で星人を討伐していた俺がそう言ったんだからな。驚くのも当然と言えば当然だ。

ホモ達と一緒に、千手がいる建物の正面に向かって移動するとそこから千手が出てきたので、俺はあることを彼らに伝えた。

「ここは一旦、俺が引き受ける。だからお前らは加藤達を呼んでくれ」
「……いい、いいのか?」

「言いたくはないが、お前らは足手纏いだから一定の距離は取って欲しい」

俺がそう言うと、彼らはまたもや驚愕したがだからといってそれに対するの反論はせずに、加藤達を呼びに行こうとしたら加藤達とも合流した。

そして、加藤達は加藤達で俺の様子を見て驚いていた。

「竜崎、背中のコードが溶けている」

「ああ、酒瓶から出た液体の影響だな。ガンツのスーツも溶かす勢いだっただからむやみに接近するなよ?」

「わかった、他に気が付いたことはあるか?」

「円形の小道具を持っている腕がわかるか?」

俺がそう言うと、加藤達は腕の中から時計らしきものを見つけて聞いてきた。

「……時計みたいなものか?」

「ああ、あれを壊さないと何回破壊しても再生されちゃう」

「わかった。岸本は持つてる武器で道具を破壊してくれ」

「わかったわ」

俺からの情報で、加藤がすぐに指示を出してきたので覚悟はある程度、できたように見受けられる。

それから、俺達はそれぞれが一定の距離を取っていつペンにやられ

ないようにしながら、千手を囲いながら攻撃を行ってダメージを与えていった。

その中で、俺は冷静に千手の行動パターンを見極めていった。

まず、防御力は一般的な星人と同等で大した攻撃でなくてもXガンで充分倒せる。

だが時計のような小道具で、逆再生しているかのように体を修復しているからいくらダメージを与えても意味がない。

その上、酒瓶のようなものに入っている液体も無尽蔵に入っているようで、それから5回も出したのに尽きる気配を感じない。しかも当たった地面が溶け始めているからスーツの防御力は意味がないな。

挙げ句の果てには、ガラスの箱みたいな物からビームも出るから迂闊に接近もできない。

そのことから、俺がビームを連射して千手の動きを止めるとそれに続いて岸本もZガンで、千手をミンチにすると残った腕を加藤達が破壊していった。

その結果、1回目は失敗したものの2回目には再生されながらもその機能を、持っている時計のようなものを破壊できたので後は千手を破壊するだけだ。

そう思っていると最後の抵抗なのか、千手が持っていたガラスの箱みたいな物からビームが出て加藤達を呼びに行った男達が死んでしまった。

それを見て、俺以外のメンバーは軽く動揺したのだが次の瞬間、ビームは見当違いな場所に向けて千手の背後に向いた。

それと同時に、今までどこに行っていたのかが分からなかった奴が姿を現した。

どうやら、スーツの防御力を上回るダメージを受けてしまったので透明化が解け、姿を現したのと同時にくたばってしまった。

そして、くたばった奴の脳みそを千手が食らうと予想以上のことが起こった。

「ちよつと待ってくれ。僕だ……宮藤だ」

第8話 仏像戦、終了

「ちよつと待ってくれ。僕だ……宮藤だ」

この声……どうやらさっきの攻撃でやられたメガネの男性らしい。さっきの攻撃で、そいつの身体はバラバラになっていてやや残念そうにしていたが、現在の感覚をつらつらと語ってくれた。

それによると、千手は宮藤と言う男性の言葉と知識を得たことによつて日本語を喋れるようになったが、後ろから狙い撃ちにしたところをあつさり倒されてしまったことを残念がっていた。

「……でもね、この体……とっても気分が良いんだよ。なんていうか、全てがクリアに感じる。力もみなぎって「きめえなあ」……は？」

宮藤と融合した千手の話を遮るように、俺がそう言うときいつは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしたので俺は話を続ける。

「いや、キモいわ。星人に食われたのにそれを優越に感じるとか、真面目に気持ち悪くて吐きそうになるなあ。そう言うのをな、世間一般では醜いとも言うんだよ」

「醜い……だつて？」

宮藤が、醜いという言葉に反応したので俺は話を続ける。

「そうそう、戦闘で顔面の半分が崩壊している上に腕の半分がない状態を醜いと言わずになんて言う？」

「……」

「それに、星人という化け物との混合体だなんて笑いな」

「……（ワナワナ）」

「それを気分が良いとのたまうなら、全国の障害者に対してジャンピング土下座で謝るんだな。この化け物め」

「……化け物化け物ってうるさいんだよお！」

「おおつと!!」

俺の言葉に、我慢できないように宮藤と名乗った星人がビームを発射してきたので、俺が横にジャンプすると混合した千手星人が地面に消えた。

その直後、「ズドン！」という大きな音が聞こえてきたので岸本を見たが、彼女はZガンを構えていなかった。俺はあることに気が付いた。

それは、今の今まで西の姿を見ていないと言うことである。

「西！ お前がやってくれたのか!？」

「ふん、今ので前回の借りを返させてもらう。感謝することだな」

そのため、立ち上がった俺が彼の名前を呼ぶと余裕の笑みを浮かべて姿を現してからそう言ったので、俺はため息を吐いて頷いてから陥没した穴を見た。

その穴には、血が溜まっているのでくたばったかなあと思うと紫色の物体が出てきて、形を形成すると腕が6本で尻尾には鋭利な刃がある全長2メートルほどの怪物が出てきた。

「よくも僕をコケにしてくれ、グバァ！」

「取り敢えずなあ、よりキモくなったからとつとと死ねや」

宮藤だった化け物がより一層、醜くなったので俺はビームを連発して穴あきチーズよりも穴ができるぐらいに撃ちまくると、尻尾だけになったそいつは完全に沈黙した。

そして、そのことが確かな出来事になるとガンツによる転送が始まったようだ。

「帰れる！ 帰れるぞお!!」

「やったぜ」

「帰ったらドライブに行きましょう?」

「あ、ああ……」

「竜崎くん、ありがとう!」

「気にしなくていい。俺がやりたいからやったまでさ」

そのことが、皆を一安心させて歓喜の声で溢れつつも俺達は例の部屋へと転送された。

「ガンツ、採点を始めろ」

全員が転送された後、アラームが鳴ったので俺がそう言うのと採点結

果が表示された。

巨乳

19点

TOTAL29てん

あと71てんでおわり

「ふう、こんなものかしら」

「悪くはない結果だと思うぞ」

岸本の得点では、彼女は冷静にそう言ったので俺もフォローしておく。

実際、経験が浅いがそれを補う立ち回りをしたので悪くないし、寧ろ良い結果と言える。

かとうちゃ (笑)

5点

TOTAL10てん

あと90てんでおわり

「5点……」

「何とか、1体は倒せたようだな」

加藤は、覚悟を決めたように感じたが未だに自分の中で葛藤しているようだな。

とは言え、こう言った内面的な部分は本人が解決しないといけないのでとやかくは言わない。

サダコ

5点

TOTAL5てん

あと95てんでおわり

「おお、1体倒せたようだな」

「……(ペコリ)」

前回は、特にこれと言って活躍できなかったのだが危機的状況が功

を奏したようだな。

俺の言葉に、彼女は俺に対して頭を下げたがこんな感じで頑張ってもらいたいものだ。

ホモ

5点

TOTAL15てん

あと85てんでおわり

「ホモっていい加減、訂正してくれねえかな」

「普通に女性が好きになったら変わるんじゃない？」

相変わらずの渾名に、そいつが項垂れているので俺がそう言うとは深いため息を吐いた。

こりや、時間が掛かりそうだなと思っているとガンツは次に移った。

クロノ

5点

TOTAL10てん

あと90てんでおわり

「俺も何とか、1体倒せたぜ」

「パシリじゃなくなったから確かなんだな」

俺がそう言うと、玄野は「パシリって言うな」と突っ込まれた。

まあ、実際に自分の意思で戦っていたように感じられたので悪くはない方向に行っているんじゃないか？

美形

5点

TOTAL5てん

あと95てんでおわり

「この点数って何？」

「後でちゃんと説明するから我慢してね」

今回、初参加となる別嬪さんは美形というあだ名がついたようだがそれでも、1体は倒れているのでそれなりに活躍できるだろう。そのため、全員の点数が終わってから説明する。その方が楽だしね。

自衛官

25点

TOTAL25てん

あと75てんでおわり

「……………」

「やっぱ、スナイパーは強いな。今後もよろしく」

自衛官というあだ名の男性に、俺は声を掛けると彼は俺を見て口角を上げた。

どうやら、頼られるのが好きらしいので今後に期待だな。

西くん

18点

TOTAL20てん

あと80てんでおわり

「ふん、最後に取られたのが痛いな」

「てかよお、西。最後の最後までどこにいたし」

「前回みたいにソツコーで潰されたくないから隠れていたんだよ」

本人曰く、コソコソと移動しながらZガンによる一撃必殺で仕留めていたらしい。

そう考えれば、最初の星人と普通の星人2体分と考えればこの点数なのも納得できる。

りゅーぎぎ

21点

TOTAL75てん

あと25てんでおわり

どうやら、俺も2体しか倒していないがボスらしき星人を倒したことも考えると、納得の点数と言ったところだ。

そして、俺を最後に採点が終わったので初参加のメンバーにガンツのシステムについて説明した。

今回のような出来事は、数週間に1回のペースで行われていること。

俺と西は、このメンバーの中でも長く戦って何度もクリアしていること。

この戦いから、解放されたければとっと100点を取ること。

これらを包み隠さず、話すと初参加のメンバーは戸惑いながらも現状を把握してくれたので、今回はお開きとなってそれぞれの家へと散っていった。

帰宅途中

「そう言えば岸本はさ」

「なんですか?」

例の部屋から、帰宅する時は岸本と一緒に帰ることが当たり前になつた。

家政婦として家においでいるんだから、当たり前ではあるが1人で帰ることの方が圧倒的に多かったので妙な感覚だ。

そのため、普段はあまり話さないが俺は今回のミッションについて聞いてみることにした。

「今回のミッションで迷いなく、戦っていたようだけどどういう吹き回しさ」

「今回のミッションですか? それはもちろん——」

俺の質問に、岸本はそう言いながら俺の前に進み出るとこう言ってきた。

「あなたの隣に立ちたいからですよ?」

「俺の隣に立つ? 理由を聞かせてくれるかい?」

「ふふっ、あなたは鈍感なんですね。つまりはこういうことですよ」
岸本がそう言うのと、俺の唇に自身の唇を重ね合わせた。

このことから考えると、どうやら彼女は俺のことを好いているらしい。

それがわかった俺は、ため息を吐きながらもこう言った。

「彼氏が俺だと苦労するぜ？」

「それでも好きなものは好きなんです。それにあなたは以前、こう言ってくれたじゃないですか」

「……………」

『お前の好きにすると良い。お前の意思で決めたことを侵害するつもりはない。俺に不利益にならなければな』

これは参った。普段から、他者のことにあまり干渉しないことを示すために言った言葉をそのまま、揚げ足で使われてしまった。

そのことに気が付いた俺は、ヤレヤレといった感じのため息を吐くと止めていた歩みを再開して、彼女にこう言った。

「今日は寝かせねえよ？」

「ふふっ、望むところですよ」

互いにそう言って、俺達は微笑むと自分達の住処に戻っていった。

第9話 互いに求め合う ☆

「んっ……んっ……ああん！ そんなに揉まないでえ！」

「どうして？ こんなに乳首が勃ってるのにな？」

「だってえ、感じ過ぎるんだもん。ひやあん！」

「ははは、岸本って淫乱だなあ」

「言わないでえ、ふああああ!!」

俺はベッドに座り、岸本を後ろ向きで床に座らせると両側からその豊満な胸を揉みあげた。

そして、揉み続けると彼女は感じ始めたのか、喘ぎ声を上げてクタクと弛緩させて腕に寄りかかるように体を傾けてきた。

そのため、乳首を重点的に攻めていくとついに絶頂したようだ。

「あっあっあっ、もうダメエ!!」

「どうダメなんだい？」

「乳首で！ 乳首でイっちゃやうのお!!」

「そのまま、イっちゃえよ」

「ひああああ！ イックうううう!!」

岸本はそう叫びつつ、体を痙攣させたので揉むのをやめて様子を見ると、荒く息をしながらこう言ってきた。

「はあ……はあ……じゃあ、今度は私がやる番ね」

「いいのか？」

「もちろんよ。どうせなら、一回ぐらいは誠をイかせたいし」

「じゃあ、頼むんだぜ」

その言葉に、ズボンとパンツを脱いで既にいきり勃った逸物を見せると、彼女はマジマジと見つめてきた。

そして、逸物を両手で優しく握ると上下に動かし始めた。

「うおっ、中々にうまいな。その調子で頼むぜ」

「ふふっ、ありがと」

岸本は、微笑みながら丁度良い指圧で握って両手を動かしていくが中々、俺が絶頂しないうえ、ついには自分の口を使って啜ってきた。

「ここまでやるとはな。ビッチだったんじゃないのか？」

「こうするのは誠だけだよ。それに誰ともやってないし」

「そうかい。まあ、続けてくれたらすぐにイけそうだな」

「じゃあ、頑張るわね」

彼女がそう言うと、ねっとりとした舌使いで逸物を隈なく舐め回したため、口の中に白濁色の液体を勢いよく発射してしまっただが、それを嫌がらずに喉を鳴らしながら飲み干してからこう言った。

「ぶはあ……ちよつと誠く？　いくらなんでも出しすぎよ。思わず、吐き出しそうになったじゃない」

「すまんすまん。岸本の舌使いがうますぎたから勢いよく出しちゃった」

「ふくん……まあいいけど。今度はこっちに出してよね」

そう言うと、岸本はベッドに仰向けで寝っ転がり、M字開脚で自分の秘所をくぱあと開きながら見せつけてきた。

そのため、秘所を見ると既に洪水のように濡れていたので期待しているのだろうと思い、指で触つてみると潤滑油のように液体が出てきた。

「かなり濡れてるな。期待してたのか？」

「まあ、それもあるけど誠の触り方が気持ち良すぎて最初にイった時から濡れてたわ」

「そりゃあ、良かった。これだけ、濡れてたら大丈夫そうだな」

そう言いながら、秘所から指を抜いたがその指には愛液が糸を引くほどにまとわりついているため、これならいわゆる破瓜の痛みというのがなさそうである。

実際、そう言った専門書を雑学程度に読んでいたのだが女性の破瓜の痛みというのは、膣内が充分に濡れていなかったり、性行為に慣れていないために起こるのだという。

そのことから、事前にしっかりと湿らせておけばそう言った痛みがないということを予め、知っていたので今回の目安として役に立った。

そして、いきり勃ったままの逸物を岸本の秘所に充てがってこう言った。

「じゃあ、入れるぞ」

「うん。来て……………」

彼女は、不安が入り混じった笑みを浮かべながら俺に手を伸ばしてきたため、ゆっくりと膣内に入って行ってしばらくすると子宮の入り口に逸物の先端が到着した。

「あ、あれ？ 痛くない……………」

「あー、事前にちゃんと濡れてたら痛くないらしいぞ。そういった専門書で読んだ程度だけぞ」

「そ、そうなんだ。でもよかったー」

「何故に？」

俺の言葉に、岸本は安心した笑みを浮かべてそう言ったので思わず、聞き返してしまった。

「だって、最初って痛いらしいじゃん？ だからそれで不安だったんだあ」

「なるほどねえ。前もって言うっておけばよかったな」

「ううん。だって最初の思い出になったんだし、これで心置きなくやれるね！」

「まあ、そうだな。じゃあ、やるか」

「うん！」

そう言い合ってから、互いに互いの体を求め合って性行為を重ねた。

まずは正常位。

「あん！ 誠お、気持ちいいよお！」

「俺もだぜ、岸本！」

彼女の胸を揉みながら、腰を前後に動かして快樂に溺れた。

俺が動くほどに、岸本の膣内がそれに連動してうねっているため、すぐに絶頂した。

「うつくう……………イクうー！」

「んあああああ！ 熱いのが来てるううううう!!!」

バックから攻める。

「んああ！ これも気持ちいいよお！」

「岸本の体、気持ち良すぎだろ！ こんなのにすぐにイっちゃまうぜ！」

「うん！ 来てええ！」

岸本をうつ伏せにして、膝を立てさせて綺麗なお尻を掴みながら秘所に逸物を入れて、野生動物のように腰を振った。

すると、正常位とは別の気持ち良さがあって互いに動物になったかのように求め合った。

「イクぜえ！」

「あああああ!! 来てるう！」

騎乗位。

「この体勢で見るオツパイも中々の見応えだな」

「もー、そんなこと言っていると嫌われるよ？」

「こんなことを言うのも、岸本の可愛さがあったることさ」

「まったく、調子がいいんだから」

パンパン、と肌がぶつかり合う音を立てながら軽い口調で言い合っていて表情も明るい。

そして、彼女の体を抱きしめるとキスをしながら腰を打ち合ったため、声にならない声で絶頂した。

こうして、俺達は眠るまで体を求め合った。

第10話 情報共有

やらかしてしまった。

今の状況は、俺はベッドで横になっていて岸本がその脇で俺に寄り添うように寝ている。

しかも、互いに全裸なので昨夜はお楽しみでしたね、と言った状態だ。

ここに至るまでの経緯は以下の通り。

← ガンツのミツションが終了

← 加藤や岸本ら、生存

← 俺、岸本と家に帰る

← 照明を消して岸本と合体

← 翌朝、「どうしてこうなった」

いやまあ、告白されたので風俗嬢とやる気持ちで誘ってみたらすんなり承諾されて流れに任せられた結果、そうなってしまった訳だ。

これはもう、責任を持たないといけないなあと思っていると寝ている彼女が、起きたようにもぞもぞと動き始めたため、俺は彼女に声を掛けた。

「お目覚めかな？」

「ん、ん〜、おはよう。誠さん」

「昨日はやりまくりだった訳だが、体の方は大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。優しく、手ほどきされたので」

「ならいい、早く起きて朝飯にしよう」

「ええ」

ネギ星人戦から、昨日の仏像戦までの間の協同生活によって互いの

性格はよく知っているの、俺の言葉でそれぞれの服を着るために動き出した。

俺自身、他者とはあまり関わらないことを彼女は知っているの、告白して肉体を重ね合わせても、余裕がなければすぐに見捨ててもいいとは言っていた。

その方が俺も楽では良いし、彼女自身が自分の力で戦えるようになりたいと言っていたのでそれについては細かく言うつもりはない。

そのため、朝食を食べ終えてグダグダと過ごしていると俺の携帯にメールが来たようで、着信を知らせるバイブが鳴った。

その確認のため、俺はメールを見てみると西からで内容は2人で話したいとのことだった。

私生活で、西が俺に会いたがるのは珍しいと思いつつ、俺が着替えていると、岸本が俺に声を掛けてきた。

「どこ行くの?」

「西と打ち合わせ」

「そう……西くんからなんだ」

「私生活で会うなんてこと、滅多にないんだけどね」

俺がそう言うと、彼女は微妙な表情をしたがいくらなんでも彼女も連れて行く訳にはいかない。

何故なら、俺と西とで話し合うことは来たるべき日であるカタストロフィに備えるためだ。

そのため、2人で話し合うことは今後のあらゆる状況に備えて世界中の俺達と同じように、戦っている奴らとのやり取りをすることだ。

普段だったら、電脳^{ネット}世界でも政府や警察の監視が及ばない裏サイトと呼ばれるネットワークで、やり取りをするのだが今回は会って話したいことから誰かと引き合わせるのだろう。

そう思いながら、西に指示された場所に向かって電車を乗り継いでいくと、西以外に珍しい奴がそこにいた。

「前回の自衛官じゃねえか」

「そうそう、ミッション後に彼から俺に話したいことがあるって言ってこの時間に、この店で落ち合うことになってたんだ」

「そうなのか？」

「……………（コクリ）」

西の言葉に、俺は彼に尋ねると彼は頷いたので一先ずはその店に入ることにした。立ち話、と言うには人が多すぎるからな。

岸本 side

竜崎くんが出掛けていった後、食器を洗ってから選択や家の掃除をしてから付けていたテレビの前で、お茶を飲みながら彼について改めて思い返してみた。

彼、竜崎誠という人物は普通に見れば一匹狼といった感じ。

私が例の部屋、ガンツと呼ばれる大きくて黒い鉄球のようなモノリスが置いてある部屋に呼び出された時、お風呂場で自殺した私にコートを被せてくれた。

その部屋で、私に向けられたのは劣情混じりの視線で、そんな中でもそういった目線で見えてこなかったのは竜崎くんとか藤くん、そして西くんだけだった。

西くんは家庭の事情からか、そう言ったことについて余裕がないように感じられたけど竜崎くんとか藤くんは、それぞれの事情があるのに私を守ってくれる素振りを見せてくれた。

とは言え、竜崎くんは劣情などの感情はあつたらしいけどそれ以上に、ミツシヨンに対する責任感であまりそそれなかつたらしい。

らしい、と言うのは本人からそう言われただけで実際にそういった感情を私に向けても、あまり興味がなさそうだったので確かめようがなかつたけど。

それでも、ガンツに呼び出されて例の部屋に行つて様々な“星人”と呼ばれる異形の奴らと戦つていき、1つの屋根の下で衣食住を共にしていくと気が付いたら彼を目で追っている日が多くなった。

始めは、優しい加藤くんに一目惚れしていたけど冷静に見ていくと、意気地なしな感じがしてきたのを覚えています。

確かに、平和な日常での優しさは必要なのですが、私達がいるのは生死を分けた戦場であると思っっているし、竜崎くんも普段からそう考えているようです。

なので、例の部屋と普段の日常生活でのギャップは激しいけどそれは、平和な時間と戦う時間とでのON/OFFの切り替えが無意識のうち起こっていると考えている。

だから、私は彼のそんなところに惹かれたんだと思う。

そして竜崎くんの隣に立って、彼のペースと一緒に歩きたいと思うようになった。

竜崎 side

「へえ、政府も絡んでいるんだ」

「ああ、来たるべきカタストロフィの日に備えて財閥の連中も含めて対策を練っているらしい」

「竜崎も知ってたんだろ？核戦争が起こるって話」

「星人が核を使うなんて考えらんねえがな」

西の言葉に、ケラケラと笑いながらそう返して話を聞く。

そもそも、ガンツというものの自体が人為的に作られた話があつてブラジルの民家に、あれがトラックで運ばれているのを目撃されている。

つまり、世界中に俺達と同じように戦っている奴らがいてそいつらとインターネットを介して、情報のやり取りをしている。

と言つても、一般人が到底辿り着けないようなサイトを使っているので、機密性に富んでいるのは間違いない。

わかっているのは、カタストロフィを研究しているチームが算出した結果だけで、その時に世界の秩序が崩壊すると言うことだけである。

そのため、俺や西は懸命に戦って武器を生産したりして戦っている訳だが、崩壊する秩序の中でもしぶとく生き残ってやろうと思つてい

る。

それから、俺と西はその自衛官という肩書きを持つ東郷とうこう 十三とメールアドレスを交換してからお開きにした。

彼は、都内で重要な任務を終えたがそれが完了して帰宅途中に事故死したようだが、ミッション終了後に家に戻ると電話で今回のことを伝えられたらしい。

しかも相手は幕僚長であり、話している時はかなり緊張していたようだがそれでも一通りのことを言われるとある程度、納得したようである。

何故かという、前々から星人と俺達が戦っていることを考えると俺達の冷静さは腑に落ちるし、強力な武器も既存のそれとは一致しないことにも納得できるといふものだ。

その結果、俺や西を探そうと都内を散策していると偶然にも西と出会ったので彼を介して、俺と連絡を取ってこのことを話してきたらしい。

偶然とは言え、今回の話は実に有意義ではあった。

何故なら、前々から財閥が関わっている話が出ていたのだが政府も関与しているとなると、賭け事でも行われているんじゃないだろうか。

どっちが勝つとか、どのぐらい生き残るのかとかな。

全く、自分達だけが安全圏にいて賭け事に興じるとか、暇つぶしの一環かよと突っ込みたくなるがそれはどうでも良い。

俺としては、あの戦闘にスリルを感じているのでミッションが始まったらどうやって生き残ろうか、と考えて行動している。

理由は、普段の日常では味わえないからであり、それと同時に星人も強くなっている気がする。

2年間も戦い続ければ、星人の比較もある程度までできる上に西もネット小説として、黒い球の部屋というページでサイトまである。

それによると、かなり前から開いていて古くは2000年代にまで遡れる。

例の部屋に来た当初の俺も、先人達からこのサイトを教えられてこれを元に生き残ってきた経緯があるので、しばらくしたら岸本にも見

せるとしよう。

俺はそう思いつつ、ゲームセンターで適当に時間を潰してから家に帰った。

第11話 吸血鬼

「オイオイ、今回は新入り無しかよ」

「こんなことってあるの？」

「メンバーが多い時なんかはたまにあるな。そうそうないけど」

俺達は、いつものようにガンツが置いてある部屋に転送されると見知った奴ら以外は、誰も転送されてこなかった。

ラジオ体操の音が流れたため、状況から察するにどうやら今回はこのメンバーでやるらしい。

そのため、俺達はそれぞれの武器を持って転送されるのを待つとど今回のステージは屋上で、フリーランニングと組み合わせて討伐するようだ。

転送する前に確認したのだが、チビ星人が今回の討伐対象らしいのでZガンなどの大型のものは持ってこず、Xショットガン2挺とガンツブレード1本が今回の俺の装備となる。

西は相変わらず、Zガンがお気に入りのようにそれを持っていったようだし、加藤もYガンが基本装備となっている模様。

とは言え、今回の星人も単独とは到底思えないので用心に越したことはないだろう。

「おい、竜崎。あそこも見てみる」

「ん？貯水タンクか？」

自衛官である東郷の、指さす方向には件の星人がいてこちらに背を向けた状態で座っている。

そのことを確認した俺は、イヤな予感を振り払うように首を横に振ってから東郷に指示を出した。

「東郷、ここからスナイプできるか？」

「ああ、任せておけ。この銃ならあの距離ぐらい、どうってことはない」

俺達がいる場所から、星人までの距離はおおよそ2〜300メートル。

コントローラを使ったとしても、目を凝らさないと見えないほどの

小さきなのに彼は、それを簡単に見つけてしまった。

その結果、チビ星人は訳もわからずに狙撃されて息絶えたと思っ
ていると、俺達の周りに残りの星人がやって来た。

その数、前回の数倍はいるだろうか。

とにかく、多すぎると思いながらも俺はガンツソードから適度な長
さの刃を伸ばすとそれを構えて、ざわつく周囲のメンバーに対してこ
う言った。

「全員、何とか生き延びろ」

俺がそう言うと、加藤達はそれぞれのやり方で生き延びるために行
動を開始した。

「ふう……かなり多かったな」

「竜崎くん、大丈夫？」

「俺はな。だが他のメンバーがどうか……」

数十分後、路上にいた俺は背後に立っていた岸本に声を掛けられた
のでそう返すと、返り血で真っ赤になっている加藤達がやって来た。

「竜崎、無事だったか」

「加藤、そっちはどうだ？」

俺がそう聞くと、加藤と玄野はこう返してきた。

「ホモとサダコがボコボコにやられた。応援に来た時には息をしてい
なかった」

「今回も生き残りそうだったが残念だ」

「自衛官の奴もやられた。俺と戦っていたけどスーツがお釈迦にされ
てダメだった」

「彼もやられたか。今回はかなり、被害が出たな」

その報告に、俺は少なからずショックを受けたが相手の数も数だっ
たし、仕方ねえかと思っていると西達もやって来たようだ。

そのため、事情を聞くと桜丘聖という玄野の彼女であり、初体験の
相手もくたばったらしい。

それを聞いた玄野は、かなりのショックを受けて跪いて泣いていた

が俺達5人は何とか、生き延びて帰ることが出来るらしい。

コントロールを操作しても、星人らしき反応がないので一段落したようだが今回も、色んな建物に被害が出た。

これで、黒い球の部屋も大騒ぎになるなと思いつながら転送されるまでの間、俺は周囲を警戒していると黒いスーツを着た集団が俺達に向かって歩いてきた。

ホストがこんな所に何故、と思つて耳を傾けるとこんな言葉が聞こえてきた。

「なんだよ、消えて行くぞおい」

「さっさと片付けるぞ」

「……………」

そんな言葉が聞こえてくると同時に、金髪のホスト崩れのような美青年と目が合った。

彼らの様子から考えるに、どうやらガンツの光学迷彩も万能ではないようだな。

そう思っていると、黒服の集団は手から拳銃を作り出すと俺達に向けて発砲してきた。

「!? 竜崎！早速来やがった!!」

「ああ！加藤達は逃げろ！」

「誰だあれ!?!」

「とにかく逃げろお!!」

俺がそう言うと、加藤は跪いている玄野を立てしてから引きずるように逃げていき、岸本もパワードスーツの性能を生かして屋根へと飛び移つていった。

「久し振りだな、金髪ホスト。見逃してくれるかと思つていたよ」

「はん、大量に星人を殺しまくっていたらイヤでも目に留まるっつーもんだろ」

「ちげえねえや、と！」

加藤達が逃げていく中、俺は金髪ホスト風の男性とそれぞれの刀を使って刃をぶつけ合つてから、そう言い合つてから斬り合いに移行した。

俺や西にとって、彼らはガンツチームと敵対していると言うことだが、れつきとした吸血鬼であり、理由は知らないが俺達と敵対している。

恐らく、星人関係で立場の違いで敵対関係になっているとは思いますが、今はどうだって良い。

俺としては、むぎむぎと殺される訳にも行かないので相手の動きに注意しながら動かないといけない。

何しろ、相手は4人で西もどこかへと行ってしまったので1対4という俺にとって、圧倒的に不利な状況だが今の俺にとっては問題ない。

何故なら、武術を体得している俺にとってすれば4人相手といってもぶつかり合う瞬間だけは、1対1になるからだ。

この神様特典を、検証する時に1つの疑問が俺の中で生まれた。

それは――

『そう言えば武術といっても武器を使うのがメインなんだよな。格闘技の分野ではどうなんだろう？』

と言うもので、ネットでは空手や柔道、テコンドーなどは格闘技に分類される。

なので、普通はできないんだろなあと思っただけで、格闘技をやっている道場の門を叩いて、体験学習として相手にしてもらった。するとどうだろう。道場の有段者相手に圧勝してしまった。

そのため、入門してくれというしつこい要求を受けたのでそれを振り切るのに苦労したが、相手を倒した時に思ったのは武術って範囲が広すぎませんか、というものだった。

今となつては神様のミスなのか、意図的に判定を甘くしたのかはわからないが少なくとも星人関係では役に立っている。

何故なら、ガンツソードが手元からなくなっても戦えるからだ。

「ぬおー」

「もらったー」

黒髪の男が、俺との斬り合いでガンツソードを吹き飛ばしてくれたが俺からすれば、戦いやすくしてくれたと感じてしまった。

理由は、ガンツソードを持っていてる時は両手が塞がって1つのことしかできないが、両手が空いてしまえば己の四肢を使った戦い方ができる。

ガンツソードが吹き飛ばされた次の瞬間、俺は黒髪の男に急接近して発勁を繰り出した。

この技は、瞬間的な打撃はないが体内で長く力を伝わる技でちゃんとした訓練を積みめば、誰でも使える技だ。

その技に、パワードスーツのパワーを上乗せしたことで例え、吸血鬼であろうとも内臓は引きちぎられたようで、口から吐血しながら倒れた。

身動きしないところから察するに、そいつはくたばったようだ。

すると、俺の転送が始まったようなのでパワードスーツによって強化されたジャンプ力で、数メートルも飛び上がると丁度よくガンツの部屋に転送し終えた。

そして、次の瞬間には加藤達からの質問攻めだった。

どうやら、吸血鬼達について何も知らないようだったのでざっと概要を伝えた。

あいつらは吸血鬼であり、その発祥はよくわかっていないのとのこと。

前々から、俺達とは敵対していること。

そして何よりも、組織化された吸血鬼であって彼らはその幹部であり、何十人もの吸血鬼を従えていることだ。

それらを伝えると、西以外は啞然としていたが吸血鬼対策も練らないといけないので、俺はとつと帰ることにした。連戦で流石に疲れしたし。

ついでに、今回の星人の得点は1体につき2点だったようで大した点数にはならなかった。

とは言っても、俺の場合は20体位を倒していたようだがな。

そんな訳で、俺はとつと家に帰還するとパワードスーツを脱いでシャワーを浴びてから、寝間着に着替えてベッドに倒れ込むようにし

て寝た。

第12話 集いし、猛者達

ブブブブ

チビ星人の討伐と、吸血鬼の襲撃から数日が経つてのんびりとして
いる時間の中で俺の携帯に着信メールが来たことを示す振動があっ
た。

そのため、メールを見てみると知らない人からの着信で、このメー
ルを読んだら書いてある番号に電話をしてくれ、という内容だった。

俺は普段、携帯は2台を併用していて片方は家族用でもう片方は対
外的に使っている。

今回、着信メールが来たのは対外的に使っている携帯で西や加藤達
と連絡する時にも利用している。

これは方が一、吸血鬼の襲撃がある際には家族なんか人質に取ら
れないようにするため、それと同時に気持ちの切り替えもする意味
でこうしている。

そもそも、家族や親戚から電話やメールはそう多くないし、あつた
としても近状報告や何かしらのアクションがあつた時ぐらいだ。

そのことから、このメールはガンツのメンバーや大学の友人、また
は海外の友人経由で来たのだろう。

その確認のため、俺は出かける用意をしてから岸本に少し歩いてく
ると伝えてから外に出た。もちろん、ガンツスーツを普段着の下に着
てからの外出だ。

吸血鬼の襲撃があつた以上、いつ何時に攻撃されるのかがわからな
いのでこういった対応策を講じている。

普段から、着てはいるがそれは手足が露出した状態なので今回の場
合は手袋等の代用として身につけている。

じゃないと落ち着かないし、そもそも服としての機能も充実してい
るから下着の一種だと思えばなんてことはない。

そして、駅前の公衆電話から指示された電話番号に掛けると懐かし
い声が聞こえてきた。

「お前……………竜崎か？」

「ああそうだ。で、お前は誰だ？」

「俺は和泉。お前のメールアドレスは玄野という奴から聞いた」

しかし、それを露わにすると人間違いの可能性で変に弱みを握られそうなので、それを露わにしないようにしながら考えを巡らす。

この会話だけで、わかったのはどうやらメールアドレスを漏らしたのは玄野らしい。

こうなるんだったら、メールアドレスを全員のと交換するんじゃないかな。かつたぜ。

そう思いつつ、俺は和泉と名乗った男性と話を進める。

「んで？メールアドレスを聞き出すほどの用件はあるんだろうな？」

「ああ、ガンツって知っているか？もしくは黒い球の部屋ってサイトは？」

「そのサイトなら知っている。内容的には眉唾ものばかりだがな」

「……………そうか、やはりお前もそう思うか」

「その確認のためにメールしてきたのか？物凄く、時間と労力の無駄だと思うが」

和泉の質問に、俺は茶化すようにそう言う。彼は少し残念そうに返してきたので、今度はこっちから質問してみた。

すると、意外な回答が来た。

「お前はそう思っているかもしれないが、俺からすれば懐かしさに近い。あの日記に書かれている内容は俺の記憶とリンクしている」

「……………」

「狩りをして新宿を駆け巡る記憶が、あの部屋にいたメンバーだと確信させた!!」

「……………」

「だからこそ、お前に頼みたい。俺をあの部屋に連れて行ってくれないか!？」

「……………」

ふーむ、厨二病がここまで来ると末期だなと思ってしまふのは俺だけではないはずだ。

少なくとも、事情を知らない人からすればそういった風に見えてしまうだろう。

しかし、和泉がガンツの討伐依頼をこなしていたことを思い返せば平和な日々が退屈なのだろう。

そのため、俺は彼にこう伝えた。

「精神科に行くか、時期を待つんだな。今はそれしか、言えん」

「……………そうか、ならいい」

俺がそう言うと、和泉は安心したようにそう言ってから電話を切った。

どうやら、黒い球の部屋には俺の名前も平仮名で掲載されて熟練兵士として描かれているので、少なくとも彼からすれば安心材料になったらしい。

そのため、近いうちに彼は行動に移しそうだなあと思いながらゲームセンターで、暇つぶしをしてから家に帰ることにした。

~~~~~

一方、竜崎と和泉が電話で話し合っている時刻と同時期にとある中学生は後の師匠として、仰ぐ人物から超能力を伝授されていた。

学校でいじめられていて、それを苦にして自殺しようとしたが死ねなかったので、そういったスレッドで知り合った男性に頼った次第だ。

「人生を変えるって話なんですけど……」

「別に楽な自殺を勧めに来た訳じゃない。俺はお前を生かして来たんだ」

「そういった話、聞きたい訳じゃないです」

「別に生命の尊さを説くつもりはない。寧ろ、お前に力を与えてやる」

サングラスを掛けた男性はそう言いつつ、コップに入っていたコーヒをイメージトルぐらいの高さまで浮かび上がらせた。

コップごとではなく、コップの中に入っていたコーヒという液体



「……………東京やが」

桜井という中学生が、ネットで知り合ったトンコツと出会う日に博多からやって来た男が、東京の建物を見てそう呟いた。

彼の名前は風 かぜ 大左衛門 だいらざえもん。

中国武術の八極拳の使い手で、自分と互角に渡り合える相手を探して日本一の人口を誇る東京にまでやって来た青年である。

とは言え、風を満足させるほどの強さを誇る奴はおらず、色んな人を訪ね歩いたが本人からすると博多の方がまだマシだと思うレベルだが、そんな中でも1つの話が気になった。

それは、ボコボコにした高校生から聞いた話で今は大学生だが数年前まで伝説の番長として、有名だった人物の話だ。

そのため、そいつからどの大学に行ったかを聞き出して向かってみると、如何にも強そうな雰囲気醸し出している男が食堂で昼食を取っていた。しかも1人で。

「ちよつとよかか？」

「ん？」

風の格好は、大学の雰囲気からすると完全に浮いていたので周りはかなりざわついていたが、彼に話しかけられた男は箸を止めて風を見た。

「なんだい？おっさん」

「ここに強か奴のいるって聞いてやって来た」

「誰に聞いたか知らんが、ある程度の武術だったら身に覚えがある」

「なら話ははやか。戦ってくれけんか？」

「少し待ってくれ。これを全部食べないと落ち着かないんだ」

そいつがそう言ったので、食べ終わって片付けてから大学からほどよく離れた裏路地に行った。

そいつは、周囲のざわつきとは裏腹に常に冷静だったが何を隠そう、強そうな雰囲気を出していたのは竜崎誠本人だったからだ。

その結果、風と盛大に殴り合って格闘技で生まれる友情が出来上がった。

そうこうしている内に、和泉が行動に移す日は近づいていた。

## 第13話 新宿大虐殺

和泉と電話をしてから1週間後、またしても彼からのメールが来た。

「どうやら、今日（日曜日）に新宿で行動に移すらしいので俺と岸本は今日に備えて準備をしていた。」

準備といっても、パワードスーツを着込んでXガンを肩掛け鞆に仕込んでいつでも撃てる状態で、新宿駅から延びる大通りの喫茶店で待機していただけだ。

俺としては、彼が起こす行為の顛末が気になるので来た訳だが岸本としては、折角のデートなのに他のことが気になっている俺に不服のようだ。

「そんなに和泉って人が気になるの？」

「彼は1年ぐらい前まで例の部屋で共に戦っていた。優秀な戦闘員だったし、俺に次いで点数をとっていたからな。今の岸本よりも強かったよ」

「ふーん」

「ま、彼がどうしようがああの部屋に行けなければ全てが無駄になるから大胆な賭けではあるがな」

俺の答えに、岸本が不満げに顔を膨らませていたのでそう付け加えるとそれまで歩行者天国として、車道に多くの人が行き交いしているが人の流れが1つの方向へと変わった。

方向としては、駅から逃げるように人並みが移動しているので俺と岸本は即座に立ち上がって、駅の方角を見ると騒ぎの中で微かに銃声が聞こえてきた。

音からしてサブマシンガンかな。アサルトライフルや機関銃だと、もっと重低音があってもおかしくはないがこの音はどちらかといえれば軽い方だし。

そう思いながら、移動を開始すると座り込んでいる少女に目が留まった。



その少女は、見るからにひ弱そうだったので走り出す人達を押し  
けながら近づいて声を掛けた。

「嬢ちゃん、どうかしたかい？」

「……………（ブルブル）」

俺が声を掛けると、少女は怯えきった顔で俺を見てきたので岸本を  
呼んであることを頼んだ。

「岸本、この少女を頼む」

「えっでも、あの乱射魔をなんとかしないと……………」

「奴を上手く誘導する。その間に彼女を背負って避難しろ」

徐々にはあるが、銃声が近づいてきているので時間がないとい  
うことは、岸本でも充分にわかった。

そのため、岸本は少女を背負ってから人並みに紛れて走り出した。  
さて、どうしたものかと考えていると後ろから見覚えのある巨漢が  
死体を片手で、盾代わりにしてやって来た。

「……………風、こんな所にいたのか」

「おう、竜崎。ここはおれに任しえて下がってろ」

「だが奴は飛び道具を使う。大丈夫か？」

「問題なか。そいにあん乱射魔ばどげんにかせな被害のでかくなる。  
だからここで抑える」

「そか、なら任せて良いか。危なくなったらすぐに行くよ」

俺がそう言うと、風は『おう』と答えたのでその場を後にして銃声  
の方向からだど、横に顔を向けないと見えない横道に入った。

こうすることで、すぐには目を付けられない上に俺はあることを確  
認したかった。

それは、和泉がどういった格好をしているかというものだ。

銃を乱射するからには、変装する必要がある訳で素顔のままでは警  
察から、指名手配を受ける可能性が非常に高い。

そうなれば、ガンツがある部屋に行けたとしても逃亡生活をしなが  
ら行かないといけなくなる上、警察に捕まった場合は極刑になる可  
能性も在る。

そうならない様に、変装をする必要があるのだがどの程度なのかを

確認する必要がある。

変装が雑な場合、Xガンのロックオン機能でロックしてから引き金を引く必要がある。

命を刈り取ることに対する抵抗感は、この2年間の星人や吸血鬼との戦闘で既に消え失せているのでカタストロフィで生き残ったら傭兵になるのも良いかもしれないな。

いや、その場合は火薬を使う銃の扱い方に慣れないといけないし、色んな戦場を渡り歩く必要があるから四肢の欠損は覚悟しないといけない。

傭兵になるためのハードルは高いなと思いつつ、取っ手のついた小さい鏡を肩掛け鞆から取り出して大通りを鏡の反射で見るとサングラスを掛けた黒人男性がサブマシンガンを撃ちまくっていた。

あれが和泉か、と思っていると風が死体を盾にしてそいつに近づいていって鉄山てつざん靠こを食らわせた。

しかし、銃を目の前にしてひるんでしまったためにちゃんと技が決まらなかったのも、首を絞めて殺そうとしたが大きめの肩掛け鞆から取り出した銃で逆に殺されてしまった。

そのため、鏡をしまい込んでどうするかなあと思っていると黒人男性が、俺に銃を構えているのに気が付いた。

そいつは驚いた様子だったが、俺がとつとと行くようにと合図するとそいつは銃を発砲せずに他の人を殺すために移動を開始した。

これで決まりだ。アイツは和泉でガンツのある部屋に呼び出されたらしい。

黒人に変装した和泉が、俺を殺さずに移動してから数分してから裏道を使って大通りの別の場所に出ると撃ちまくってんなあ、と思うぐらいに乱射している。

そのため、銃声が聞こえる距離を保っていると銃声が途絶えたので、俺は岸本と合流すると岸本は少女を慰めていた。

「よお、無事だったんだな」

「誠、そっちは大丈夫だったの?」

「ああ、不思議なぐらいに運良くかすり傷もない」

俺はそう言いつつ、目線を少女に向けると青ざめてはいるが大分落ち着いたように見える。

そのため、俺はしゃがみ込んでからいくつかの質問をした。

「俺は竜崎誠。いくつか、質問して良いか？」

「……………（コクリ）」

「君の名前は？」

「……………小島……………多恵」

「どこの駅から新宿に？」

「〇〇駅……………」

「JR沿線の駅だな。そいつはご苦労なことで」

その後も、2〜3ほど質問をすると携帯が振動したので開いてみると新着メールで、今から都庁の第1展望室に来いという内容だった。

差出人には、俺が勝手に和泉ちゃんと付けたメールアドレスだったので立ち上がって、俺は指定された場所に向かうことにした。

「どこに行くの？」

「例の人物からメールで場所を指定された」

「……………」

「だからそこに行くってくる」

「……………そう、危ないから気を付けてね」

「おう、せいぜいボロクソにされないように頑張るわ」

移動しようとする俺に、岸本が聞いてきたのでそう答えると彼女は冷静にそう言ったので、俺も冷静に返事を返した。

本来であれば、無視するところではあるがそのメールには写真が添付されていて、和泉の彼女と思われる女性が席で眠っている状態で銃を突きつけられていたからだ。

普通だったら、悪い冗談だと思うところではあるが生憎と言ってはなんだが今の彼は、実際にその女性もやりかねない。

そのため、俺はXガンを手に持ちながら指定された場所に向かうと本当に和泉がいた。

「本当に釣りじゃなかったんだな」

「当然だ。じやないとメールを使うことすらしないし、こうやって呼び出しもしない」

「はん、変装はうまくいったようだな。あれだったらお前に関連付かない」

「そのように細工したからな。ようやく、俺はここまでやってきた」

このやり取りと、彼の表情や態度から人を殺すことへの罪悪感はないようで寧ろ、俺と共闘していた頃の記憶もありそうなので俺は話を進める。

「それで？このままだとあの部屋に行けないはずだが？」

「だから西部劇みたく、撃ち合いをしようぜ」

「あれか、互いに後ろ向きから一定時間で撃つって奴」

「ああ、お前とはそれをしてみたかった」

「……………わかった。引き受けよう」

俺がそう言うと、和泉はホツとしたように安堵したようだがそう言うのは事が終わるまで、表情や態度に出さないものだけ。

そう思いながら、和泉の指示で互いに銃を構えて彼がカウントを始めたが残り1秒の時に、俺はXガンの引き金を引いた。

その結果、彼は間抜けな声で「えっ」と言った直後に身体が爆散したので、頭だけになった彼にこう言った。

「約束なんて守る訳ねえーだろ。つーか、その女も誰か知らんしな」

俺はそう言い終えると、いつもの寒気がしたのでいそいそと決闘のために脱いでいたワードスーツを着て、その上に外出用の服を着込んだ。

## 第14話 かつぺ星人討伐戦、開始

「おっ、来てる来てる」

俺が転送されると、加藤達以外にも多数の人間達がガンツのある部屋に来ていた。

そのため、加藤達を見るとニュースで新宿の悲惨さを知っているように俺に聞いてきた。

「竜崎、これは一体？」

「どうやら、新宿で起こったことと関連しているようだがよくわからない。なあ、和泉」

「……良くもやってくれたな」

「なんのことだか知らんがここに帰ってくるのか、よっぽど運がないな」

「……………ふん！」

加藤に尋ねられた俺は、和泉に声を掛けると怒った表情をしていたのでとぼけると、彼は苛立ち気にそう言って立ち去ったため、加藤に小声でこう言った。

「彼が新宿の犯人だ」

「なっ…………」

「だが誰にも言うなよ。討伐どころか同士討ちになるから」  
「……………くっ」

俺の発言に、彼は驚きと悔しさで歯を食いしばったが起こってしまったものは仕方ない。

彼の表情を見て西に視線を向けると相変わらず、憎たらしい笑みを浮かべているので事情をある程度、察しているようだ。

そのため、周囲を見回すと顔なじみの奴がいた。

「風、ここにいたか」

「ああ、この部屋はなんだ」

「簡単に言おうと、特定のターゲットを討伐しないと解放されないという奴だ」

「……………訳わからん」

「まあ、最初は誰だつて同じ感想さ」

風に声を掛けると、腑に落ちない表情をしているが俺がそう言うところから、首を傾げていた。

それも当然で、乱射魔に殺されたと思つたらこの部屋で息もしている上に脈もあるんだから、訳わからん状態になるのも仕方ない。

そのことを確認すると、岸本と玄野が転送されてきた。

「あつ、無事だつたんだね」

「岸本もな」

「和泉、てめえ!!」

岸本が、俺の無事を確認して安堵していると玄野が和泉に掴みかかった。

しかし、パワードスーツを着込んでなかったようで和泉に返り討ちにされて失神してしまった。

「情けねえ、掴みかかることしか知らんのか。こいつは」

「だっさ〜」

とまあ、周囲の反応は冷淡なもので失神したのを確認された後は起こされることもなく、挙げ句の果てには最後にやって来た黒人に蹴られたりしていた。

俺や岸本、西は壁際に立つて壁に寄つかかるように立っているといつも通りの曲が流れた。

その直前に、アイドルの名前が挙がっていたが現実逃避でもしているのだろうか。目をつぶっていたからよくわからん。

とは言え、曲の後に討伐対象が現れたのだが雑魚そうな星人だな。

だが、GANTZの表示する説明は全く当てにならないので今回はフル装備で行こうかな。

Zガンが置いてある部屋に行つて、タブレット型コンピュータを弄つてガンダムみたいなロボットとハードスーツ、Zガンにエアバイクと持てる範囲でフル装備だ。久し振りに暴れ回っても良いかもしれない。

俺がそうしている間に、加藤が初参加のメンバーに事情を説明しているがいつものように聞き入れられていない。



「ふむ、討伐対象は建物内か」

「どうするの？ ロボットまで持ってきて」

「そもそも、あれを使えるのは俺だけだから問題ない。その内、西も使いそうだがな」

そう言う俺は、巨大ロボットの足下で岸本達と会話をしていた。

今回、俺達の他にも大勢の奴らが参加することになったがその多くが、短絡的な考えの奴らなので戦力としては期待できない。

とは言え、西なんかはいつも通りに透明になって不意打ちを画作しているようだし、スーツ組だけでもなんとかするか。

「加藤、風と一緒にあいつらを任せて良いか？」

「しかし……」

「お前さんにはリーダーの気質がある。いざという時はまとめてやれ」

「……………わかった」

俺の言葉に、加藤は渋々ではあるが頷いてくれたのでハードスーツのまま、星人がいる建物に向かった。

何しろ、喚くことしかできない奴らをまとめるなんて俺にはできない上に、やかましいのは大嫌いと言えほど苦手だ。

それに、加藤は未だに星人を討伐することにためらいがあるようなので、俺が積極的に戦わないと時間オーバーになってしまう。

そのため、俺が歩いていると岸本の他におっさんとグラビアアイドルの下平<sup>しもひら</sup> 玲花<sup>れいか</sup>だった。

グラビアアイドルも兵士にカウントするんですね、ガンツさん。別に良いけど。

だってねえ、玄野達が来る前はイケメン俳優も事故死であの部屋に来ていたのだが、映画の演出だのなんだのとほざいて速攻でくたばった。

今回の場合、岸本のおかげでパワードスーツを着込んでいるからすぐに死ななそうだが、すぐに戦力にはなりそうにないので岸本の戦い方を見せるか。

そう思いつつ、俺は彼らに事情を話した。



あの部屋に、呼ばれた時点で既に死んでいること。

今こうして、生きているのはコピーであってオリジナルの俺達は既に他界していること。

今から、起こる出来事から解放されるには100点を取るしかないこと。

そのスーツは、死ななくするスーツではあるが一定以上のダメージをもらえば、ただの布と同じになること。

その上で、無駄死にしたくなかったら星人と戦って討伐することなどを伝えると、おっさんとグラビアアイドルは覚悟を決めたようだ。

そのため、俺は岸本に目を向けると予め持ってきていたXショットガンを2人に渡した。

それを確認してから、俺は2人に淡々とこう言った。

「生き残りたかったら戦え。じゃないと意味がないからな」

~~~~~

「……ねえ」

「ん？ なんだ？」

「なんであんなこと言ったの？ 普段だったら気にしないのに」

俺がワードスーツを着たまま、会場内を歩いていると岸本がそう聞いてきたので答えた。

「何となくではあるが、あの2人は鍛えれば最後まで生き残りそうだからだ」

「ふーん」

「まあ、これはあくまで俺の勘だからあまり気にしないでいい」「どーだか」

俺の答えに、岸本はジト目で俺を見てきたがそれをスルーして星人がいる部屋に入ると、どうやら恐竜博の恐竜が今回の討伐相手らしい。

そのため、俺は巨大な腕を構えると岸本も俺から受け取ったZガンを持って恐竜に向けた。

第15話 恐竜も飛び道具には負ける

加藤 side

「おい」

「なんだ？」

「竜崎という男、アイツは一体何モンだ？」

「……………」

竜崎が、風と呼んでいた男からそう聞かれたので聞いた範囲のことを彼に伝える。

「2年前にあの部屋に呼ばれたらしい。今までに最低でも7回は100点クリア」

俺がそう言う伝えると、風は不敵の笑みを浮かべたが今は初心者の奴らをまとめないといけない。

説得しようにも、マトモに耳を傾けてくれるのは坂田と桜井ぐらいしかないので、周囲の警戒をすするしかない。

俺はそう思いつつ、竜崎が向かった方向へと視線を送った。

和泉 side

———
これだ

———
この感じ

———
生きている感じがする

———
現実を実感できる

俺は、筋肉隆々になった二足歩行のトリケラトプスと戦っている時に、かつての記憶が甦ってきていた、

竜崎と西、そして俺と一緒に戦っていた時にはよく3人で役割分担をしていたり、強い星人が出た時には共闘して倒していた。

竜崎が重騎士で相手と殴り合い、西は不意打ちメインで足止めをし

て俺は軽戦士として相手に斬りかかる。

そんな記憶が甦り、自分が望んだやり方である部屋に行った訳ではなかったが、あの時を思い出してついにやけてしまう。

そして竜崎や西は相変わらず、あの部屋で戦っていたようで他の奴らとの雰囲気の違いをすぐに感じる事ができた。

彼らに追いつくため、あの部屋にいなかった半年以上のブランクを埋めるために、こいつらを土台にして昔の感覚を思い出す。

そのため、俺は星人に対してガンツソードで斬りかかった。

竜崎 side

「この岩、発泡スチロールだよ」

「スーツのおかげって言ってるだろ？」

「ふーん、よくわかんないけど」

「誠くん、まだ星人がたくさんいる」

初参加のおっさんこと、鈴木さんは恐竜博で置かれていた岩を破壊するとそう言ってきたので、俺が答えるとよくわからない様子だった。

確かに、ガンツの技術は地球のそれとは大幅にかけ離れているからわからなくて当然か。俺自身もよくわからない部分があるし。

そう思っていると、岸本が自身のコントローラでマップを見せながらそう言った。

そのため、俺達は移動するとそこには巨大な恐竜の形をした星人がいた。

「……………でかすぎるだろ」

「Zガンでも倒しきれるかどうか、と言ったところね」

先程、小型の肉食恐竜を岸本が手持ちのZガンで潰したのだが目の前で寝ている草食の首長恐竜は、世界最大の恐竜だったはずだ。名前は忘れたけど。

そのため、どうやって倒そうかと考えていると首長恐竜の子供と思われる恐竜が起きて、こつちを見てきたので先手必勝でビームを頭に向けて放った。

すると、首が消えた訳だがそれでぶっ倒れないのが星人クオリティ。

頭がない状態で、歩き始めたではないか。

「どーやら、心臓を潰さないといけないらしいな」

「そうね。動物なんだから頭か心臓が弱点なのが基本だよな」

俺と岸本は、そう言い合ってから互いの武器を星人に向けた。

「どうやら、心臓は胴体の首寄りにあって右胸らへんだな」

「わかった。誠くんはアイツの気を引いてくれる？」

「しゃーねえな。やってやるよ」

岸本の提案に乗ると、彼女は別行動をとってその場からいなくなったので俺は構えを取った。

こうすることで、集中力が高まるので相手の動きを予測しやすくなる。

すると、首長恐竜は頭が消失した長い首を使って俺を地面に叩き潰すかの様に地面を叩こうとした。

しかし、その動きは俺からすれば緩慢な動きなので殴り返してやった。

すると、そいつは大きく叫ぼうとした瞬間に胴体が消えた。

いや、正確には岸本がZガンで恐竜の胴体を潰したからであり、これでその点数が岸本に入った。

しかし、レイカはこう言ったグロテスクな光景を目の当たりにするのは初めてのようで、吐き気を催したようなので木の裏で吐くように伝えるとそうした。

そして一頻り、落ち着いたところで周囲を確認すると今度はティラノサウルスが2体出てきた。

「オイオイ、こいつらもやらないといけないのか」

「でもどれだけ、数が出て来ようともやっつければいい話でしょ」

岸本がそう言うのと、Zガンを撃って片方のティラノサウルスを潰し

たため、口笛を吹きながらとビームを放ってこう言った。

「確かに、先制攻撃してしまえば簡単だもんな」

すると、テイラノサウルスはその実力を発揮せずに穴あきチーズになって絶命したので、そのことを確認してその場を立ち去ろうとする
と岸本が聞いてきた。

「あの恐竜、倒さなくて良いの?」

「あれとやるには場所が悪すぎる。天井なんかが崩落してきたら、それも躲しながら戦わないといけなくなるから外でやった方が良い」

「それもそうね」

俺の答えに、岸本は納得したようなのでその場を後にして外に出ると加藤達は、複数の小型恐竜に囲まれていながら善戦していた。

加藤 side

「くっそ、今回の相手はこいつらかよ!!」

俺はそう叫びながら、Yガンで応戦していると風が自身の肉体を使って恐竜を倒していった。

そして、坂田と桜井も目には見えない能力を使って倒しているようだ。ポーズから見るとサイコネシスみたいなものだろうか。

そのため、俺は彼らにこう言った。

「とにかく、右胸を狙え!」

「わかった!」

彼らの返事を聞いて、俺はYガンを撃ちまくった。

竜崎 side

「終わったようだな」

「竜崎か……そっちはどうなんだ?」

「相変わらず、星人を倒していたが一区切りついたのでこっちに来た」

小型恐竜を殲滅したのを確認した後、俺が彼らの元に行つてそう言う
うと加藤達の周りにいた奴らを見渡した。

俺達も含めて16人。てか、玄野のことをナチュラルに忘れてた。アイツ、どこに行つたんだか。

それはともかく、今の現状について初参加の奴らに説明をした。

「さて…………俺や加藤、岸本は今夜のことを何度もやっている。理由は、俺達は既に死んでいてある理由で甦った」

「し、死んでいる!？」

「甦った!？」

俺の言葉に、彼らはざわついたが話を続ける。

「甦った理由は、来るカタストロフィに向けて訳わからんあの生物達を殺しまくることだ」

「カタストロフィ…………？」

「核戦争なんかが予想されているが、俺個人は今夜のことを大規模にしたような事が起きるんじゃないかと思っている」

その言葉に、加藤達も啞然としているがそれを無視して続けている。

「だがあんたは運が良い。俺が来た当初は、武器も貧弱で説明もないままに始まつたんだからな」

「じゃあ、なんで俺達を助けに来なかったり、あんたが説明しなかったんだ？ 立ち位置的にもそいつよりも上のように見えるんだが」

俺の言葉に、サングラスを掛けた奴が聞いてきたのでありのままの答えを返す。

「別に俺はあんたらを守るヒーローでもなんでもない。それに、加藤の忠告を無視したあんたらに説明しても効果は薄い。最悪、俺達を首謀者に祭り上げて襲う可能性すら考えられる」

「ならば1回、実演させた方が手っ取り早い訳さ」

そう言い切ると、彼らは黙り込んだが状況は悠長なことを許してくれないようだ。

「きゅー！きゅー！」

「どうやら、お客さんのようだぜ」

「1体でも多く潰すわ！」

ガンツに記載されていたかっぺ星人が、小型恐竜を集めてきたので俺が構えると岸本もZガンを構えて撃った。

第16話 死ぬ時はあっさり

「てかよお、最近だと躊躇なく星人をやれるお前が怖いんだけど」

「あら？ これでもあなたの隣に立ちたくてやっているのよ？」

「さいで」

俺と岸本は、かつペ星人と小型恐竜を殲滅するとそう言い合った。

正直、前日もチビ星人を10体ぐらいを討伐している上に今回もテイラノサウルス1体と、小型恐竜を複数体も倒している。

覚悟を決めた岸本は、上手く生き残れば俺と同じぐらいに強くなりそうだ。

とは言え、今回のミッションも粗方終わったようなので転送を待っている、和泉がパンダを抱えて建物から出てきた。巨大な恐竜を連れて。

しかも、そいつは日本語を喋っているようで自分の子供を殺されたことに対して怒っているようだ。

そのため、俺はエアバイクに乗って放置気味の巨大ロボに乗り換えると丁度よく、哀れな犠牲者になる警察の方々がやって来た。

まさか、建物が破壊して行っているのがガス爆発ではなく、星人による攻撃だとは思えないだろうなあと思いつつながら背中にあるパイプをつなげていく。

これは手動ではなく、タッチパネルを使ってハードスーツを着用しているかなどに答えて、首が乗っている部分の中心に座り込むと自動でパイプが繋がる仕組みだ。

最初、乗り込んだ時に使い方がわからなくてタッチパネルを操作した後で中央に座り込んだら、勝手にやってくれたのでそれ以降は操作した後座るようになっている。

こうすると、ロボットとリンクすることができて自分の身体を動かすようにできる。

そのため、でかい恐竜が何かをほざいているようだがそんなのはお構いなしに、そいつの顔を横から殴りつけた。

すると、そいつが俺に目標を定めて攻撃を始めたが横にステップし

てから胴体を殴ると、盛大に倒れたので横腹を狙ってひたすらに殴った。

『君が！・泣くまで！・殴るのを！・やめない！』

と、どこぞやのキャラクターのように殴り続けているとグチャリというイヤな音と共に、そいつは動かなくなっただので座っていた場所から加藤達を見ると警官達は全員がくたばっていた。

今回は、無関係な奴らが大量にくたばったようだがたくさんの死を見てきたから、特にこれといって感じるものはない。

昔だったら、嘆き悲しんだだろうが慣れっただ奴は恐ろしいな。この程度だと、何も感じない上に涙すら出ないんだから。

そう思いながら、ロボットから降りて岸本や加藤達の元に向かうと彼らも一安心したようだ。

「もう、お前がリーダーでいいんじゃないか？」

「はあ？」

「そうだな。俺達の中だどこのことについてよく知ってそうだからな」

「オイオイ。だからってリーダーはないだろ」

「俺からも推薦したい」

彼らと合流すると、サングラスの男からそう言われたので驚くと風も同調したので反対すると、加藤からも推薦をもらった。

理由を聞くと、今回も状況を整理して上手く指示を出せなかったらしいので自分より、冷静に行動できる俺に務めて欲しいらしい。

他人はどうでも良い、と思っっている俺がリーダーか。笑えねえ。

とは言え、反対する理由が見当たらないので折衷案を提案した。

「だったら、俺が暫定的にリーダーを務めるから加藤はその補佐をしてくれ。俺が指示出せない時なんか頼む」

「わかった」

「えーっと、黒人達は英語で通るかな？　英語で話していたし」

折衷案を提案すると、加藤達も頷いてくれたので黒人達にも説明した。

幸い、彼らはアメリカ人で日本にいた理由は店をやっていたらしい。そして、新宿での事件に巻き込まれてあの部屋にいたらしい。

不運な奴らが多数、いたようだが何だかんだいつてうるさい奴らは全滅したようなので、面倒くさくなくて助かる。うるさいのはいつだつて苦手だ。

そう思いながら、雑談していると転送が始まったようなので順次、転送していった全員が転送を終えるとガンツのタイマーが鳴った。

て、ちよつと待て。玄野がいねえ。ミッション開始直後まで、姿を確認していたのにかつペ星人を討伐する時や巨大な恐竜を倒した時なんかには姿が見えなかった。

そのため、和泉に聞くと巨大な恐竜と戦っている時にパワードスーツを着てこずに、その場に来て速攻でやられたらしい。

「ええ………」

「スーツを着てれば助かったのに」

「計ちゃん………」

その事実には、俺は困惑して岸本は呆れかえっていたが加藤は幼馴染みを失って悲しんでいた。

つーか、なんでスーツを着てこなかったんだ？

星人相手に、スーツ無しだと速攻でくたばることぐらいは充分知っているだろうに。

それともあれか、新宿での事件をニュースで見てスーツを着ないで電車で移動したとかか。

それだったら、残念ながら当然の結果としか、言えねえ。所謂、残当つて奴だな。

そう思っていると、俺達の点数が出た。

あほの……

11点

Total 11点

のこり89点

「あッ、あ!?!俺か!?!あほって……………」

相変わらずのネーミングセンスである。

そのため、坂田と名乗ったサン格拉斯の男は気に入ってない様子だったし、俺も同じよう反応を示すだろうな。

「つーか、11点って言われてもな」

とは言え、坂田は最初なので点数の意味がわからないので困惑するが俺がフォローを入れる。

「この採点は合計で100点になるとご褒美がもらえるんだ。後で説明するよ」

「あ、あぁ」

俺の言葉に、坂田は戸惑っていたが次の奴の点数に移った。

りゅーぎきのファン2号

0点

TOTAL 0点

りゅーぎきをみすぎ

「りゅーぎきのファン2号って誰だ?」

「この絵って……………」

「えっ、えー……っ、えー……っ!!」

次はレイカらしいが、ここまで来るとなんていうか修羅場に発展しそうだな。

「え? え?」

「あー! だからっ!!」

「ええ……………(困惑)」

「これっ! うそっ! うそだから!!」

「……………」

恥じらうアイドルも良いんだが、その一方で岸本がレイカを視線だけで殺しそうなオーラを出しているのでヤバいと思ってしまうた。

しかし、騒ぎになっている間にも次の奴に移った。

いなかっぺ大将

5点

Total 5点

残り95てん

「ふん、こんなもんか」

「だな。初参加にしてはやった方だと思うぞ」

ガンツの採点に、風がそう言ったので俺もフォローしておく。
俺だつてそうだし。

チエリー

9てん

TOTAL 9点

残り91てん

「9点か〜」

「まあまあじゃねえか」

ハゲ

5点

Total 5点

残り95てん

「ははは…ハゲ？私？」

「……………」

頭髪が後退しているせいで、フォローしづらい。

てか、鈴木さんつていつ点数取ったんだろうか。基本的に後ろを歩いていた気がしたが。

稲葉

0点

かっこつけすぎ
影うすい

「カッコつけすぎ……」

「……………」

そのカッコつけすぎの稲葉は、壁を背に片足の膝を立てて座っていた。

確かにかっこつけすぎているし、なんか喋ろよと思ったが物凄く話しかけずらくなつたな。

ホイホイ

0てん

やる気はかんじるのだが
和泉につきまといすぎ

「ホイホイってあの動物園の…?」

そう言えば、集まった時にパンダもいたな。

何でだろうなあと思っていたが、和泉と一緒にいたんだろう。完全に癒し要素である。

和泉くん

16てん

Total16てん

あと84てんでおわり

「おおすげえ!!」

「16点って……この人……」

坂田達は驚いていたが、かつての和泉を知っている立場からすればできて当然だ。

彼も、当然のことのように受け止めているしね。

かとうちや (笑)

5点

TOTAL25てん

「おお……」

前回、チビ星人を5体ほどやっていたようなのでその点数と今回の
を足して15点もプラスしてある。

俺や西に比べれば、テンポは遅いがそれでも着実に進めている。

西くん

18点

TOTAL22てん

西も西で、チビ星人の時に10体位を倒しているので100点メ
ニューから1人、復活させている。

今回は、話すことはなかったが次回のミッション時にはある程度の
会話ができているはずだ。

斉藤ちゃん

15点

TOTAL15てん

この人が、西が復活させた人物。

性別は女性で、ショートヘアの女子高校生だ。

きしもと

26点

TOTAL71てん

岸本は前回、チビ星人を10体以上を倒していたからこの点数に
なっている。

どんどん強くなっていくから怖いでござる。

りゅーぎき

46点

TOTAL63てん

「おおーやるねー」

「やっぱさすがリーダーー！」

あー見えて結構、やったからそれなりの点数が入った上に岸本のフォローもあったから比較的、らくに点数が入った。

そのため、俺はメンバー同士で集まって情報交換をして生き残る確率を上げる提案をした。

これは、最後まで生き残りそうだった玄野がくたばったことで残り時間が、少なくなってきたカタストロフィに備えるものである。

核戦争は起こりにくい以上、強制参加ではないが死にたくなければ集まって欲しいことを伝えて、それぞれのメールアドレスを交換してから部屋を出た。

第17話 デートと奇襲

「お疲れ〜」

「おお、またなー」

大学の講義後、俺はいつものように帰宅の途についた。大学のサークルには参加しない。

そんなのに時間を潰すなら、星人対策に身体を動かしてフリーランニングをした方が効果的だ。

サークルによつては、フリーランニングをしているサークルもあるようだが、俺達がやっているのは既存のそれとは大幅に違う。

助走を付ければ、10メートルぐらいの距離は平気で飛ぶ上に同じぐらいの高さだつて飛べる。

だからこそ、俺は加藤達を集めてスーツの性能を確かめさせていた。

現状、熟練の域に達しているのは俺と西で和泉は長期間のブランクを埋めるため、単独で何かをしているようだが俺達が知るよしもない。

そもそも、彼や西に聞いても素直な回答が来る訳でもないので疑問に思うこと自体が、おかしい話なので当面は彼らの練度を上げる。

そうすれば、ある程度の人数は死にくくなるのでこつちとしても面倒なことを彼らに、押し付けることができるのかもしれない。

しかし、その一方である問題が発生していた。

それは――

「新宿での事件の時に多恵ちゃんつて子とメアド、交換するんじゃないかった〜」

「ああ、玄野が失踪したただのなんだので相談に乗っているんだろ？」

「そうなんだけどさ〜、玄野の隠し方が下手くそすぎて何かがあると察していて嘘つくのが大変なんだよ〜」

「なーる。だから彼女のメールが来たら毎度のように唸っていた訳か」

そう、玄野の彼女である小島多恵からのメールについてだった。

新宿での事件で、俺達が彼女を助けて岸本が相談に乗っていた時にメアドを交換したらしいが、その時に何でも相談に乗るとい話をしたらしい。

人間1人ができることなんて、限られている訳だから俺だったらそんなことは基本的に言わないスタンスを取っているが、岸本は違つたと言うことだ。

まあ、数ヶ月前まで普通の女子高生だったのだからそれは仕方ないとして、問題は玄野がどうしていなくなったかについての理由を作らないといけない。

作らなくても良いだろうが、適当に話をあわせないといけないから面倒だなあと思っていると、俺の携帯に着信があった。

開いてみると、レイカからの電話だったために岸本に目で合図して電話を取った。

「もしもし、どうした？」

『竜崎くん、今って暇にしてた？』

「岸本と雑談していた」

『そ、そうなんだ………』

彼女の質問に、そう答えると戸惑った感じの反応を帰ってきたがそんなことはどうでもいい。

レイカは、有名なグラビアアイドルなのでデートなんかをすると翌週の週刊誌に、掲載される可能性が非常に高い。

なので、少なくともデートだと思われないうにしないといけないため、適当に相づちを打っているとこんなことを聞いてきた。

『ねえ、今度さ』

「おう」

『3人で映画を見に行かない？』

「映画？ それは良いとして何故に3人？」

『だって岸本さん、呼ばないと怒られそうだから』

「なーる、ちよつと待ってろ」

俺がそう言うと、岸本に映画を見に行かねえかと聞いてみると理由を聞き返されたので、事実を言うとこんなことを返された。

「だったらどっちが誠くんの彼女なのかを示さないかね」
「あー、ほどほどにしてくれると助かる」

岸本の答えと、危ない雰囲気には俺は引きながらもレイカといつ、映画を見るのかを確認していった。

渋谷

「ふむ……来た訳だがどこにいるのかがわからん」

「ねー、そう言ったのをちゃんと聞かなかったの？」

「聞こうとしたら切られたんだよ」

レイカと映画を見ることになった訳だが、肝心の落ち合う場所を決める前に彼女が電話を切ったので落ち合うにも落ち合えんぞ。

そのため、駅構内でも目立つ場所に2人で待っていると後ろから声を掛けられた。

声から察するに、レイカだとわかるので振り返ると誰だかわからない格好の彼女がいた。

「あー、レイカか？」

「うん、そう」

「よろしくね〜」

戸惑っている俺に比べて、岸本は冷静だったのでどこで何を見るのかなどを雑談しながら歩いていると、黒服の連中が俺達を囲った。

「オイオイ、場所と時間をわきまえねえな」

「誠くん、この人達……」

「ああ、吸血鬼だ」

俺と岸本で話し合っていると、坊主頭の吸血鬼が俺に話しかけてきた。

「おう、お前。俺の仲間^{ダチ}が世話になったようだな」

「全く、俺は同性愛の気はないぞ」

「そう言ってるじゃねえ!!」

俺のジョークに、そいつは半ギレで突っかかってきたが俺からすれ

ばその動きは緩慢すぎる。

そのため、俺は着込んでいたパワードスーツの周波数を変えると同じく着込んでいた岸本は、レイカと共に地面にヘタレ込んだ瞬間に俺はガンツソードで吸血鬼に斬りかかった。

「うろたえるな！ 周波数を変え——」

ざわめく吸血鬼の中でまず、坊主頭の吸血鬼の頭をはねると2、3人を切り崩してから5メートルぐらいまで、刃の部分を伸ばしてから横に切り裂いた。

すると、それに対応できなかった吸血鬼がくたばって残りは数人になったので、全く持って歯ごたえがないと思ってしまった。

裏路地で、多数で囲めば勝てると思えば上がっているならその幻想を今、ぶち壊したのだ。

そのため、俺は岸本達から離れるように行動すると逆上した吸血鬼達は俺についてきたので、裏路地を移動しているとカメラを持った人物と出会ったのでそいつを斬り殺してから、吸血鬼を1人1人倒していった。

無関係な人間を殺したのは例え、パワードスーツで周波数を変えても写真には写ってしまうのでそれだけでも頭が吹っ飛んでしまう。

だから、仕方なくではあるが斬り殺した訳で別に和泉のように無差別殺人をする訳ではない。

それに今、攻撃してきているのは俺達と敵対している組織なのでそいつらをいくら、殺しても良心の呵責に面割れる訳もない。じやないと生き残れないし。

そのため、ものの数分で残った吸血鬼を殲滅してから来た道に戻って殺した人間が、持っていたカメラを握りつぶして粉々にすると岸本達の元へと向かった。

すると、岸本はへっちゃらだったがレイカは顔を青ざめていた。

「とまあ、俺はある業界では人気者だね。こう言った変人共から追われているのさ」

俺がそう言うと、レイカは腑に落ちない様子だったがそれどころではなかったようで、すぐにその場を後にした。

だってねえ、斬殺された死体が自分達の傍らに転がっているんだぜ。

グロテスクなシーンに慣れてないと、こういったものには嫌悪感を出してしまうので場所を変えて落ち着かせると、当初の目的であった映画を見に行くことになった。

そして、映画を見る時は俺の両側に彼女達が座って平気な様子で見ているが、こういう時の女性って強かだよなあと思った。

岸本はともかく、レイカはほんの数時間前にスプラッタを見たのに平気な様子だったし。

そんな訳で、俺と岸本は映画を見終わった後は無事に帰ることが出来て、レイカも帰宅してきた旨をメールで伝えてきた。

それを確認した俺は、嫉妬している岸本を脇に一安心して眠りについた。

もちろん、岸本には夜襲（意味深）されてギシアン展開になったがそれは別に良い。

とは言え、アイドルとデートしたのだからそう言ったのを扱う週刊誌辺りに掲載される、と思っていたが翌週になっても掲載されなかったのが粉々にしたのが良かったのだろう。

そして、レイカとのデートから10日ほど経ってから星人討伐のミッションを受けることになった。

第18話 ローター責めにしてみた ☆

「うっ……んっ……」

それは、星人との戦闘と戦闘の間の休日に行われた。

仏像戦後、肉体的な関係になった俺達は回数を重ねるごとに2人の間で信頼関係ができて連携も上手くなった反面、ややマンネリになっている感じがしてきた。

岸本もそう思っているようで、やった後はやや不満そうな表情がたまに滲み出ていたので、今回は趣旨を変えてデートと称して2人で一緒に外出していた。

実際、同居人同士なんだからカップルに見えなくもないのだが、隣で歩く岸本は顔を赤らめている。

何故なら、彼女の秘所にはローターが仕込まれていて、それが微弱な振動を彼女に伝えているのだ。

その結果、イクにイけない快樂に悩まされている感じであるのだが俺はリモコンで強くしたり、弱くしたりして恥ずかしがらせていた。本来なら、嫌がってもいいはずなのだが岸本もノリノリで賛成してくれたので、刺激は欲しかったのだろう。

戦闘時に、気の緩みがあると即死する可能性があるのです、丁度良い具合のスリルを感じている。

と言っても、時間帯は夜だ。

理由は単純で、その方がやりたくなったら暗い場所に行つてやることのできるからだ。

そのため、コンビニに行つて岸本に買い物任せの手筈なのだが、道中では微弱だった振動を買い物中は1段階、強くして入店させた。

買い物の内容はガリガリ君を2人分、買ってくるというものだがレジに行つた際に更に強くしてみた。

すると、声が出たが辛うじて喘ぐ声が聞こえた程度で済んだものの内股になって思わず、股に手をやってしまったので店員さんに心配された。

しかし、岸本はなんとか切り抜けてレジを済ませて出てくると俺の

怒り始めた。

「もう！ 勝手に強くしないでよ！ 心配されちゃったじゃん！」

「スマンスマン。岸本の恥ずかしがる姿が見たくてね」

「何が見たかった、よ！ 物凄い恥ずかしかったんだからね！」

「ははは、悪かったって。それでガリガリ君は買ってきたかい？」

「う、うん。誠の分だけ、買ってきちゃったけど」

「じゃあ、一緒に食べるか」

俺の言葉に、彼女はホッと息を吐いたのでコンビニの店裏に座り込むとガリガリ君を食べ始めた。

しかし、食べ書けではあるのだが股間の逸物に血が溜まる感触がしたので、この場所でやることにした。

「ちよ、ちよつと！ ここでやる気!？」

「勿論じゃないか。何のためにローターを仕込んでここまでできたんだい」

「そりゃあ、そうだけど………」

「それに、こっちは既にOKだよ」

「んっ、バカ………」

そう言いながら、秘所に指をやると既にびしょびしょで糸を引いていたので彼女を立たせ、コンビニの壁に手を突かせるとその綺麗なお尻の近くにある秘所に逸物を挿入した。

「んああああ！ 店員に声が聞こえちゃうよお！」

「寧ろ、聞かせてやれよ。夜に仕事してるんだからさ」

恥ずかしがる岸本に、腰を振りながらそう言っ続けると簡単にイってしまった。

「やつ、やだあ！ エッチな声が聞こえちゃう！ そんなに腰振ったら、我慢できな、いっぱい出ちゃう！ イっちゃうう！」

「誠！ イっちゃ、ふあ！ あっ、あーっ！」

そう叫びつつ、絶頂して体を大きく痙攣させた。

こうして、外でやる性行為が終了した。

第19話 2連続ミッション

「ゆびわ星人ね」

「なんか、ごっつそうね」

俺達は、ガンツの討伐ミッションを見ながら思い思いのことを発言した。

前回のミッション時、かなりの人数が生き残った訳だがそれでも数人がガンツによって呼び出されていたので彼らに対する説明は、加藤に任せて持つていく装備を決めていく。

俺は今回、Zガンを使用するので岸本はXショットガンを2挺も装備して行くことになり、西は相変わらずのZガンで風や坂田、桜井以外もXショットガンを装備。

訓練で決めたのは、2人一組になって必ず1体は倒すようにするというもので風や和泉といった実力者は、単独行動でもよしとした。

これは、実力がそこまで高くないメンバーに足を引つ張られる可能性が高いからで、早めに終わらせるためにそういう風に決めたが今回はあっさりと終了した。

いやだってねえ、風なんかは格闘技のプロだから良いとしても坂田と桜井が超能力で、かなりの強さを発揮したのですぐに終わることができた。

そのため、今回の採点結果を見ると1体当たり10点だったように聞こえたら、強すぎじゃねえかとも思ったりしたがミッションは終了したのでお開きとなった。

その際、岸本とレイカが初参加の女性から愚痴を聞いていたようだがその話は後で聞くとして、玄関から出ようとしても出られないらしい。

それを聞いた西が、苛立ちげに聞き返したが次の瞬間には例の曲が流れてきた。

「ねえ、誠くん」

「オイオイ、マジか。2連戦とか滅多にねえぞ」

2連戦と言うことに、俺は一抹の嫌な予感を感じながらその星人を

確認すると小島多恵というのが目標らしい。

「やべえよ、やべえよ」と思いつつも初参加のメンバーが1人、ミッション中に原因不明の死を遂げているので恐らくは写真なんかの類いに写ってしまったのだろう。

できるなら、生かしてやりたいのが本心ではあるが仲間割れしてまで、恋人でも親族でもない奴を守る義務はないので致し方ない。痛みも無しにさくつと殺してやろう。

「……」

「マップでは比較的、近くにいるようね」

ガンツの転送が終わった時点で、メンバーと行動を確認する。

そもそも、岸本の発言では恐竜戦でくたばった玄野の彼女は今回のターゲットな訳で、恐らくは恋人を失って記憶が薄れないように行動していたのだろうと予測できる。

しかし、ガンツから提示されたミッションをクリアしないと全員の点数が、ゼロになりかねないので情状酌量の余地はない。

生憎、肝心の玄野がないので呼び出す役目は岸本に任せた。

何故なら、小島多恵とはある程度の関わり合いがある上にこまめに連絡も取り合っているので、『玄野の手掛かりが少し掴めた』などで誘導すれば簡単にやれる。

レイカや加藤は、やや不服そうだったが止めるんだったら実力行使をしてくれ、と言ってから俺は行動に移した。

まずは、小島多恵の家に行つて当の本人がいるかどうかを確認して発見次第、率先して潰そうと思う。

理由は只の人間、しかも弱い少女を写真に写っただけで殺すとは思えない。

ガンツがやることに、意味があるとするならば俺達を試している可能性がある。

人間を殺めることへの意識について、ガンツから問いが出てその回答を行動で示せと言っている気がしてならない。

さすがに、考えすぎかもしれないがだからといって考えるのをやめ

たら、そこら辺の動物と変わらない気がしてきた。

以前の俺だったら、こんなことを考えずに速攻で躊躇なく殺していただろうが、岸本との同居生活で少しは変わってしまったようだ。

そのため、ターゲットの家に着くと他のメンバーも来たようなので、玄関をガンツソードでこじ開けて家に押し入った。

一戸建てで、2階もあるとするなら大概は寝室も2階にあるので片っ端から開けていくと、道路に面した部屋に彼女はいた。

これから、寝ようとしていたようで部屋の灯りは点いていなかったが新宿での事件で、見かけたのですぐに彼女だと思った。

とは言え、いきなり不法侵入しているのだからかなり不安がっていたのでこう言った。

「今夜の出来事は全て夢だ。だから安心して眠ると良い」

俺はそう言いながら、ガンツソードで彼女を切り捨てた。

すると、彼女は抵抗できずに力無く倒れると転送されるかのように頭から消えていったが、床には大量の血が流れていて壁にも多少の返り血が付いてしまった。

綺麗に切れないものだな、と思いつつ佇んでいると俺も転送が始まったようだ。

「竜崎……………」

「竜崎くん……………」

転送が終わり、例の部屋に戻るとどうやら俺が1番最後だったようだ。

そのため、加藤達は怒りを露わにした表情を作っていたがそれを無視して採点結果を見ると、100点メニューが出てきたのでメモリーを表示させた。

表示された写真を見ていくと、小島多恵の写真もあつたので俺かこう言った。

「3番…………小島多恵を再生させてくれ」

「なっ!?!」

「オイ!!」

俺がそう言うのと、和泉と西は驚きを隠せなかったがそれとは裏腹に窓の外に向かつて、光線が出ていったので再生されたんじゃないやなからうか。

それを確認すると、和泉が俺に掴みかかってきてこう言ってきた。

「竜崎！お前なんで再生させるような真似をした!!頭が吹っ飛ぶ可能性があるんだぞ!!」

「そうだ、竜崎。お前らしくもない」

泉の言葉に、西が同調してきたので釈明をした。

今回のミッション、本当にただ単純に殺すことが目的なのかというものでそれに関して、俺はそう思わないとした上であくまでガンツにとっての余興程度にしか、感じていないと考えている。

これでもし、また彼女の討伐ミッションが出た時には好きなようにしてくれて構わない、と伝えると和泉達は何も言わなくなったので帰るつもりで玄関に足を向けた。

すると、今度は加藤達から話しかけられた。

「竜崎、これでもしお前が死んだらどうしたらいい?」

「好きにしろ。俺はこの部屋に来てから充分に楽しんだ。その上でくたばれるんだったら文句はないさ」

「だったら私が復活させてあげる。ここまで生き残れたのはあなたのおかげなんだし」

「……………好きにするといい」

俺の言葉に、岸本がそう言ったのでそう返すのにこりと笑って付いてきてくれた。

こうして、2連続のミッションは終了した。

閑話 竜崎という男について

加藤視点

竜崎について？

こう言っちゃ、なんだが俺は時折アイツのことがわからなくなる。アイツは基本的に、単独行動をして星人をやりまくっているのだが岸本とレイカは何故か、アイツについて行くようになった。

あんな奴のどこが、好きになったのかはわからないがアイツが拒絶していないところを見ると、上手く行っているようだ。

最初にあいつと会った時は、計ちゃんと一緒に人助けをした後に電車に轢かれてあの部屋に呼ばれた時さ。

当時のアイツは、他人とは関わる気がない雰囲気を出していたのだが、混乱する俺達を試すかのように嘘の説明をして星人を討伐するミッションをやらせた。

あの時の俺達は、何も知らないで言われるままにスーツを着たが種族が違えど、生きている星人を躊躇なく殺せるアイツに恐怖を感じた。

しかし、ミッション終了後に説明された時にはああ言った星人を倒さないと行けないのか、とがっくりしたけど呼び出される度にアイツの凄さがわかったような気がする。

何故なら、アイツは星人相手に躊躇なく引き金を引いてハードスーツで殴り倒すからだ。

他のメンバーは、それに鼓舞されたようだが俺には到底出来ない。どうしても、その後ろにいる存在について考えてしまうからだ。

そんなアイツに以前、聞いたことがある。

『どうしてそんなに簡単に星人を倒せるんだ？』

すると、アイツはなんて返したと思う？

『やらなければやられるからねえ。一瞬の躊躇でくたばった奴らをごまんと見てきたからだよ』

そう言いきったんだよ。

だから俺は到底、お前のように人間や星人を躊躇いもなく殺せないと言ったら『いいんじゃない？ そういった奴がいてもよ』と返してきたから拍子抜けした。

だが、そこにはアイツの持論があつて『人間は十人十色、1つの考えを押し付けることは出来ない』という考えらしい。

優しいんだか、怖いんだかわからなくなってきたが少なくともこれだけは言える。

無闇矢鱈と犠牲を出すようなことを言わない奴だ。

坂田視点

竜崎のことだつて？

俺はアイツのこと、あまり好きになれそうにないな。

だつてアイツは、独断専行して小島だつて？ そいつを殺したからな。しかも最速で。

あの部屋に戻ってきて、採点結果の後でカメラのフィルムにゆびわ星人のミツシヨン時に、くたばった奴が写っていると言うことをほざいたからだ。

とは言え、そのフィルムさえ壊してしまえば彼女は救われると言ったから俺達の要望で、その場で握りつぶしたがこれである少女が死ぬ可能性は低くなったけどゼロじゃない。

この先、偶然にもあの少女が再び写真に収めたら和泉達は俺達の制止を振り切つて、討伐するだろうが俺達もくたばった奴の彼女を助けるようなことをしない。

だつて、俺達には無関係だからだ。無関係な奴に命を張つてもしようがない。

それよりかは、桜井やトンコツという少女を守った方がまだ有意義だ。

アイツの感想を一言で言えつて？

うーん、難しいが俺がわかる範囲で言えば良くわからん奴ではあるな。

だってそうだろう？

私生活でのことなんて殆ど喋らないし、岸本と同棲しているのはわかるんだがだからといってそれ以上のことはわからない。

ならば、その一言に尽きるな。

西視点

はあ？　なんで俺が言わないといけないんだよ。

竜崎について、詳しく知りたい？　ふーん、それで俺に聞いちゃうんだ。

教えても良いけど、タダでは教えられないなあ。

何が欲しいかって？　べつに。

アイツのことはお前よりか、知っているけどだからって教える義務はないね。

いくら、グラビアアイドルだからって俺にはそういった趣味はないしね。

だからはつきり、言っておく。

あまり、踏み込みすぎてへマするなよ。

あいつ、ああ見えて他人に対してかなり警戒心が強いからな。踏み込みすぎると四肢欠損なんてことにはなりたくないだろ？

アイツの印象？

そんなモン、決まってるだろ。

一匹狼さ。

風視点

竜崎について、か。

最初に会った時に、互いん格闘技でやり合った時だな。

そんな時に感じたんな、武道家つちして圧倒的な強さば持っていてそこらんヤンキーちやりかは手応えがあった。

あそこまでやれる奴はいねえ。

どぎやん鍛練ば積めばあそこまでやれるんか、おれには見当の付かん。

たぶんやけど、先天的な素質があつたんだろうがあそこまでやるんは並大抵ん努力では行かん。

これはおれん予想ばつてん、星人つちん戦いで開花したんだつち思う。だからこしよ、今までん生き残れたつち。

今んおれん目標な、アイツつち対等に戦えるこつだな。

元々、おれは強か奴ば求めて東京にやつち来よる。

だからこしよ、アイツつち対等に戦えて始めてオレン限界ば知るこつの出きんしやーつち思う。

竜崎ん印象？

武道家だな。

岸本視点

なーんで私に聞くなあ。

言つておくけど、私達つてライバル同士なんだよ？

私は数ヶ月前から、アイツの料理を作つて掃除もしているんだよ。

たかだか、出会つてから数週間しか経つていない奴に負ける訳ないじゃん。

それとも何？ 略奪婚でもする気？

正直に言つておくけど、略奪婚なんて大半は悲惨な目になつていくからね。

特にあんた、アイドルの職業を持つているんでしょ？

略奪婚とまでは行かなくても、何かしらのタレコミがあればあなたが築いてきた地位を一気に失う可能性があるんだからね。そのリスクを考えて行動してよね。

え？ それでも一緒にいたい？

あのさあ、あんたがそこまでする理由って何さ。

普通だったら、もうちよつと様子を見たりしない？ 一目惚れしたからって、相手がどういった奴なのかを確かめないと騙されるわよ。

ふーん、私を抜かして一緒になるのが目標ね。

なら、丁度良い場所があるわ。星人の討伐ミッションよ。

彼らには悪いけど、そこでどっちが多く星人を倒せたか勝負しましょう。

ハンデはないわ。どっちが多く倒して多くの点数を取れるかを決めるんだから。

ま、初心者の方には私に勝つことは難しいけどね。

……はあ？ こんな時に彼の印象を聞く？

まあいいわ、今日は特別に言っただけ。

静かな野獣よ。

第20話 才二星人討伐戦①

小島多恵の討伐ミッション後、しばらくしてから俺は知り合いに渡して調べてもらっていたものを郵便で受け取ったので、それを岸本の前で取りだした。

「それは……フィルムと写真？」

「ああ。これは小島多恵の討伐時、机の上に置いてあったのが目に留まってね。転送される前に持って帰ってきたものだ」

「強盗……じゃないわね。あの時のが写真に写っている可能性もあった訳だし、これが世間一般に広まれば私達が危なくなるもの」

「だからこそ、このフィルムに載っている写真を現像して見やすくしたものを送ってもらった。写った奴は既にくたばった訳だし」

俺はそう言いつつ、写真を見ていくと夜の都会の様々な風景が写されていたがその中の1枚に、ガンツのメンバーが写っていた。

だからこそ、写った瞬間に頭が吹っ飛んだ訳でこのフィルムを持ってこなかったらもう一回、彼女を殺さないといけない戦いになっていただろう。

あの時、彼女を復活させるだけの点数が入るだろうと思ってあしたが2回目以降は、100点メニューを選べるだけの点数がないので無理に参加するつもりはなかった。

そして、小島多恵を殺さなくてもフィルムを壊せば充分だろうと後になって気が付いたが、そうすると和泉を筆頭に彼女を殺そうとするだろうから時間的猶予はなかった。

あつたとしても、内部分裂で戦争になっていただろうからメンバーの中で、数名はくたばっていた可能性もあった。

となれば、ああやって強制的に殺した方が和泉達が納得しやすい上に、復活させれば加藤達からの非難も少なくなると考えた結果だ。

とは言え、桜井や坂田、風なんかはどっちでも良いといった感じだったので無理に復活させる必要もなかったかなあと感じながらある行動をした。

それはフィルムを粉々に壊して、写真をシュレッダーダストにする

ことだった、

これらのデータは、あるだけでも外部に漏れる可能性がある上に現像するだけでも、他者に漏れる可能性がある。

だから俺は、闇ルートでそういった専門業者に頼んで口止め料を含んだ金額を、彼らに渡して現像してもらった。

闇ルートや裏世界では、その深淵に近づくにつれて信頼が何よりも重要視されているので金さえ、払えば無闇矢鱈に口外することはない。

まあ、渡した分の金額以上に金額をもらったら口外するだろうが闇サイトで知り合った以上、相手側もこっちの事情を知っているのだから口に出さない。

他人にいう時は、カタストロフィ以降というのを看板にしているのである程度、信用して良いだろう。

そして、フィルムと写真を受け取った俺は重要な書類等が流出しないように予め、部屋に設置しておいたシュレッダーで微塵に粉碎した。

これによって、ガンツの情報は表に出る心配がなくなったので次のミッションまで、岸本と生活しながらレイカとデートをするというハーレムのような生活を送った。

別に俺が頼み込んだ訳ではなく、彼女達が競うように俺と行動して尽くしてくれるのでその行動力に若干、引きながら生活していると例の寒気が来た。

しかも、3人で寛いでいる時にだ。

「2人とも、スーツの準備はOK?」

「うん、問題ないわ」

「私も持ってきているからすぐに着れる」

「じゃあ、着込もうか。これからは楽しい楽しい戦闘の時間だ」

俺がそう言うと、岸本から転送されてレイカの次に俺が転送した。

「初参加の奴らが何人か、来て……………」

「そもそも、竜崎のおかげで……………」

「……………岸本さん」

俺と岸本がいつも通り、話し合いながら持つていく武器について決めようとしたら、俺達が予想だにしなかった奴がいた。

そいつは前回、討伐対象になった小島多恵だった。

目立ったところに外傷はないし、服も着ているから風呂場での自殺ではないだろうがまさか、彼女がこの部屋に呼ばれるとは思っていなかった。

そのため、岸本が困惑しながら多恵にここに来る直前に何があったかと聞くと、どうやら車に轢かれてくたばったらしい。

ここに来て、復活させる意味が無くなったなと思いつながら岸本にアイコンタクトをすると、多恵のケースを持って玄関に接している廊下で着替えさせた。

そして何故か、この部屋に来た子供は風を見て筋肉らいだーと叫んだのでそれはなんだ、と周囲は困惑したが俺はため息を吐くと彼にこう言った。

「今回だけ、この少年のヒーローになってやってくれないか？」

「ばってん……………ヒーローなんてやったことなかぞ」

「だが少なくともこいつには必要な存在だ。ヒーローって奴がな」
「……………」

俺がそう言うと、風はしばらく考えてから少年にパワードスーツを着せることにしたようで、岸本達と入れ替わるように廊下に行った。

そのため、俺達は互いになんの武器を持っていくかを決めて討伐対象を確認してから、それぞれの武器を持っていった。

今回の討伐対象は、オニ星人で一見すると一般人と大差ない外見をしている。

その結果、和泉や西といった手慣れたメンバー以外はやや困惑しているようだが、こういうのに限って強敵フラグな感じがする。

何故なら、一般人と同じ外見で生活しているとすると隠密スキルがないとできない芸当だし、外見を変えることが出来るのなら仲間割れを

誘発させることが出来る。

幸い、普段からの特訓に参加しているメンバーでは互いの癖やら思考などはある程度、把握しているのでそれを基準に相手の出方を窺えばいい。

しかし、西や和泉といった星人を熟知している奴なら良いが稲葉のように初回だけ、参加してその後はバックレている奴に関しては不意打ちに対応できないだろう。

そのため、彼のような奴は今回で死にそうだなと思いつつ俺はハードスーツとZガン、ガンツソードを持っていくことにした。

Zガンとガンツソードは、岸本に持たせてレイカはXショットガン2丁とガンツソード1本、というなんとまあ攻撃的な装備となった。

そして、俺達は転送された場所が池袋だった。

「オイオイ、マジか。こんな人混みの場所でやると流れ弾が心配だぜ」「これだけの人数だとかなりの数、倒さないといけないわね」

「こういうものだろう？ ガンツのミッションって」
などなど、それぞれの思いを口にしてから複数に分かれて行動を開始した。

まず、俺や和泉といった熟練は単独行動を取って発見次第、撃破していくって風は子供と一緒に行動して岸本達は何人かのチームになった。

こうすることで、慣れていない奴らは互いをカバーし合えるし、俺達なんかは流動的に動いて支援できる。

とは言え、西や和泉は自分のことだけを考えているので支援という名の点数稼ぎに、黙々と勤しむだろうな。

そう思いながら、移動していると如何にも強そうな奴が広場に立っていた。

「……………ねえ」

「何？ 多恵ちゃん」

「あなた達はこんな夜を何度も過ごしているの？」

「……………そうね。私なんかはもう5〜6回は参加しているわ」

彼女の質問に、私は淡々と答えると多恵は青ざめながらも私が渡したXガンを、強く握ってからあることを独白してきた。

「少し前、私の家に強盗が押し入ってきたんです」

「……………」

「その人は荒々しく玄関の扉を開けると一直線に私の部屋に入ってきたんです」

「……………」

「そして、私を確認すると言ってきたんです」

『今夜の出来事は全て夢だ。だから安心して眠ると良い』

その言葉を聞くと、私は誠くんらしいと思って彼女の話を聞いていたけどマップで星人の位置を確認すると、1人の男性に行き着いた。

そのため、私達が囲うと普通の人なら見えていない私達を、認識したので速攻で胴体を撃った。

こういう時は、一瞬の躊躇で生死を分かつと誠くんから聞いていたので、すぐに行動することが出来た。

私が撃った後、レイカも連射したのでそいつが喋ることも無しにくたばったようだ。

それを確認してから、私達は次の目標に移っていった。

第21話 才二星人討伐戦②

竜崎 side

「ふん！」

「ぜい！」

俺とそいつは、殴り合いを始めてから既に20分以上も経過しているが未だに決めれずにいた。

星人としては珍しく、耐久型のようなが手応えはある。

だが、そいつの隙はそいつ自身が熟知しているようではなかなか見せてくれないため、殴り合いに興じている訳だが流石はハードスーツのパワーと耐久力だ。

並のスーツだと、いちいち力を込めないと出せないパワーを平気で出せる。

そのため、相手は苦戦を強いられているが窮鼠は猫を噛むと言う諺があるように何をしてくるか、わからないのでアツパーをしてそいつを吹き飛ばした後、ビームを連射した。

すると、そいつは何も出来ずに粘り気のある液体に変化してから再生した。

「ほう……ビームが出せるようだな」

「お前もお前でスライムみたいだな」

「ククク……仲間から聞いているぞ」

「ああ？」

互いにそう言い合うと、そいつがそう言ったので話に耳を傾ける。

「ハンターの中でも強力な奴だな」

「金髪ホスト辺りかな」

そう呟くと、そいつが急接近してきたので構えたがその瞬間、誰かが乙ガンを撃ったようでそいつは汚いミンチになったので辺りを見渡すと岸本がやって来た。

「大丈夫？ 誠くん」

「ああ、助かったよ」

彼女の姿を確認して、ある程度の会話をしてから本物だということがわかった。

流星に、数ヶ月もの協同生活していると彼女の癖やらなんやらがわかるようになるもので、もう少し長引けば火炎放射器の必要性をものに実感するところだった。

世紀末の下っ端が、『汚物は消毒だ〜！』と叫んでいたが火炎放射器は、馬鹿にしてはいけない武器でもある。

何故なら、当たれば粘り気のある燃料が燃え尽きるまで燃やし尽くすからで、それと同時に周囲の酸素を使うので動きを制限できる。

とは言え、燃料タンクの中にはガソリンが入っているのでそれがやられれば、逆にこっちが火だるまになるので、チマチマとやるしかなかったがZガンに対しては強くなかったようである。

そのため、岸本に状況を確認すると他の星人もメンバーに死者が出ながらも倒せているようだ。

それを確認してから、加藤達と合流するとどうやら桜井が炎を使うオニ星人にやられたらしい。

その他にも、訓練にあまり参加しなかった奴や初参加の奴らの殆どがくたばった一方で、小島多恵と子供は周りの助けによってなんとか、生き残っているようだ。

まあ、多恵の場合は怖がつて何も出来ずに状況だけが変わっていくので本当に何もしていないので、俺達は最後の一体を倒すために移動していると黒服の吸血鬼達が反対側からやって来た。

それを確認して、立ち止まると加藤達も止まったので一触即発の状態だったが、金髪ホストを始めとする吸血鬼達にはやつきながら意味深なことをいって立ち去った。

『1人でも生き残ったら相手してやるよ』

『ははは、無理だろ』

『二度と嫌な面を会うこたないか…』

どうやら、最後の一体は強敵らしい。

それに、コントローラがおかしくなったようでマップが上手く映ら

ない上に、極めつけが俺達の姿が周囲に認識されても頭が吹っ飛ばないことだ。

恐らく、多くのメンバーが解放される可能性が出てきたが俺は最後まで残るさ。カタストロフィを、当事者として最期まで見届けたいし。

そんな訳で、大通りに向かっていると雷が連続して落ちたような音が聞こえてきた。

どうやら、和泉か西がラスボスと戦っていることを察したため、俺達は姿を消して大通りに出た。

すると珍しく、和泉が恐怖を顔に浮かべながら座り込んでいるので俺達はその近くまで歩いた。

「俺の気がこれで済んだと思うか…？　んなわけない…こんなもんじゃ」

「……………」

「おまえの首を引き抜いても…」

最後のオニ星人が、何かをほざいているようだがそんな言葉は関係ない。

そう思っつて、俺が自分の周波数を通常に戻すと加藤達も続いて戻したので、淡々と彼らにこう言った。

「信じろ…お前達なら出来る」

「俺はこれからこの街の人間を1人残らず殺す!!この街の人間がいなくなれば次の街だ!!」

「……………」

「俺は止まらない!止められるなら止めてみる!!虫ケラ共が!可能な俺を止めて見せろ!!」

「……………」

「俺が1人でもおまえら全体相手に勝ってみせる!!全人類が相手でも俺は勝ってみせる!!」

「……………」

なかなかの度胸だな。いや、この場合は怒りから来る言葉か。

仲間や同僚を失った結果、怒りによつて和泉を追い詰めたのだろうが肝心の俺を忘れては困る。

何故なら、和泉よりも経験を積んでハードスーツを着込んでいるのだからな。

怒りに任せて、叫んだオニ星人に対して俺は巨大な手を握りしめて拳を彼に対してフルスピードで繰り出した。

すると、オニ星人が上に飛んでから片腕を挙げて技を繰り出そうとしたので、俺はレイカにこう言った。

「レイカ！和泉を頼む！」

「うん！」

そう言つて、俺達が飛ぶとその数秒前までいた場所に雷が落ちてきた。

その技は、まるで雷様を思い浮かべるがそういった妄信の類いは信じてはいない。

理由としては、もしも神がいるとするならば星人をチマチマと送らず、地球に巨大な隕石でも落とせばいい。

そうしないのは、この星に魅力があつて星人を送ってきているだろうから、俺は神に祈る前に出来ることを最後までやる方だ。

そう思いながら、俺はオニ星人と殴り合つてるとやたらと速い。

とにかく、移動速度が速くてマトモに攻撃が出来ないが捉えられない速さではないため、奴の動きを止めるためにその攻撃を受け止めながらも反撃をして、徐々にダメージを与えていく。

その動きに、他のメンバーも同調して攻撃をしていく。

しかし、連携がうまくいっていないせいで一度は全員が吹き飛ばされて殆どのメンバーが、恐怖心を煽られたようだがそんなのは関係ない。

今までにも、多くの星人を相手にしてきたのだからこう言った恐怖には慣れている。

そのため、すぐに立ち上がつて攻撃を始めるとオニ星人が応戦してきたので、動きを止めながら殴り合つてると他のメンバーを立ち上

がってくれた。

それでも、一撃で吹っ飛ばされることが多いが風だけは違って俺に合わせるかのように、攻撃を繰り返してくれた。

やっぱり、格闘技の経験があつて有段者にもなればそれ相応の動きをしてくれるようだ。

その結果、2人でオニ星人を殴りまくっていると風が殴られた反動で、吹き飛ばされそうになったがその力を利用して片腕の関節を破壊した。

その痛みに、オニ星人がひるんだので肘から生えている剣を使ってトンファーのように振ると、微かにかすったがオニ星人の攻撃で風がやられた。

その光景を見て、他のメンバーはひるんだが俺はすぐに指示を出す。

「まだまだ！まだ止血すれば助かる!!」

その指示に、加藤がすぐに動いて止血を始めたのですぐに攻撃を再開した。

俺の動きに周りが、鼓舞されたようで岸本を始めとしたメンバーが動き始める一方、俺は風が残してくれたダメージを使って着実に攻撃を当てていった。

すると、お得意の猛スピードのペースが落ちてきたのでさらにいけるかと思つた瞬間、オニ星人の腕力によって吹き飛ばされた。

岸本 side

「くっ……！」

私は、彼が吹き飛ばされて少し怖くなった。

今まで、どんな状況でも淡々と余裕を持って行動してきた彼が、吹き飛ばされるのを見るのはこれが最初だったからだ。

けど、このパワードスーツの上からあのごついハードスーツを着込んでいるのだから、この程度ではくたばらないだろうと思つて周りを

鼓舞した。

「信じて！私達ならやれる！！もう少しだよ！！」

「おう！！」

「確かにそうだな！」

「やってやるわ！！」

私がそう言うのと加藤くんや坂田くん、鈴木さんやレイカといったメンバーが動き出した。

第22話 オ二星人討伐戦③

「くっそ……」

「くろう……」

竜崎が吹き飛ばされた後、残った加藤達で戦っていたが1人また1人とやられて行って、最後は岸本とレイカが残った。

途中で、西達も参戦したもののオ二星人の最後の力で吹き飛ばされたものの坂田の力によって、オ二星人の視力は大きくダウンした。

その坂田は、胴体に大穴を開けているので速く転送しないと手遅れになってしまう。

しかし、度重なるオ二星人の攻撃でレイカのスーツがおシヤカになつたのと、岸本が持っていたZガンが破壊されてXガンが2丁しか手元がない。

そのため、岸本がそのXガンで撃ちまくつたもののオ二星人に吹き飛ばされると、彼女のスーツもダメになつた。

残ったレイカも、Xガンを構えたが使えないスーツではマトモに避けきれぬ訳もなく、そいつに捕まえられると握りつぶされる覚悟をした。

だが、オ二星人は1つのことを失念していた。

それは竜崎が、今までにパワードスーツを使っていないことだ。

その結果、ハードスーツがクッションになってその下のスーツはほぼ無傷だったため、全速力で来た竜崎はガンツソードを振りかざしてオ二星人の片腕を切り落とす。

「ガアアアア!!」

「お前の敗因は、1人でやろうとしたことだ」

「キサマア!!」

一方のオ二星人はボロボロ、もう一方の竜崎は体力を消耗していると言つてもほぼ無傷。

その差は、殴り合いになると歴然の差となつて一方的な流れになつた。

そして、一旦は投げ捨てたガンツソードを再び拾い上げて構える

と、その隣に立つ人物がいた。

「和泉、息を合わせられるか？」

「無論だ。この戦闘で勘は取り戻した」

「よし、なら行くぞ」

和泉のスーツも、おシヤカになつていたがそれでも身体に傷らしい傷がなかったので、息を合わせてオニ星人に切り込むと終わりにしてはあっさりとした幕引きだった。

そのぐらい、オニ星人はダメージを蓄積していたようで和泉が首を切り、俺が胴体を切ると首がなくなった胴体は上下に分かれて落ちた。

そして、和泉は近くに落ちていたXショットガンを拾ってそいつの頭を吹き飛ばすと、やっと終わったんだという実感に包まれて大きいため息を吐いた。

そして、俺達は転送を待っていると周囲の人間達から歓声が上がった。

「どうなつてんだ？」

「恐らく、ガンツが不調のようだな。だが今回の場合、そのおかげで助かった部分もある」

「はあ？」

「時間を見てみる」

「……………そう言うことか」

和泉の質問に、俺が偶然にも生き残っていた街灯の時計を指さすと、ガンツが示したタイムリミットを大幅に過ぎていた。

それを理解した彼は、納得した様子で頷いていたが周囲の観客は俺達と何か、話したがっていたが生憎とタイムオーバーだ。

何故なら、俺達は負傷者を始めとしたメンバーと共に転送が始まったからだ。

そして、俺達はヘトヘトになりながら例の部屋に帰還することになった。

「誠くん、無事だったんだ」

「まあな。最期まで見届けたいし」

俺が転送されると既に岸本やレイカ、風やホイホイが部屋にいて俺達は生き残ったメンバーを待つことになる。

そのため、待っていると次に和泉と加藤が出てきてその後子供と多恵が転送されてきた。

この2人は、ラスボスのオニ星人とはやり合わずに遠くから見ているだけだったので助かった。

そして、おっちゃんである鈴木さんと稲葉が転送された後に、西と斉藤が来たので和泉は急かすようにこう言った。

「ガンツ！ 採点を始めろ！」

「後、坂田が残っている。ベルが鳴るまで待とうじゃないか」

「早くしろ！」

俺がそう言うと、和泉がそう返したので西も同調しているとベルが鳴ってしまった。

「くそ、手遅れだったか」

「……………」

俺が悔しげにそう言うと、岸本達の表情が暗くなったので採点結果に移った。

すると、それぞれの採点結果は以下の通りになった。

レイカ

102点

TOTAL 102点

筋肉らいだー

115点

Total 115点

ハゲ

100点
Total 100点

稲葉

0点

だいジヨブ!

100人乗れる(笑)

ホイホイ

0てん

あそびすぎ

なつきすぎ

タケシ

0てん

TOTAL 0てん

おうえんしすぎ

泣きすぎ

タエちゃん

0てん

Total 0てん

力なさすぎ

怯えすぎ

和泉くん

126てん

Total 142てん

西くん

105点

TOTAL 127てん

斉藤ちゃん

96点

TOTAL 111てん

かとうちや (笑)

73点

TOTAL 98てん

きしもと

97点

TOTAL 126てん

りゅーざき

98点

TOTAL 101てん

採点結果はこのようになり、和泉と西、そして斉藤は即座に強い武器を選んだが風と鈴木さんによって、坂田と桜井が復活した。

2人は最初、混乱こそはしたが生きて帰れることを実感したよう
で涙を流していた。

一方、意外だったのは岸本とレイカで2人だったら死んだ人を生き返らせるんだらうなあ、と思ったが強い武器を選んだ。

理由は、どうやら本気で俺の奪い合いが勃発しているらしい。

最後に残った俺は、加藤にあることを聞いた。

「加藤、俺の点数で玄野を生き返らせることも出来るが……どうする？」

「……………」

「玄野？」

俺の質問に、加藤がだんまりだったのは小島多恵の目の前で聞いたからだ。

小島多恵が玄野の彼女だと言うことは、東京チームの間では当たり前になっていたので加藤は言いにくそうにしていたが、多恵はそんなことを知らずに聞いてきた。

「計ちゃんがここにいたんですか？」

「以前にな。だけど今夜のような戦いでくたばってね。丁度、彼がいなくなつた日のことだよ」

俺は、多恵の悩み事や玄野の周辺状況について岸本経由で聞いていたので、そう言うのと彼女は俯いてしばらくしてからこう言った。

「失踪する前、通りでおかしかったんだ。何かを隠しているような感じだった」

「……………」

「だけどここに来てはつきりした。計ちゃんがここで戦っていたのなら、私だって戦う必要がある」

「……………」

「だから竜崎さん」

「おう」

「計ちゃんはまだ、生き返らせないで下さい。私が生き返らせたいので」

小島多恵はまだ、顔を青ざめていたがそれでも覚悟を決めたようなので俺はそれ以上のことを彼女に言うつもりはなく、逆に加藤に聞いた。

「だとよ、加藤。どうする？」

「……………じゃあ、俺からも願います。元々は俺が目を離れた隙に起こってしまった出来事なので」

「あいよ、じゃあガンツ。2番でよろしく」

俺がそう言うと、ガンツの画面は消えていって俺達は解放されることになった。

そのため、俺達は次の訓練はどこでやるかなどを決めてからお開きとなった。

「もしもーし、鈴木さん」

『竜崎くん？ どうしたの？』

「お開きになった時に聞きそびれたんだが鈴木さん家ってご家族とかいる？」

『どうしてだい？』

俺の質問に、鈴木さんが聞き返してきたので理由を説明した。

タケシという子供を引き取った風は、博多から東京に上京してきたから長くいれる宿がない可能性があること。

もし可能なら、風達に部屋を貸してやって欲しいと伝えると彼は納得した様子でこう言った。

『なるほどねえ。確かに子供を連れて野宿は大変そうだから機会があったら私からも言っておくよ』

「すみません、ご家族もいらっしやるのに……………」

『何、妻に先立たれてから1人で寂しかったからねえ。良い機会だから2人分、孫が出来たように接していくさ』

「ありがとうございます」

俺と鈴木さんで、そう言い合ってからある程度の雑談をしてから電話を切った。

これで、風達の宿も出来たと思いなながら岸本と一緒に帰っていった。

第23話 フリーライターと強襲

オニ星人討伐後、俺達は平和に暮らしていたものの池袋の惨劇は大々的に報道され、今まで俺達が隠してきた意味が無くなった。

とは言え、未だに頭の中の爆弾が健在なら俺達から発信することは出来ない。

西は相変わらず、ネットを介して星人に関しての内容を公開しているが特定の人物に、行き着くような名前の出し方をしていない。

しかし、それでも顔が映った写真なんかネット上では挙げられているのでその内、俺達に行き着く輩がいるかもしれないな。

それを察して、西は数日前に黒い球の部屋を閉鎖してしまった。

警察が箝口令を発令して、特定の人物に行き着くような写真に目を光らせているが、それでもネットの広さは半端ではなく、既に何枚かの写真がネット上で挙げられている。

そして、何よりも俺に話しかけてきた男性がミステリーハンターでフリーライターだ、と言って取材を求めてきている。

名前は菊池誠一さん。トレンチコートを着て、メガネがよく似合っているお兄さんだ。

そんな彼が、俺に取材を求めている理由は報道機関に渡ったものが、没収されたのだがそのコピーを俺に見せてきたからだ。

「これは東京の多摩地区…板橋区…千葉の幕張…石川県…福岡県…こういった原因不明の建物破壊は、日本各地で発見されている。僕が調べた結果、世界各国で同類の現象を検証するサイトがあった」

「……………」
「他にも黒い球を信仰している宗教団体がドイツにあつて僕はピンときた」

「……………」
「何か知っていたら教えてもらえないか!？」

これがフツのミステリーハンターだったら、残念なことを書きまくってイタい人に見られるが彼ならある程度のことを話せるだろう。

理由は、大真面目にガンツについて追っているからな。

だからこそ、ガンツのキーワードを伏せながらの見解を言うことになった。

「同様な事件が2年前から発生している」と

「ああ」

「だがそれなのに何故、世間一般に知れ渡っていないのか。そこがキーになる」

「何故？」

「理由は、黒い服を着た人達が黒い球に関する情報を発信することができないんじゃないのか、と言う考えに行き着く」

「……………」

「例えば……………そうですね。黒い球の事について少しでも関連づける事を話せば爆死するとか……………ですかね」

「!？」

俺の発言は、暗に黒い球のチームだと言っているようなものであり、そうなれば質問の内容を変える必要がある。

そのことに気が付いた菊池さんは、顎に手をやりながら考え込んでからこう言ってきた。

「た……………たまに連絡しても……………いいか？」

「ええ、どうぞー」

俺が呑気にそう言うと、緊張していた菊池さんが肩の力が抜けたように笑って交換してから去って行った。

そして、菊池さんと入れ違うように岸本が帰ってきたのと同時にレイカまで来たのだから、今日の昼食は味わって食べれそうにないなと思ったのであった。

和泉 s i d e

「よお」

「あつ……………」

電車に乗る俺の隣に、西が座り込んできた。

オ二星人後、こいつに關しても多少は記憶が甦ってきたがそれでもまだまだだ。

そう思う俺を余所に、西は余裕の笑みを浮かべて聞いてきた。

「どうよ…今のチーム……」

「……………ありやダメだな」

「……………」

「竜崎を中心に活動を続けているようだが、前のチームは全滅したよ
うだから竜崎以外はカラストロフィの時点で役に立たない。もつと
強い武器を集めない。もう…時間が無い」

「日本はもう、今から頑張ったって遅いだろ…アメリカとかドイツと
か…イスラエルとかに任せとけば良いじゃん」

俺の言葉に、西がそう言ってきたがそれでも日本人としての誇りが
あるため、俺はこう返した。

「俺は日本人だ。竜崎と共に日本人の優秀さをトップであると言うこ
とを見せたい」

そう答えると、気に入らないようで次の質問が来た。

「ところでお前…昔のことを思い出したのか？」

「お前のことも多少、思い出してきた。それでも断片的にだがな」

「そいつは上々だ。大いに助かる」

西がそう言うと、携帯で話していた奴らの会話が聞こえてきた。

「はい、います。あ、やっちゃって良いんすか？ はい、わかりました」

「ちつ、また奴らか……………」

「なに？ また来たの？」

俺がそう言うと、西もニヤつきながら周波数を変えた。

以前、竜崎の方でも襲撃を受けたと報告があつたから俺達は前もつ
て、パスワードスーツを着込んでいたんだ。

俺達が見えなくなったため、黒服の片方が慌てた様子だがその混乱
が命取りになる。

そう思いながら、俺はガンツソードを取りだしてそいつらを切り捨
てた。

「つたあく、オフの日ですら襲撃してくるとか、こいつら暇すぎるだろう」

「ああ、住所まで特定されていたら厄介なことになる」

「勘弁してくれよ、ゆつくり休めないじゃん」

俺達が愚痴りながら、佇んでいると新手が先頭車両の方から来たので西は1番後ろの座席に寄り添う形で寝転んだため、俺はガンツソドの刃を伸ばしてから車両水平に切った。

そもそも、電車という狭い空間では進める方向や場所取りが難しいので、まとめてやれるのにはもってこいだ。

そのため、切り捨てた後で自宅の最寄り駅に降りると電話があった。

「もしもし……………」

「よお…無事だったんだな」

俺が電話に出ると、よく知った声が聞こえてきた。

聞くだけで、妙に落ち着く声だったのですぐに俺の目標としている人物だとわかった。

「竜崎か、どうした？」

「こっちは襲撃を受けてさ。それで、とある人からの情報なんだが黒服の集団に住所を漏らした人がいるらしいよ」

「マジか……………」

そいつは面倒だな。

「しかも、情報をくれた人が今夜は襲撃の日なんだって。だから今からそっちに行こうか？」

「……………ああ、助かる」

住所を特定されているのが痛いな。

しかも、今夜が襲撃の日だとするこの後も攻撃を受ける可能性が高いので、竜崎の支援をありがたく使わせてもらおう。

奴には悪いが、折れ合ってくたばりたくはないからな。

そう思いながら、電話を切って自宅があるマンションに向かうと駅から黒服の奴らがぞろぞろとやって来た。

「つたく、今日は厄日だな」

そう呟きながら、刃を収納したガンツソードを取りだした。

竜崎 side

「はあ、ったく。自宅周辺で襲撃されるとか、今までになかったぞ」「そうなの？ 竜崎くんってこんな人達に追われるほど人気なんじゃないの？」

「だからつつつて野郎に追っかけ回される男性俳優ほど、虚しいものはないだろ」

俺は周波数を元に戻して、そう呟くと岸本も周波数を戻して言ってきたのでヤレヤレといった感じで返した。

一見、平和そうに見える会話だが俺達が通った道には黒服の奴らが2, 30体、転がっていてその全てが死体に成り代わっていた。

そのため、とつと家に戻るとフリーライターの菊池さんから電話があった。

『竜崎クン、すまない…君と出会う前に入手した個人情報がある地下組織に渡してしまった。恐らく、今日ぐらいに襲撃があるだろう』

「さっき、俺の所にも来ましたからねえ」

『!? そ、そうか』

俺がそう言うのと、菊池さんは軽く動揺したようだがそれを無視して話を続ける。

「それで？ 誰の個人情報を渡したんです？」

『あ、ああ……そいつの名前は和泉紫音だ』

「あいあーい、了解です」

俺がそう言つて、切つてから和泉に電話するとあつちでも襲撃を受けたらしい。

そのため、支援する旨を伝えると了承してくれたので俺は、岸本と共に和泉の住所がある駅へ向かった。

流石の俺も、かつての優秀な仲間を見殺しにできるほど無関心ではないからな。

第24話 吸血鬼との決着

和泉 side

きゆううううん

「はあ…はあ…くそっ」

俺はその音と共に、スーツが使えなくなったことを悟った。

正直、大量に來た奴らを片っ端から処理していったら如何にも強敵
そうな奴らが出てきたので、やりやっていたら残り1人というところ
でスーツがダメになった。

それと、ここまで長丁場になっているのに竜崎が一向に現れない。
恐らく、来ている途中なんだろうがこのままだと俺がやられかねな
いから、一撃の下でとっと片付けるとしよう。

「諦めねえんだな」

「目標にしている奴がいるんでな。そう簡単にくたばってたまるか」
俺がそう言うと、タバコを吹かしている金髪吸血鬼と斬り合った。

竜崎 side

「かなりの数で強襲したんだな」

「でも和泉くんの死体が見当たらない」

「探そう。背負っている彼女のこともあるし」

俺達は今、和泉の自宅がある駅の周辺に來ていた。

俺の背中には、和泉の彼女と思われる女性が気絶しているが彼女は
偶然、俺達が駅に着くと駅から出てきて彼の名前を言っていたのでス
タンガンを使って失神させていた。

そして、死体がある方向に向かっていくと丁度よく、最後の吸血鬼
の胴体を袈裟切りにした和泉がいた。

そのため、切り終えた後に息絶え絶えで立てそうにない彼に近づい
て話しかけた。

「和泉、大丈夫か？」

「大丈夫に見えるか？ 竜崎」

「いや、そうは見えねえな。傷口もあるようだし」

俺がそう言うのと、彼の左肩から出血が確認できるのでスーツが壊れた後で来たものだろう。

しかし、見た目は派手だが出血量はそこまで酷くはないようなのですぐに、負傷した彼を匿ってくれる人物へ向かった。

その人物こそ、フリーライターの菊池さんで事前に確認を取ると、医療関係者とも繋がりがあるようなのでそこに匿ってもらうことにした。その方が、吸血鬼も手を出しにくいだろうからな。

その後、和泉が襲撃されたんだから吸血鬼はそう簡単に諦めないだろうと予想できるので、前もって準備はしておく。

吸血鬼と言えば、弱点は太陽光と水、銀や木の杭などの他に十字架と聖水など、苦手な分野は幅広く知られている。

しかし、だからといって簡単に倒せる奴らではないし、日中も活動していることから何かしらの薬を使っている可能性がある。

とは言え、吸血鬼の特性から夜にまで薬を併用している可能性は低い。

何故なら以前、奴らに襲われた時に水をぶっかけても意味がなかったことから太陽光にだけ、弱くなっている可能性がある。

銀に関しては、入手自体は簡単だがそれをどうやって奴らの体内にぶち込むかがわからないし、銀で出来たナイフやフォークでは奴らに止められる可能性が高い。

銃でぶち込もうにも、銃刀法で手続きや管理が面倒だということだからでは間に合わない。

木の杭や十字架なんかも、ナイフ同様に難しい上にかさばると言うことで持っていない。そもそも、十字架なんて本当に吸血鬼に効くのかかわからん。奴らに限っては眉唾に等しいものがある。

そんな訳で、俺と岸本はある程度の数の太陽光に近い電球をいくつか買ってから帰宅した。

正直、斬り合いをしても良いんだが数が数なのでこれらの装備であ

る程度の数を減らしたい。

それに、今までに軽く100人以上は殺しているのにそれでも送り込んでくるなんて、余程の人数に自信があるのか、俺達の強さに誤算があったのかは知らないが星人と同じく1匹残らず倒してやる。

そう思いながら、帰宅すると家の前に数人のスーツを着た人物がいた。

「君が竜崎クンだね？」

「あっはい」

「菊地さんから話は聞いているよね？」

「はい」

「なら家の中にいてよ。大丈夫だから」

「あーはい。ありがとうございます」

どうやら、俺達が帰宅する時に菊地さんから護衛する警官を呼んでもらえるという話だったが、どう考えても無駄な犠牲になりそうです。

だってねえ、スーツ姿で隠し通せる銃器となると拳銃ぐらいしかないし。

せめて、アサルトライフルや機関銃辺りがあれば足止めぐらいにはなるけど、一般人の護衛としては重装備すぎるからすぐには無理だ。

だから精々、命を対価に少しの足止めをしてもらうことにした。

そして、夕暮れから夜になる時間を使って対吸血鬼用の武器を作ってから待ち構えている間に、俺は岸本にこう言った。

「さて、今回は人の形をした奴らが相手だ」

「そうね。オニ星人の時も人の形をしていたわ」

「そいつらに対して躊躇なく、引き金を引けたか？」

「もち。じゃないと星人討伐なんて出来ないでしょ」

俺の言葉に、岸本は迷いなく返答したのでマジマジと彼女を見たが特に後悔していない様子だった。

そのため、俺は話を進める。

「だったら話は早い。躊躇したら速攻で殺されるから最初から殺すつもりで行った方が良い」

「……………」

「それと相手の動きを見て勘で予想しろ。とにかく、これまでの相手と比べてめっぽうに速いからな」

「了解」

俺がそう言いきって、彼女の返事を聞いたところで銃声が聞こえた。

音からして、警官が所持していた銃だろうがその後にはサブマシンガンと拳銃の銃声が、連続して聞こえてしばらくしてから静かになった。

そこから予測して、俺達は前もって計画した通りに周波数を変えた。

「……………いねえぞ」

「どこ行った?」

部屋に乗り込んできた吸血鬼達は、1人たりとてサングラスを付けていなかったたので部屋に全員が入り込むのと同時に、部屋の灯りを付けた。

すると、吸血鬼達は狼狽えたがそれを逃すことなく部屋の灯りは奴らの身体を崩壊へと導いた。

その結果、奴らはものの数秒で崩壊したがその粉が部屋に散らばったので、掃除が面倒だと思いつながら部屋の灯りを消した。

数分後、第二陣が突入してきたので同じように崩壊させた。

しかし、照明を操作していないのに電源が消えたのでどうやら電線をやられたようだ。

そのため、俺は岸本に合図して俺はガンツソードを取り出すと彼女もXショットガンを出して、戦う準備をすませると窓から入ろうとした奴を刺し殺して玄関から出た。

「あぐうー!」

「ぎゃあー!」

片っ端から、吸血鬼を殺して行っていると強そうな奴が2人で俺達

の前に立ち塞がった。

「おう、なかなか強そうだな」

「確かに、今まで奴らよりも強そうね」

俺と岸本が、周囲にいる吸血鬼を殲滅するのを待っていたかのようにそいつらが現れたので、一先ずは声を掛けて対話出来るかどうかを確認する。

「おい、今の内に回れ右してお母さんのところに帰ってあやしてもらうんだったら、見逃してやっても良いぜ?」

「最初からそのつもりはないとわかって言ってるんだろ?」

「おれとしちゃあ、とつと帰ってもらえたら助かるんだがねえ。面倒だから」

気怠げにそう言うと、そいつはイラツとした様子だったので話を続ける。

「いい加減、襲撃ばっかしてくるから面倒で仕方ないんだわ。とつととやめてくれない?」

「……………」

「つーか何?そういう命令?逆らったら惨たらしくくたばるの?」

「……………」

「それだったらとつとくたばって欲しいんだけど?」

「…………ふ、ざけるなあああああ!!」

とまあ、挑発していると堪忍袋の緒が切れたようで刀を振り落とすように挙げながら、走り込んできたので俺は横に薙いだ。

するとそいつは、上半身と下半身で真つ二つになったのもう1人の方を見ると丁度よく、岸本がそいつをたたき切っていたので一安心だな。

そのため、俺達は部屋に戻ろうとすると偶然にもいつもの寒気がしたので、今日も星人討伐をするんだなと思って準備した。

第25話　ぬらりひよん戦、開始

「どーやら、和泉もくたばんなかったようだな」

「あの後、俺達のところには一切来なかったぞ」

「と言うことは私達を強襲したメンバーで最後ということね？」

「だな」

俺と和泉、岸本で話し合っていると加藤達は首を傾げていたため、特に問題ないと伝えて今回の討伐する星人について確認した。

ガンツ曰く、討伐対象はぬらりひよんと言うらしく星人と付いていないので単体なのだろう。

「星人って付いてないな」

「どういう事だろ……………」

「恐らくではあるが、単体なのだろう。今までの形こそ、違っていたが複数体いたしな」

「確かに……………」

加藤とレイカが、疑問の声を上げたが和泉がそう言うことや納得したようだ。

とは言え、今までの星人は強かったとしてもチームで掛ければ対処できたし、最近で言うラスボスのオニ星人だってあれだけ強かったのにも関わらず、星人が付いていたのだから余程の強さなのだろう。そのため、今までの100点クリアで得た装備を可能な範囲で持っていこうと思う。

その内容は、以下の通りだ。

Zガン、飛行ユニット、ハードスーツ、巨大ロボ、加速ユニット、即死攻撃無効（1回のみ）、Oガトリングガン、サテライトキャノン、Lロケラン、手榴弾

Zガンから巨大ロボは良いとして、その先の武器が異様に豊富なのは俺が今まで溜めてきた装備一式だな。

まず、加速ユニットは1回のミッションで30秒間だけ、身体の動

きを10倍にする装備でこれはガンツスーツに付属している。

同じく、即死攻撃無効もスーツに付属していて1回だけ、即死から免れる。

次にOガトリングガンは、実際のミニガンと同様にバルカン砲を小型にしたような形をしているのだが、威力に関しては弾数で勝負といった意味合いが強い。その分、着弾も早い。

サテライトキャノンは衛星砲で、上空から強力なビームを発射してくれる装備だ。

Lロケランは、空の弾倉がLの形に似ているから勝手に付けているだけでそれ以外は普通のロケランだし、手榴弾も軍隊が使っているものと同等の威力しかない。

それでも、多種多様な手榴弾があるので加藤達にもいくつか持たせて他の装備も持たせた。

正直、俺1人で全ての装備を使い切るのは無理に近いのでリスク分散、という意味では充分に意味があるだろう。

そうしている内に、転送が始まったようだ。

「どうやら、俺からのようだ」

「行った先で待っててくれ。全員が転送されるまでな」

「……………ふん、考えてやるよ」

俺の言葉に、和泉がそう返すと転送されていった。

「ここは……………?」

「東京と雰囲気が違うな」

「東京にこんな店ってあったかしら」

俺らが転送されるとどこことなく、東京とは別の雰囲気を感じたので軽く戸惑った。

とは言え、和泉が転送された直後に星人と思われる奴に襲われたように、俺達の足下には星人と思わしき奴があった。

戸惑いつつも、俺達が移動を開始すると道頓堀という看板を見たのでどうやら大阪に来たようだ。

その事実には驚いていると、大阪チームの奴らと遭遇した。

「なんやねん、おまえら」

「東京から飛ばされてきた。理由はわからんが」

「どーなつとんねん、これ？」

首を傾げる大阪チームに、そう言って理由を説明するとリーダー格の奴が俺にこう言ってきた。

「訳はわかった。だがここはワイらのテリトリーや。獲物には手を出すなや!!」

「はいはい、わかってますよ」

俺がそう言うのと、彼らは去って行ったがここで止まらないのが俺や和泉達だ。

和泉や西は、とつくに周波数を変えて姿をくらましている上に大阪チームは、星人討伐を狩りの一環として楽しんでる節がある。

違法薬物を吸いながら、音楽を聞いて余裕をかます者がいれば薬物注射をして楽しむ者もいて、東京チームよりかは遙かに手慣れている。

そんな中、黒人みたいに肌が黒い奴に声を掛けられた。

「お前、岡のスーツをなんで着てる？」

「俺も100点クリアを何度もやってるからね。こんぐらいは当たり前さ」

「なるほどな。東京のチームにすごい奴がおると聞いとったけどおまえやったのか」

「どーだか」

「おまえだけは好きにしたらええ。それだけ強かつたらな」

どうやら俺にだけ、許しが出たらしい。大阪チームの他のメンバーも異議はないようで何も言っていないし。

そんな訳で、大阪チームが行った後で加藤達にこう言った。

「今回はおまえらだけで動いてもらう」

「なっ、それって……」

「おまえらは俺に頼りすぎている部分がある。特にオニ星人の時にそれを実感したんじゃないか？」

彼らの驚きに、そう返すと多くのメンバーが俯いたりしたので話を続ける。

「今のおまえらは、今後の討伐任務で力不足に悩まされるだろうから今回に限っては自分で考えて、自分の信念に従って戦え。以上だ」

俺がそう言うと、周波数を変えてその場を後にした。

岸本 side

自分の信念に従って、ねえ。

私なんかは、既に誠くんの隣に立ちたいという信念に従って行動してきたからZガンを所持するにまで、至ったけど加藤くん達はまだまだだよねえ。

いや、和泉くんや西くんみたいに特殊な性癖を持ったり、世紀末レベルで楽しめとは言わないけどさ。せめて、生き残るため位の感覚で腹は括ろうよ。

風くん辺りは、すでにタケシくんを守るという信念を持って行動しているようだから良いけど、加藤くんは随分と前から戦っているでしよ。

ある程度、覚悟を決めているようだけどそれでもまだまだかなあと思いながら、単独で行動していると妙に目線を感じるなあ。橋の上にいるけど、川の方からと背後から。

そのため、まずは後ろに振り向くと多恵ちゃんが私に付いてきていた。

「多恵ちゃん？ どうしたの？」

「いえ、岸本さんも竜崎さんもこの状況に慣れているようなので戦闘技術を学ぼうと思ってます」

「ああ、そっか。あなたは今回で2回目だったね。しかも、前は殆ど戦ってなかったし」

「はい。なので100点を取るまではしっかりと学ばせてもらいます」

「別に良いけど、教えることは殆どないよ。星人って基本、どんな奴が出てるかわかんないし」

「わかってます」

私がそう言うと、多恵ちゃんは腹を括ったように前回とは表情が変わっていたので一先ず、マップで周囲を確認すると川の中に星人がいることがわかった。

そのため、川を見てみると「たおかせえ」と言う言葉と共に巨大な星人が出てきた。

こういうのって、確か妖怪とかでいなかっただけ？ 妖怪とか、あまり興味がなかったから詳しくないんだよねあと思いながらそれから距離を取ると多恵ちゃんも私の隣に立った。

「さて、あのでかい星人を確実に仕留めるにはどうしたら良いでしょうか」

「えーっと、足などを破壊して移動しにくいようにしてから頭を破壊する、とかですね」

「正解。ならやってみて」

「私が……ですか？」

私の質問に、彼女がそう言ったので普段と変わらない調子で返すと驚いた様子だった。

それも当然で、あのでかいのとタイマンで戦うとか、正気の沙汰ではないけど今後のことも考えれば少しでも経験値を高めた方が良いでしょう。

そう思って、彼女にこう言った。

「玄野くんを生き返らせるんでしょ？ だったらこんな所で立ち止まっている暇はないわよ」

「……………はい、わかりました」

彼女は、私の言葉にそう返すとXショットガンで立ち向かい、なんとか勝利した。

とは言え、スーツにそれなりにダメージが蓄積されたはずだから注意しておかないと……と思いつながら彼女と移動を開始した。

第26話 加藤はギゼンシャ星人なのか、否か

加藤 side

「俺は一体……どうすれば……」

俺は今、大阪の街を一人で歩いてた。

今回のミツシヨンでは、竜崎の他にも大阪チームもいるので戦力的に言ってしまうと、東京チームは殆ど蚊帳の外である。

出来るなら、俺だつて竜崎のように戦えれば良いのだが今になつてもまだ、星人を倒すことに躊躇してしまう。

竜崎が、今の俺を見たら『まだ戦う覚悟が出来てないのかよ。ハッ』とか言いそうだが、オニ星人のミツシヨン時でさえも彼や和泉の行動を阻害しない程度にしか、動けなかつたので心のどこかで引つ掛かっている。

俺が歩く道ばたには、星人によつて死んだ人達が処理されずに残されていて、シャツターが閉まつている建物に身を任せるように死んだ女性の傍らに、涙を流す少年達もいた。

その光景を、目の隅で見ながらも通り過ぎたが星人にだつて家族やそれに準ずるものがあるはずだ、と思つた。

それなのに竜崎達は、一瞬の躊躇いもなしに引き金を引いてガンツソードを振るっている。

どうしてこんなことが起こっているのか、と疑問に思いながらも歩き続けると一組の家族が星人に襲われていた。

いきなりなので、すぐに行動に移せなかつたがただぼうつと前をみている訳にも行かず、星人の動きをYガンで止めると男性から散々なことを言われた。

まあ、すぐに行動できなかつたのは確かなので反論できなかつたが、女性から感謝の言葉を言われた時には驚いた。

何故なら、すぐに行動できなかつたのにお礼を言われたからで理解が追いつかなかつたが、そんな俺を見てある女性に声を掛けられた。

「君、東京のチームやね？」

「あ、ああ……」

「うち、山咲杏やまさき あんず。あんたは？」

「加藤……勝……」

その女性——山咲杏——が自己紹介をしたので、俺も自己紹介すると年まで聞かれて素直に答えると勝手にふて腐れ始めた。勝手に聞いてきてふて腐れるのはとても失礼だと思うぞ。

それは良いとして、彼女は話を続けた。

「さっきから見とつてんけど……何やってんのかなあ〜つて」

「え？ ああ、うん」

「いやまさかなく、ありえへん。あの家族を助け取ったように見えてんけど、どうなの？」

「……あの家族が……」

「うっそ！ マジ!? マジなん!?!」

彼女の質問に、そう言う俺の行動を小馬鹿にしたような言いぐさであり得ない、と大声で言っていたのでカチンときたがまだ怒るレベルではない。

「点数、稼ぎたいんやろ？ 強い武器が欲しいん？ いや、臆病ツぷり

からして早よ解放されたいクチか」

「点数は……欲しい、さ……」

「やっぱりなあ、大阪こっちのエリアの獲物まで手エ出すんやからそーとーせっぱ、つまつてんねんなー」

「それだけじゃない。ある人物について、考えていた」

「ある人物？ どないな奴なん？ 教えて教えて」

彼女の問いに、俺は竜崎の簡単な人物像を言うと大阪チームのメンバーに例えた。

「岡みたいな奴やな。戦うことしか考えへん様な奴。せやけどなんで、そいつのことを考えとるん？」

「俺達を……東京のチームを導いてくれたからだ」

「へー！ そいつはすごいな！ ぜひ、そいつに会ってみたい！」

どうやら、彼女の関心は彼に向いたようなのでその場を後にすると彼女まで付いてきたため、理由を聞くかどうかやら俺の行動を偽善と

思ったらしい。

以前、西からもそう言われたが俺は俺が正しいと思っっていることをやっているだけだ。

そのため、彼女に笑われながらもスーツを着てないと呟いた彼女に、その場所を教えてもらって移動を開始した。

その現場に到着すると、老夫婦とそのお孫さんが怯えていて彼女がDSS3人組と表した奴らが、星人に食われている場面に出くわした。

正確には、そいつの背中にある穴に食われているのでゆつくりと消化していくタイプだが、スーツを着ていない一般人などもいるので眺めている訳にも行かない。

そのため、まずは老夫婦のところに向かって小さな星人を動けなくさせた。

彼女が後ろで何か、叫んでいたようだがそんなのは関係ない。

俺は竜崎のように、淡々と星人を倒すことは出来ないが少なくとも動きを止めて人を助けることぐらいは出来るため、建物を障害物として利用してYガンを発射した。

1発目は、建物の天井に当たってしまったので失敗したが2発目で星人の頭を固定すると、そいつの頭はどこかへと転送されたので倒すことが出来たのだろう。

そして、俺が戦っている間に俺をギゼンシヤ星人と笑った彼女が捉えられて、背中穴に突っ込まれるのを確認していたので探して引き抜くと無事な様子だった。

そのため、他にも穴に突っ込まれた奴らを引き抜いていき、生き残った奴らに救急車を呼ばせてその場を後にした。

「なんで?」

「は?」

俺達が移動している間、彼女が俺の横に立って質問してきた。

「どーして? なんぞそないに正義の味方さんなわけ?」

「は? なんだよそれ」

正義の味方？ 俺が？

そんなの、意識したことがないからどう言っているのかわからない。

俺が、そう思っているのを余所に彼女が話を続ける。

「いや…どないな育て方したらキミみたいに育つんかなアテ」

「……………」

「親は？ 親ツて何屋さんやってるん？」

「え？ 親……」

親か、そう言えばあまり意識したことがなかったな。

日頃の生活に、追われていたから昔のことについて意識が回らないのが現状だ。

そのため、振り返るつもりで話をした。

「父親……………消防士だったけど車の事故で…母親も…2人とも俺が中学2年の頃、死んだよ」

その事実には、彼女は驚いて少し静かになった後でこう言ってきた。

「……………そっか。兄弟は？ 一人っ子？」

「弟が…小3の弟が1人」

「どっかの施設で暮らしとるん？」

「俺がバイトしてアパート借りて……………今も弟…1人でアパートにいると思う」

「じゃあ……………死なれへんな。弟、1人ぼっちになってまうもん」

「ああ」

俺の家庭環境を知った彼女も、ぽつりぽつりと自分の家庭環境について語り始めた。

「ウチも…3歳の息子と2人で暮らしてんねん。キミと同じ…今、アパートにおると思うわ。そやからすっごいわかるわ。キミと気持ち」

「……………」

「死なれへんな。絶対」

「ああ、絶対に死ねない」

俺達がそう言うと、それまでの雰囲気が一変して彼女がこう切り出した。

「父親が消防士ってのが影響？」

「んー、そうかもな。考えたことなかったけど」

「実際、ビックリしたわ。日本にキミみたいな男、おるんやな」

「そんな変わり者かなー、俺って」

「ちよつとー、ほめとんのにー」

俺がそう言うと、彼女がジト目でそう言ってきたので実際に褒めて
いるんだろう。

そんなことを話し合っていると、広場に出てそこでは星人と大阪
チームとの戦いが始まっていた。

その星人は、とても巨大で四つん這いになっていながらも5〜6
メートルぐらいの高さがある。

しかし、大阪チームはまるで狩りを楽しむかのように声を掛け合
いながら、攻撃のチャンスを待っていた。

山咲曰く、その場にいる全員が最低でも1回は100点クリアをし
ている猛者達で、その中でも姿を現していない奴が1番強いという話
だ。

そんな話をしている間に、巨大な星人はZガンの餌食になって穴開
け器で身体の節々が開けられたようになった。

第27話 1000点の星人

和泉side

「はあ……はあ……」

なんとか、倒せた。

俺の足下には、2体の能面が顔の星人が倒れているがスーツにはダメージがない。

前回のオニ星人以降、吸血鬼に襲われまくったせいで勘が冴えたと言っても2体の手練れ相手に戦うのはしんどかった。

とは言え、大阪チームの3人はこいつら相手に真っ正面から挑むとはバカなことをした。

こういった奴らこそ、気を付けないといけないのに刀で斬り合いなんかしたら、すぐに負けるのは目に見えていて1分もしないうちに全滅だった。

その場を後にして、やや気怠げに街中を歩いていくと坂田だったかを中心としたメンバーがたむろしていたので、俺は眉をひそめて声を掛けた。

「オイおまえら、点数稼ぎせずに観光とは良い度胸だなあ」

「えっ、だって……」

「だってもクソもねえ。竜崎と西なんか、姿を眩ませてどっかで討伐しているだろうし、岸本とレイカも見かけた時なんかは点数稼ぎに熱中しているぜ？」

俺がそう言うと、桜井達は黙り込んでしまったのでこいつらはダメそうだな、と思いながらこう言い切ってから立ち去った。

「自分でなんとかしない奴に助けの手をやるつもりはない。精々、くたばらないようにするんだな」

レイカside

「なんか、ラスボスみたいな奴がいるかも！」

「ラスボスって？」

「そいつを倒したら高得点がもらえるような奴！」

「そんな奴……いるのか？」

「わからないけどいる感じがしてきた！」

私はそう言いながら、周囲の星人を片っ端から倒していった。

乙ガンを鈴木さんに渡して、竜崎くんからもらったOガトリングガンで大量に倒したので何となくではあるが、50点以上の星人がいる気がしてきた。

それだけ、今回のミッションでの星人は多い気がしていたでそう言うのと、風さんが疑問を口にしながら星人を倒した。

そのため、私達は移動しながらこう呟いた。

「もう一回、100点取ったらあの女から私に振り向いてくれるのかな………」

竜崎 side

「大分倒しているな……」

俺は周波数を変えながら、巨大ロボに座ってそう呟いた。

そして、左手にはコントローラがあつて右手にはサテライトキャノンのコントローラを持っていて、マップ越しに状況を確認していた。すると、あまり動かないメンバーと動きまくっているメンバーに分かれているようで、動きまくっているメンバーの中に岸本や和泉達がいると思われる。

そう思っていると、星人側に動きがあつたようやたらと背の高い星人が登場したが、同じく周波数を変えている奴が戦っているようだ。

そつちは良いとして、道頓堀に架かっている橋の1つでも変化があつた。

それは川で戦っている奴と比べて、体格は小さいがそれでも10メートルぐらいの大きさはある星人で、天狗と犬神みたいな星人だな。

そのことから、俺は物は試しとサテライトキャノンを使うことにした。

何だかんだ言つて、サテライトキャノンは狙ってから命中するまでの時間が長いので、素早い星人や小柄な星人に対して使う機会がなかったのだ。

そのため、サテライトキャノンを撃つためのトリガーに付いているスコープを使って、狙いを定めるとそいつを中心にレーザーポイントが点滅して数秒後には上空から太い光線が降ってきた。

すると、当たった瞬間に天狗は消し炭になって犬神に照準を定めると光線が移動して、巻き添えを食らった犬神も消し炭になったがこれでこの武器は使えないな。

如何せん、強力な武器ではあるのだがその強力さ故に1回のミッションで1発しか、撃てないのが難点なんだよな。

そのため、巨大ロボとのリンクを切つて星人がいた橋に向かうと加藤や岸本など、東京チームに加えて大阪チームのメンバーもちらほらといった。

「あんたがやったのか？さっきの光線」

「ああ、そうだ」

「正直、俺達だけでも充分だったが助かったぜ」

「そりゃ、どういたしまして。つーか、ここに来る前に見てたけどあの星人は一体何だ？」

ルーズミディアムの色男や坊主頭、黒肌スキンヘッドの奴らと会話をしていたが俺がでかい身体から、50cmぐらいの小さい身体に変化した星人を見てそう言った。

すると、彼らの側で座っていた童貞くさい奴がこう言ってきた。

「あ、あいつが1000点の奴です!!」

「はあ？ 1000点だあ？」

そいつの言うことに、訝しみながらそう言うの色男達も賛同してき

た。

「せや、あんな身のこなし方。初めて見た」

「ああ、あんなんマトモじゃない」

「そうか……………」

俺はそれを聞きつつ、試しにレーザーを撃つてみた

すると、すぐにボロ雑巾のようになったがすぐに巨大な姿に戻ったが、今度は女体が集合して出来たような姿になった。

それを見て、色男は「上手そーな身体してんな」とほざいているが俺はそんな余裕をかましているほど、余裕は持ち合わせていなかった。

何しろ、1000点の星人から伝わってくるのは圧倒的な強者としての存在感で外見こそ、ふざけているがあれを倒しても無意味だとすぐにわかる。

大阪チームの話と、目の前の事象を掛け合わせると真つ正面から切り崩してもすぐに、他の姿に再生されるので誰かが囨になって、周囲から不意打ちで攻撃をした方が良かったらう。

そう思いながら、ビームを何度も撃つて再生できなくするほどにしたがそれでもまだ、安心できない感覚が残っている。

なんて言うのかな。

天才に立ち向かう秀才、という訳ではないがこつちがあらゆる手段を尽くしても倒しきれるような相手ではないことだけはわかる。

そう思っていると、大阪チームの奴らが話しかけてきた。

「どうや？ やったか？」

「そうだと良いんだけどねえ。勝てたという確信が未だに持てない」
「……………そんなにか」

色男の質問に答えると、黒肌スキンヘッドが驚いていたがその直後に1000点の星人が更なる変化を遂げ、鹿などの草食動物の骸骨頭に4本の腕がいびつに生えた奴に進化した。

「う……………お……………」

「マジか……………」

「か、勝てへんわ」

そして、そいつの存在感にさすがの俺でもひるんでいるので他のメンバーはあしからずなのだが、俺達が動かずにそいつをやり過ごそうとしたら西が急に現れた。

しかも、Zガンを構えて撃とうとしたらしいのだが肝心の武器が破壊されて、持っていた腕が爆発したように欠損した。

その痛みに、西がもがき苦しんでいるのを合図に俺はこう叫んだ。

「飛べー！」

「!?」

「川に向かって飛べええええ!!」

その声と共に、加藤や大阪チームのメンバーが動き出して全員が川に飛んだ。

それを確認してから、俺はそいつと殴り合ったのだが戦う気はなかったようですぐにどこかに行ってしまった。

そのため、加藤達が飛んでいった方向に顔を向けると巨大な星人が倒されるところが見えたので、どうやら向こうでの戦いは終わったようだ。

それを確認して、加藤達を引き上げることにした。

第28話 共闘

川から加藤達を引き上げて、コントローラを確認するとどうやら立ち去った星人が逃げているメンバーを追いかけているようで、橋に向かうとハードスーツを身につけた奴と出くわしたい。

幸い、コントローラ上では味方として出ているので声を掛けてみる。

「お前さん、大阪チームの奴だな？」

「……………」

「俺は竜崎誠、東京から飛ばされてきた」

「……………」

「物は相談なんだがやたらと強い星人が現れてな。共闘したら楽に戦えると思うんだが？」

「……………」

「まあ、お前さんがそういう気がないと言ってもこっちは勝手にやらせてもらうけどな」

「……………」

とまあ、結果的には俺が一方的に話すことになったが特に嫌がる素振りを見せなかったので、勝手に話を進めていった。

何しろ、互いにハードスーツの顔面のカバーを外していないので互いの表情側がわからんのだ。

とは言え、イヤだったら普通に声を発してそう言えばいいだけなので特に問題ないだろう、と思ったので適度に話したところで件の星人を引き連れたメンバーがやって来た。

遠目ながら、確認できるのは星人の攻撃によって負傷したメンバーがいると言うことだろうか。

そのため、メンバーが近づいてくるとイナバと鈴木さんが負傷したようで西と同じように四肢が欠損している箇所がある。

他にも坂田がいないため、どうやら彼は星人との戦いでくたばったようだ。

「竜崎くん……………」

「早く行け。アイツは強いからな」

「うん……………」

岸本が落ち込んでいたが、よく見るとOガトリングガンがなくなっている。あの星人との戦いで喪失したようだ。

それに、イナバと鈴木さんが負傷しているところを見るとどうやら並のスーツでは、奴の攻撃を受けきることが出来ないようなのでこの場を離れるように促した。

彼女達が離れていくことを確認すると、俺達が星人に近づくとそれいっから攻撃を始めた。

バツ ババツ バツ バツ

ドンッ

その攻撃によって、橋の壁となっていたガラスが粉々に砕けて柱が変に曲がって橋がへこんだ。

しかし、その程度の攻撃ではこの強化スーツは物ともしないので俺とそれいっは、着実に星人へと近づいていった。

ドンッ ドンッ

バツ バツ ババツ

そして、ある程度まで近づくとそれいっが静かに喋り始めた。

「今の俺にスキがあったらなー、どっからでもかかって〜〜〜こんなかい!!」

「という訳だ。手早く終わらせたければどっからでもかかってこい!!」

それいっがそう言って構えたので、俺もそれに合わせて言いたいことを言ってからポーズを取った。

そうすると、100点の星人が大きく息を吐いてから能力を使つて

攻撃してきたがそれを意に介さず、俺達は攻撃を始めた。

まずは足。機動力の源であり、大きな歩幅で移動されると面倒なのでそいつが右足の骨を、俺が左足の骨をパンチでへし折ると星人のバランスが大きく崩れた。

それに合わせて、ハードスーツを着たそいつはこう付け加えた。

「俺はこう見えても学生時代……ピンポンやつとつたんや!!」

ピンポンがよくわからんのは、脇に置いておいてもかなりの実力があるようでその動きに一切の無駄がない。

そのため、大きくバランスを崩した星人の顎をその巨大なパンチで打ち抜いて砕くと、反撃と言わんばかりにムチみたいな右腕で攻撃してきたが難なく躲してこう言った。

「それで強くなったつもりか？ だったら出直してくるんだな!!」

俺がそう言いつつ、肘から伸びる刃で足や胴体を切り刻むとピンポンをやったと言うそいつが星人の首をちよんぱしたので、息を整えているとそいつはこう言った。

「いうとくけど空手やつとるんや……通信教育やけどな」

それを聞き流しつつ、今度は倒せたかなあと思っただけを向けると空気に変化が現れて青臭さを感じたので振り返ると、1000点の星人がさらに変化して色んなものが混ざったような形になった。

それを見て、「とにかくキモいな」と思いながらハードスーツのそいつと共にビームを連発して、ミンチよりも酷い状態にした。

「何回、再生するんだ。こいつは……」

そう呟きつつ、残った破片を見ていると加藤達が近づいてきて話しかけてきた。

「竜崎……終わった……のか……」

「終わってないようだな。転送してないようだし」

俺がそう言うと、残った破片から腕が伸びてミッションの最終目的であるぬらりひよんが出てきた。

「こうなったら何度だって破壊してやる!!」

俺はそう叫びつつ、ビームを連射したが意味がないようなので殴りかかろうとしたら、ハードスーツのそいつが先に行動に移していた。

「興味深い、ひじょうに。んん………興味深いぞ………」

星人がそう言うのと、そいつは肘の刀を使って斬りかかったが躲されたので殴りまくっていたがその全てが躲されていて、最後に右肘の刀でぬらりひよんの胴体を切った。

その様子に、加藤達は少し喜んだようだがそんなことでくたばっているのなら苦労しない。

それを裏付けるように、ぬらりひよんはすぐに再生するが攻撃の手を緩めずにハードスーツのそいつが切り刻んでいくが、ついに反撃を許してしまった。

その証拠に、背中側に付いていたコードの何本かが飛ばされていたが逆にぬらりひよんも、肘から刀のような物を出しているのに気が付いた。

そのため、ハードスーツのそいつ1人だけでは攻略するのは不可能だと判断して俺も参戦した。

「どうか？ ほれ」

すると、ぬらりひよんも腕を巨大化させたので2人がかりでようやく互角の勝負となった。

だが、ここで30秒間のブーストを使う訳にはいかない。

何故なら、ハードスーツはパワーと防御力を大幅に強化してくれるがその反面、速度面での低下が顕著になるのでここで使ったとしてもぬらりひよんがさらに早くなってしまう。

その結果、俺達とぬらりひよんはしばらくの間は打ち合っていたが数分もすれば、ガタが来るのは当然でそいつのハードスーツが壊れ始めた。

そのため、俺がメインとして戦う羽目になったがそれでも強力な奴との戦闘によって、俺のハードスーツも壊れ始めたのである技を使うことにした。

それは、水蒸気を使った目眩ました。

こうすることによって、直接的に殴っているがどういった行動を取るのかというのをわかりにくくするためであり、そう簡単には使いたくはない手ではある。

何しろ、強力な武器と引き換えに奇襲を仕掛けるんだからその対価に似合うだけの成果を、出したいところではある。

そう思いながら、適度なところでハードスーツを強制的に切り離して大きく飛び上がった、ぬらりひよんの背中に立つのと同時に俺のハードスーツが破壊された。

そのことを直接、見たであろうぬらりひよんは余裕の笑みを浮かべているのか、すぐには動かなかったので俺は足下にあったガンツソードを使つてぬらりひよんに刃を立てた。

すると比較的、簡単に向こう側まで刺すことが出来てそのまま、頭まで一刀両断した。

その一方、さつきまで余裕の笑みを浮かべていたぬらりひよんは驚きの声と共に呆気なく、切られたので1つの確信を得た。

「ふーむ、やはり意識外からの攻撃か……」

俺が、息を切らしながらそう言うのと和泉が周波数を元に戻してこう聞いてきた。

「竜崎……意識外からの攻撃つてなんだ？」

「不意打ちには弱いってことだな。有り体に言えば」

「そうか……」

和泉の質問に、そう答えると俺と同じように壊れてハードスーツを脱ぎ捨てたそいつは、その答えに納得して様子でその場を去ろうとしたのであることを聞いてみた。

「おい！俺と共闘しないか!?!」

「……………気を引いてくれるンやつたら考えてやる」

そいつはそう言い残し、その場を去った。

第29話 スクラップアンドビルド（星人が）

「うオおおオオタケシ!! タケシイ!!」

俺がぬらりひよんをぶった切り、同じハードスーツを着ていた岡八朗が立ち去ってからしばらくして和泉がトドメを刺そうとした。

何故なら、ぬらりひよんとの殴り合いで息を切らしていたので整える必要があったのと、既に100点以上を取っているからだ。

これ以上、点数をとつてもチームにとつて意味がないので他のメンバーに譲ったところ、和泉がトドメを刺すことになったがそこで変化があった。

しばらくは動かないだろう、と予想していたぬらりひよんから小さな鉄球の塊が出てきて、ある程度の高さまで浮かび上がると破裂するかのよう飛び散ったのだ。

その結果、ぬらりひよんの近くにいた和泉や加藤、岸本やレイカのスーツがおシヤカになって、タケシのスーツもダメになった上に負傷してしまった。

そのため、風の言葉に彼は苦しそうにうめくだけだった。

「お…おお、死ッ死ぬな。死ななでくれ、うう……」

その事実には、東京チームは呆然となっていたがそんなことはお構いなしに、ぬらりひよんは次の形状に変化していた。

それを見た風は、動揺していた気持ちを抑えつけてこう言った。

「待つとけタケシ……ヤツは俺が殺す」

「俺もやるわ。今の内にボコしておけば大丈夫やろ」

「だな。とつとと片付けよう」

その言葉に、色男と坊主頭がそう言ったので一先ずは彼らに任せることにした。

ぬらりひよんが次に、どういった再生を取るのかわからない以上はここで無駄に体力を使う訳にはいかず、万全の状態に持っていきたい。

もしも、ここでアイツがくたばってくればそれでよし。

そうでなくても、戦える状態になっていればある程度の抵抗は出来

るはずだ。

そう思っているといきなり、風が大笑いをし始めたので周囲は驚いているが俺にはわかる。

例え、平均レベルの女性の身体をしていてもその存在感が尋常じゃない。

とにかく、その威圧感だけで足がすくんでマトモに動けなくなるレベルなので俺や岡ならともかく、風レベルでもそれなりに辛いはずだ。

しかし、ぬらりひよんが再生しきるとその状態から一気に戦闘に移った。

まずは風が顔面を殴り、色男が蹴りをぶち込まして坊主頭がXショットガンで撃ち込んだ。

すると、女体化したぬらりひよんのキモい顔面が大きくへこんで足の骨が折れ、右腕が吹き飛んだ。

だか、四肢が破壊されても痛がらないのが高得点の星人で、特にぬらりひよんの場合は100点だ。並の星人よりも遥かに強い。

だが、人間の姿になったせいで風達でも攻撃ができるレベルになった様で頭を粉碎することができた。

しかし、すぐに再生してキモい頭が2つ生えたのでさらに攻撃を加えていった。

このまま、いけるかとも思ったものの胸部から手足が生えて不意打ちをして来た上に突然、複数体に分裂してリンチをするかの様に風達を囲って攻撃して来た。

突然の変化に、風達は一時的に不利になったがそこをなんとかするのが、格闘技を学んだ風と経験豊富な大阪チームの奴らだ。

すぐに、それぞれの特技で分裂体を破壊し尽くすと残りはわずか4体になったので、加藤達の火力支援もあってすぐに倒せた。

その事実にも、加藤達も一安心したのだがタダで終わらないのが100点星人のぬらりひよんだ。

すぐに、再生したので軽く浮かれていた加藤達の表情に絶望が浮かんだ。

新たに再生した姿のぬらりひよんは、正に100点に似合う体格と外見をしていてもはや並のメンバーでは倒せないレベルの雰囲気醸し出していた。

そのため、風が立ち向かったもののぬらりひよんにとってはつまらなそうに一蹴したので休んでいた俺が戦うことにした。

「ほう？お前か」

「はん、かなりごっつくなつたなあ」

「そうだ。お前は面白そうだから手加減は無しだ。全力でやる」

「そうか……………」

その言葉に、力なく倒れている風を加藤達に頼んで立たせて距離を取ってもらうとすぐに殴り合った。

加藤 side

「くっ！早すぎる！」

「まともに支援できないわ！」

竜崎とぬらりが戦い始めたが、それは今までの戦いとは比べ物にならないほどに早くて支援できそうにないため、このままでいいのかと思っただが大阪チームに呼ばれて適度に離れてから彼らの説明を聞いた。

「ヤツの感知外からの狙撃!？」

「せや。さつき、アイツの奇襲を受けた時に再生の仕方が遅かったやろ？」

「確かに。竜崎さんが後ろから切りつけた時の再生は遅かったです」

「なら、バラバラに散って狙撃するしかないじゃない？」

「そうね。纏まっていたらいつペンにやられちゃうし」

そうか、それならまだ倒せる可能性がある。

そう思った俺達は、誰が竜崎に元に戻ってそいつ以外が狙撃するかを決めてからそれぞれの配置についた。

くそつ、狙撃するって言っても早すぎるんじゃないか!?

散らばってから、エリア内にあつた竜崎がよく使うZガンを橋の近くに置いて来て、ぬらりが戦った橋に戻った時間はおおよそ15分ぐらいだ。

その間に、竜崎の下半身と思われるものが橋の上に転がっていてそれを確認した後、立て続けに起こった地震の様な揺れが起こった後にぬらりが飛んで来た。

「逃してしまつたがもういい。わかつたからな」

ぬらりはそう言ったが、竜崎の死で軽く動転していた俺はその言葉の意味を深く考えずに武器を構えた。

しかし、ぬらりの行動は竜崎と岡の戦いで洗練された様で俺には全く見えなかった。

その結果、持っていた武器を落として時間稼ぎをするために俺はぬらりに質問した。

内容は何故、俺達が戦い続けるのかというものだったが神の存在について逆に質問された。

質問を質問で返されたことに内心、舌打ちをしながらもぬらりの質問に答えていく。

そして、ぬらりが言うには神がぬらりの様な存在を生み出したので、災害として受け入れるしかないと言った。

だか、俺はそんなことはないと思う。

何故なら、災害ならどうしようもないがだからといって討伐できる星人はやりようによっては、生き残って戦うこともできる。

だから、お前達の様な存在を神だとは思わないと思っていると、ぬらりの身体に変化が起きた。

ドドン!!

その音と共に、ぬらりの左腕と左胸部が爆ぜた。

その直後、ぬらりの周囲で連続した爆発が起こったのでこれで俺も距離を取れる、と思つて移動を開始した。

少なくとも、ここまではいいとして後はZガンで撃ち込むだけだ。そう思つて、その武器が置いてある場所まで走つたがその途中でビームを撃ち出したので、その爆発によって俺は足が破壊されながら吹き飛ばされてしまった。

だか、身体に異常は感じられない上にZガンの近くに落ちた様なのでそこまで這つていき、それを拾い上げて構えた。

しかし、照準を合わせようとしたところでぬらりに気づかれてしまい、ここまでかと思つたが更に驚くべき変化があつた。

何故なら、ぬらりに奇襲をかけたやつがいたからだ。

第30話 勝利

加藤がZガンをぬらりひよんに構える前、ちょうど大阪チームに呼ばれて説明を受けている間に竜崎とぬらりひよんとの戦いにも変化があった。

それは竜崎がぬらりひよんに押されている、と言うことであるのだがそもそもとして100点星人を相手にして1対1で戦う奴がどこにいるだろうか。

ラスボスだったオニ星人ですら、チームが一丸となって戦ってようやく討伐できたのにそれ以上の星人と戦う行為が自殺行為とイコールで繋がっているぐらいに危険な上、原作での岡とサシで戦って余裕で勝てるほどの星人だ。

神様特典で武術や格闘技を極め、ガンツソードを使ったところで勝てる見込みは殆ど無いと言っても過言ではない。

しかし、だからと言って諦めるほどのへっぴり腰でもないので竜崎は最終的に、30秒のブーストを使ったもののそれでも打ち倒せなかったのもう1つの奥の手を使うことにした。

それは1回だけ、即死攻撃を無効にするものでぬらりひよんの攻撃をわざと食らうことで再び、奇襲を行おうとする作戦である。

何故、このような作戦を採ったかというとぬらりひよんの動きが僅かばかり、鈍っていつていることに気が付いたからだ。

恐らく、なんの作戦もなしに全力で戦っていたので連戦による撃破と再生によって、底なしに思えた体力を大幅に削れたからだと予想した。

そして、結果だけを見れば竜崎の作戦は成功した。

博打に近い部分はあったが、それでも拘束で攻撃を繰り返す竜崎を一撃で倒し切れたことによる安堵感で細かい変化まで気付けなかったのだろう。

胴体の大部分を失った代わりに、首と肩の部分だけが川に落ちる過程で再生を始めたことに。

その結果、摩耗しきった体力のまま岡八朗と戯れることになった

が彼の動きについて行けず、最終的には大したダメージも与えられずに取り逃がすことになった。

そのため、川に落ちた竜崎は身体を再生しきると岸に上がった。

竜崎 side

「ああ、くそ。再生中に水に触れたことによる痛みって言うのは残るもんだねえ」

俺は独りごちながらそう呟きつつ、よろよろと最初にぬらりひよんと戦った橋を目指して歩いていった。

よろよろと歩いている理由は、30秒もの時間を掛けてほぼ全身を再生したからであって、穴が空い程度では10秒もかからずに再生できる。

しかも、落ちた場所が下水管が繋がっている川という悪条件なので汚い下水を、浄化するために使われる塩素などの成分も入っているので傷口に染みただ。

その結果、全身にかけてある程度の痛みが残り続けたので岸に上がるだけでも一苦労な上、早く戻らないと加藤達が危ないと思つて痛みを残しながら歩き始めたのだ。

痛みが残つたとは言え、時間が経てば引いていくものなので引いていくのと反比例するかのように歩みを早めていき、偶然にも通り道にガンツソードがあつたので走りながら手に持った。

そうしていると、橋から変な方向にビームが出たのでぬらりひよんの光線か、と思ひながら近づいていくと誰かが吹き飛ばされるのを確認できた。

そのため、走つた勢いで大きくジャンプすると偶然にも加藤がZガンを構えて、撃とうとしていたのでぬらりひよんの近くに降り立つと頭から胴体に掛けて大きく切った。

一方、ぬらりひよんは加藤に意識が向いていたようですぐに再生することなく、攻撃対象を俺へと変更した。

それを確認してから、ぬらりひよんのビームを回避しながら攻撃を仕掛けていくと、俺以外にもぬらりひよんに攻撃を加える存在が出てきた。

そいつこそ、ハードスーツを着込んでいた岡であり、彼もガンツソードを持って切つていった。

まさかの共闘であり、Zガンを構えていた加藤にも驚きの表情が現れていたが、今はそんなことはどうでも良い。

当たれば即死のこいつのビームを、回避し続けて加藤が引き金を引く瞬間まで相手をし続けることだ。

しかし、さっきまで2本のビームを相手にしないとイケなかったが、岡が参戦したので1本に減少した。

もつとも、ビームは両眼から出続けているので2本とも気にし続ける必要があるが、それでも負担が減ったのは大きい。

これによって、最後の最後でくたばる心配がなくなったというものだがしばらくすると、加藤が引き金を引く瞬間をアイコンタクトでわかったので、Zガンの影響範囲外へジャンプした。

岡もまた、加藤が撃とうとしていることがわかったようなので、橋から大きくジャンプしたのを確認した。

そして、Zガンが発射されてぬらりひよんに大きな負荷がかかった上に、連続発射の威力には耐えきれずに川に沈んでいった。

その後、ぬらりひよんがいた橋とそれがかかっていた陸地部分が、穴開け器のようにえぐられたがぬらりひよんが復活することはなかった。

それを確認した俺は、急いで加藤の元に走って行って止血することにした。

何しろ、加藤の両足は膝下から吹き飛んでいたので大量出血していたためで、早く止血しないとガンツの転送前にくたばってしまう。

そう思いながら、加藤の元に走っていくと童貞くさい大阪メンバーが加藤にこう言っていた。

「終わりました！転送が始まっています!!」

「そ……か……」

「僕は！僕は今！ううう………君みたいになりたいんや!!」

そいつは、転送されながらも1番言いたいことを加藤に伝えた。

「必ず！会いにいきますから!!生きていて下さい!!」

「ああ………」

その言葉を伝えると、そいつは大阪チームの黒い球があるであろう部屋へと転送されたと思う。

そのため、俺は加藤に近づいて止血しながらこう言った。

「加藤、今回のミッションでの功労者はお前さんだよ」

「竜……崎………」

「だから転送されるまでくたばんじゃねーぞ?」

「……………」

「くたばったら俺が許さん。というより、弟を悲しませる気か?」

諭すようにそう言うと、加藤は思い出したかのように目に力が入ったので安心して止血を終えると、今度は俺が転送され始めた。

「じゃ、先に行っている」

「ああ………」

加藤の返事を聞いてから転送されると、東京チームは意外にも生き残ったメンバーが多かった。

ぬらりひよんが100点星人だったので、かなりの人数が減るかとも思ったのだが今回は大阪チームとの合同討伐だったので前回よりも遥かにマシな結果だな。

何故なら、加藤達が来る直前のミッションで100点星人の討伐依頼が来たためで、その時は俺と西、そして和泉以外がくたばったからだ。

和泉はそのミッションの後、1番を選んで戦闘を離脱したので加藤たちが来た当初は俺と西以外が初心者だったのである。

まあ、このメンバーもかなりの経験を積んで来たのでそう簡単にはくたばらないだろう。

例外がいたり、坂田のように仲間を守ってくたばった奴もいたがな。

坂田がくたばった理由は、岸本から聞いたのだがここでの貴重な戦

力の喪失は痛いな。

理由は、カタストロフィの期限は近づいているからでさらに言うなら、斉藤という西が復活させた女性もくたばったらしい。

彼女とはあまり話さなかったなあ、と思いつながら転送を待っている
と最後に加藤が転送してからミツシヨン終了のアラームが鳴った。

そして俺達は、ガンツの採点結果を見て100点メニューに届いて
いたら、何を選ぶのかを決めていった。

第31話 帰還

稲葉

0点

TOTAL 10てん

やる気なさすぎ

観光しすぎ

レイカ

103点

TOTAL 114点

もうチェリーではない

0てん

TOTAL 0点

チキン野郎

ハゲ

45点

Total 45点

ホイホイ

40てん

TOTAL 40点

タケシ

26てん

TOTAL 26てん

筋肉らいだー

15点

Total 50点

タエちゃん

102てん

Total 102てん

和泉くん

59てん

Total 101てん

西くん

75点

Total 102てん

かとうちや (笑)

100点

Total 145てん

きしもと

65点

Total 91てん

りゆうざき

139点

Total 140てん

まあ、ぬらりひよん戦を生き残ったメンバーの点数はこうなった。
点数を取れなかったメンバーもいたようだが、その中でもレイカと
小島の両名の成長が凄まじく、目的を持った女性の実行力はすげーつ
てなった。

しかも、加藤に至っては俺達の働きかけによって1番美味しいとこ

ろを、持っていった形になったので一気に100点クリアになった。とは言え、先に小島から表示されたので鈴木さんから1番を取ることを進められた彼女は、3番の玄野計を復活させる方を選んだ。

元々、彼女がやる気になったのも玄野を復活させるためだったしね。

そんな訳で、玄野が復活した。

「加藤……………恐竜は？」

復活した玄野は、まず始めに加藤にそう聞くと自分の点数を見て首を傾げた。

「0……………点？」

「幕張からもう……………数ヶ月が経っているんだ」

「まじk「計ちゃん!!」……………っ!?!」

加藤の答えに、玄野が驚きに声を上げる前に小島が彼に抱き着いたため、彼は大きく動揺した。

「多恵ちゃん!? なんでここにッ!?!」

「交通事故で……………計ちゃんのことを忘れらなくてぼんやりして生きていたけど、ここにきて計ちゃんも戦っていたことを知ったから……………」

「そっか……………ごめん、何も言えなくて」

「ううん、良いの。一緒に戦えるから」

玄野は暗い顔になったが、小島は幸せそうな顔になったのでしほらくは大丈夫だろう。

彼女に負けてられない、て気持ちになりそうだがその一方で加藤も玄野再生のために頑張ってきたので再生された今では、ここにいる意味は半減したようなものだ。

そのため、鈴木さんは彼にこう言った。

「1で良いんだよ。キミには守っていかなきゃいけない家族がいるんでしょ?」

「……………竜崎」

「おう」

「俺がここで、どの番号を選んでもそれは俺の自由なんだよな?」

「無論だ。ここで1番を選んでも誰も文句は言わんさ」

鈴木さんの言葉に、加藤は少し悩んでから俺に聞いてきたので当たり前のように答えた。

それを聞いた加藤は、意を決したように自分で決めた番号を言った。

「2番……強い武器をくれ」

「良いのか？」

「ああ、竜崎や西の話だとカタストロフィツてのがあからそれまでに強い武器は必要だから」

「カタストロフィ？」

その決断に、玄野が尋ねたので彼はそう答えると小島が首を傾げたので俺は、黒い球の中にいる男にある単語を言つて数値を表示させた。

「前々から言っているように、この数値はカタストロフィが発生する時間を示している。今からおおよそ7日と23時間後に文明が崩壊つて訳だ」

「カタストロフィ……」

「だけど今までに新聞やらテレビなんかで調べたけどそういうの話は出てこなかったよ？」

「ネットでも眉唾物な話ばかりだったし」

俺の言葉や、表示された数値を見て鈴木さんや桜井は懐疑的だったので西がこう切り返した。

「だったら信じなきゃいい。竜崎がよく言ってるけど、どういう風に考えて行動するかは自由なんだからな」

「……………」

「だからまあ、よく話し合つて考えたら良いぜ」

西はそう言うのと、この部屋から出て行つたので和泉もそれに続くように出ていき、俺もこの部屋に用はないので出ていこうとすると玄野に声を掛けられた。

「なんだ？」

「あの……………」

「……………」

彼は、自分の胸の内に秘めている思いを言っているのかを迷っていたようだが、意を決したようにこう言ってきた。

「あんたは世界が終わるかもしれないのに何も怖くないのか!? 辛くないのか!?!」

「怖さやつらさがあつたらとうの昔にこの部屋に来ていない。寧ろ、崩壊後の世界がどうなっていくのかに興味がある」

確かに、こういう風に終わるのかがわからないと不安に感じることはある。

しかし、だからと言って何もしないで過ごすよりも生き残るために最善の結果を考えながら、行動に移して行った方がよっぽどいい。

玄野にそう言うと、静かになったので部屋を出て自宅に帰るために歩を進めていったが、岸本はともかくとしてレイカまで当然のように付いてきたので彼女に問いかけた。

「んで、なんでレイカまでついてきてるんだ?」

「そうよ。私達はこれから自宅に帰るの。あんたは別の方向でしょ?」

「私だって頑張ったよ? 岸本さんよりも点数取ったし」

「ああ、確かになあ」

岸本が60点ぐらいを取得していた一方で、レイカは100点超えをしていたので点数だけならレイカに軍配が上がる。

しかし、岸本は岸本で小島の経験値アップに手助けしていたので必然的に、点数は下がるのだがそんな中でも60点もの点数を稼いでいるので、かなりの星人を倒したことになる。

つまり、レイカはレイカで俺からご褒美的なものが欲しいのだが、付き合いの長い岸本はそれを許すまじとしてしているのだ。

(これが所謂、修羅場つてヤツですね。わかりますが現場に立ち会いたくないでござる)

俺はそう思いつつ、岸本とレイカの口喧嘩を聞き流しながら帰路についた。

こう言ったのに、男が混じると余計に混沌とするから聞き流すのが

1番なのだが、このままだとレイカも一緒に俺の家に来ることになるため、レイカに聞いてみた。

「……………んで、何が欲しいんだ？」

「一緒に寝ましよう。無論、岸本さんと一緒に」

「よし、断る？ 私だけの竜崎くんなんだし」

俺の問いに、レイカは当然の顔で答えたので岸本が速攻で意見を述べたがここで断ると、チームに亀裂が入りそうなので断り切れない。

只でさえ、カタストロフィが間近に迫っているのにチームの仲を悪くして分断する意味が無い、と感じられるので渋々ではあるがオツケーした。

岸本はやや、不満げにしていたが別に減るもんじやない訳だし、それで満足するんだったら問題はない。

一般人からすれば、ハーレムなんだろうが女同士の戦争に繋がるんだろうなあと思いつつ、俺達は家に着いた。

第32話 ダブルパイズリ ☆

「おお、この光景はなかなかすごいな」

「ふんっ。これで誠をメロメロにするんだから！」

「竜崎くんは私の方が好きだよな？」

俺は自室にて、2人の女性に体の一部分を挟まれてそう言われた。

片方は恋人の岸本で、もう片方はあの人気グラビアアイドルの下平玲花こと、レイカで体の一部というのは俺の逸物を彼女らの豊満な胸で挟まれている。

そして、彼女達は期待するような眼差しで俺を見上げてきたため、敢えて競わせるようなことを言った。

「んっ、どっちが好きかは一概には言えないなあ。だから今回のご奉仕でどっちがうまいか、で決めようと思う」

「むっ、私の方が同棲期間が長いのに………」

「ふっふーん、私にだって料理とかできるもん」

「なにを」

「あー、争うのはいいんだが奉仕が先だからな？」

すると、2人で口喧嘩しそうだったのでそれを遮って、逸物を挟む巨乳でご奉仕パイズリを要求した。

そのため、岸本ほ頬を膨らませつつ、そしてレイカは嬉しそうに自分の胸を擦り付けるように上下に動かした。

すると、丁度いい圧力が周りからかかって膣内に挿入している感触に近くなった。

「ああ〜いいぞ〜、これ」

「当然よね！私の胸、揉みまくっているし」

「私だつて負けてないわよ？ こんなにやけ顔、普段はあまり見れないんじゃない？」

どうやら、表情に出ているらしいが巨乳の女性にパイズリされるとか、貧乳派でもなければ眼福ものだろう。実際に気持ちいいし。

そして適度に動かされた結果、ついには白濁色の液体を勢いよく噴出させて2人をびっくりさせた。

「もう、こんなに出しちゃって……そんなに気持ちよかったの？
んっ、おいし」

「これが話に聞くザーメンね？　すごく臭くて……濃い」

その量に、岸本は愚痴を言いながらも舐めとっていて、レイカは驚きつつも舐めて感想を述べた。

そして、今度は実際に性行為をすることになったがその際、レイカが少したじろいだ。

「こ、これを実際に入れるのね？」

「あれれー？　もしかして怖がつてるの？」

「ち、違うわよ！　ただ、初めてだから経験がないのよ」

「ふーん。だったら私達の行為を傍で見たいればいいのよ。誠の心は私がゲツトするから」

そう言いながら、岸本が俺の肩に手をやったので仰向けになると、逸物に自分の秘所をあてがって一気に腰を下ろした。

「んあああああ！　やっぱり、誠のちんぽは最高ね！」

「岸本の膣内なも最高だな！」

俺達は、互いにそう言うのと獣のように腰を上下に振って快樂を貪った。

正確には、岸本がつつかえ棒のように両手を俺の腹において、俺は彼女の豊富な胸を揉んで乳首を弄った。

「んっ、ああ！　やっぱり、竜崎は胸が好きなんだね！」

「そうさあ。岸本の胸は揉み応えがあるしな」

「竜崎のちんぽも大きくていいわ！　奥まで気持ちいいんだもん！」

「だったら、こつちからも動かないとね！」

「んあ!？」

その言葉と同時に、腰を突き上げると岸本は体を大きく仰け反らせたが、そんなことはお構いなしに腰を上下させた。

騎乗位セックスは、何度も経験しているのだが今回の場合、完全に油断していたようなのでいい不意打ちにはなった。

そして、俺が2度目の射精を彼女の膣内に噴射すると全身の力が抜けたようで、俺に倒れ込みながらこう言ってきた。

「はあ………はあ………次は私があなただを快樂漬けにするわ」

「それは楽しみだ。それで？レイカもやるんだろ？どうする？」

「私もやるわよ。こんなに当て付けられてスゴスゴと帰る訳にはいかないわ」

俺の言葉に、レイカはそう言っで自分の服を脱ぐと、既に秘所は濡れているので準備万端なようだ。

そのため、不貞腐れる岸本を退かしてレイカのために場所を開けると彼女もまた、岸本がやったように騎乗位での性行為をするつもりらしい。

「まったく、同じ土俵で戦うのは不利だと思うが？」

「大丈夫。岸本さんに負けないぐらいに頑張るから」

レイカがそう言っくと、秘所にあてがった逸物を入れるために腰を下ろした。

幸いにも、破瓜の痛みはなかったようで挿入した勢いで腰を上下に動かしながら、俺にキスをしてきた。

「んっ、竜崎………！ 竜崎い………！」

「レイカの膣内もなかなかの気持ち良さだなあ。こんなんで彼氏がないとか、ぜってー嘘だろ」

「そんなことないよお。初めての彼氏は竜崎だからあ！」

俺の言葉に、レイカは熱にうなされるようにそう言っただため、除け者された岸本は頬を膨らませてレイカの胸を触り始めた。

「ひゃあ！ 岸本さん！ 何してるんですか!？」

「何って、人の恋人とデーブキスをかましてるんじゃないわよ。泥棒猫」

「泥棒猫じゃないもん！ ってひゃあん！ そこダメエ!!」

岸本は、レイカの胸を弄っで乳首を弄ると膣内がキゅンと締まったので、俺は争う2人に声をかけた。

「岸本、そのまま、レイカの乳首を弄れ。レイカは腰を振れ。レイカが先にイったら岸本の勝ち。俺が先にイったらレイカの勝ちだ」

「よし！ だったらこのまま、弄り続けるわ！」

「そ、そんなあ………！ ひゃああああ!!」

俺の言葉に、岸本は嬉しそうに答えたがレイカは絶望的な表情をした。

実際、レイカは初体験なのか、腰の動きがぎこちなかったのになか、イけそうになかった。

そのため、岸本の行動はナイスタイミングなのでラストスパートと行こう。

「んあああああ！ ダメエ!! イつちやううー!!」

「イけえ!!」

「イつちやええ！」

腰を上下に動かすと、レイカは先ほどまでの余裕は無くなって快楽に流されるだけになり、俺と岸本で攻め立てるとレイカが先にイつた。

それを確認した後で、俺も絶頂して彼女の膣内に白濁色の液体を噴射したので岸本の勝ちになった。

「んっ、今度は私が勝つわ」

「今度も私の勝ちが確定してるから」

競い合った後、俺達は床に敷いた敷布団で川の字になって寝ることになったがその際、俺を挟んで口論になったので2人にキスをした。

「ああ、2人とも期待している。だから今日はもう寝よう」

「ふんっ、誠がそう言うなら仕方ないわね」

「私も技術を磨いて竜崎くんを振り向かせるからね」

その言葉に、岸本とレイカがそう言ったのでその日はもう寝た。

第33話 海外との交流

カタストロフィまで残り1週間。

それぞれが思い思いに過ごしている中、玄野だけは違っていた。何故なら、ガンツから個別に特別ミッションを受けて星人を狩りまくっているからだ。

普通に生活していたら、数ヶ月という時間が過ぎているところだが玄野からすれば目をつぶった瞬間にその時間が過ぎ去っていたということになる。

その時間を埋めるかのように、彼に与えられたミッションは単独でどうにか討伐成功できる程度の難易度であり、玄野は四苦八苦しながら討伐していった。

一方、竜崎はそんなことを露にも知らずにガンツに召集されるメンバーとの会合に参加するため、2泊3日の日程でアメリカに飛んだ。

日程は平日に行われたが元々、講義ではそれなりに優秀だったのと事前にその日は個人的な用事があったて休む、ということ連絡したので問題視されなかった。

とは言え、会合自体は会員制なので岸本やレイカは日本に居残りとなって、ガンツについての詳しい話を西や和泉から聞く羽目になったがそれは別の話。

「やあ、セバス。相変わらず、元気そうだな」

「リュウも元気そうだなにより」

「はい、あなたは昔っから目つきが悪いわね」

「アリスか。そっちも美人なままだな。男をたぶらかしているのかい？」

「もう！ 今は旦那だけよ」

「今日はどんな会合だっけ？」

「カタストロフィについてだよ、チャン」

この会合、各国から色んな人種が集まっているので白人や黒人なん

かもいて、国際的な繋がりを実感できる瞬間でもある。

この会合を行う場所は、いつも変更しているのだがアメリカのニューヨークの中でも、一見さんはお断りな地下レストランで集まったメンバーはアメリカはもちろん、イギリスやドイツ、ロシアなどの欧州や中東、中国などのアジアや南米やアフリカなど、世界中からだ。その中でも、10回も100点クリアをしている俺は周囲から一目置かれていて、色んな奴らから話しかけられている。

その中でも、民間軍事会社の人からのスカウトが目立つ。

度々、星人が襲撃してきても国家間や民族間の紛争はしよつちゆう起きているので、安全保障という点で一定数以上の需要はあるのだ。

とは言え、俺自身はまだ学生という立場なのでそう言う話は断っているし、俺の自宅にいる岸本の戸籍がない以上はホイホイと行けないしな。

まあ、戸籍の入手自体はそれに精通している組織と繋がりがあるので入手自体は簡単だ。

事が終わり次第、カタストロフィ時の混乱に便乗して新しく戸籍を発行できるだろう。

とは言え、今はカタストロフィについての話に集中しよう。

「んで、今回はどういう話題だっけ？」

「オイオイ、すっかりしてくれよな。今まで以上の星人が民族移動レベル出来たらどうするかってタイトルで集まったんだろ？」

「ああ、そう言えばそうだったな。100点星人のせいですっかり、抜け落ちてたわ」

「オーサカは大変そうね。でかい穴まで空いたんでしょ？」

「穴つつつても川沿いの陸地が多少、えぐれた程度さ。特に問題ない」

「100点星人か。あのレベルの奴らがうじゃうじゃいたら勝ち目はなさそうだな」

「そもそも、この星の兵器で星人相手に戦えって言われたらソツコーで断るけどね」

そんな雑談を交えつつ、どんな星人が来るのかを推理していった。そもそも、カタストロフィとは周期的な秩序が成り立っている時に

無秩序なことが、不意に起こる現象のことなのでこの星限定で話すとすると突如、核戦争が始まって文明崩壊がすぐに思い浮かぶ。

しかし、星人にも一定のコミュニティや階級らしきものがあるので人類と同等以上の存在が来た場合、果たして核戦争は有効なのかという疑問に当たる。

核戦争によってもたらされるのは、文明の崩壊という現象だけなので俺達が知的生命体が存在する星を侵略する場合、現地の抵抗組織を木っ端微塵に粉碎した後で残されたそいつらを奴隷かそれ以下にする。

その方が効率的だし、無駄な労力を払わずに済むためなので侵略する時に情報操作なども同時並行で、行っていくのが妥当な線だ。

そのことから、高度な文明を持つ異星人が侵略してきた場合は、とつとと敵の本拠地をぶつ叩くことになった。

この方針に、少なくとも俺は賛成だ。

何故なら、現段階ではどんな奴らが地球に来るかがわからない以上は友好的に話し合いが出来るとは思えないし、話し合いが出来るんだったらカタストロフィなんかの数値は出て来ない。

そのため、誰がどれだけの時間で倒しきれられるかなどの話をしてから解散となった。

こういった話は、ネット上ではやり取りがし難い内容をいつぺんにやるため、長くても半日もしないうちに話し終えてしまう。

それに、基本的に星人相手は自分達で何とかしろという方針を取っているのです、基本的にはどういった戦い方をして勝ったなどの話も少ない。国によって、出てくる星人も違う訳だし。

そんな訳で、話し合いを終えた俺達はカタストロフィ後も会うことを約束してから解散して、それぞれの国に帰る準備をした。

え？ あつさりしすぎだろって？

互いに、星人との戦いをしてるといつ死ぬかがわからないので他人とは、あまり深く関わらないのが一番さ。

そいつが死んだ時に、動揺してくたばつちまうような雑魚になりたくはないしね。

そう思いつつ、帰路について飛行機で日本に戻って自宅に戻ると、岸本が待ちくたびれた様子で出迎えてくれた。

「遅ーい。遅いよ、竜崎くん」

「スマンスマン。会合自体は簡単だったけど移動時間が長くてね」

「じゃあ、しよっか」

拗ねる岸本に、そう答えると彼女がそう言って服を脱ぎだした。

「なにを……っってもう準備万端かよ。手際良いな」

「ふっふー、あなたが行く前はレイカさんと交互にしたけど今日は私が独占するわ」

「疲れてっから激しくは動かんぞー」

「はいはい。わかってますよーだ」

この後の出来事は、特に言うことはないんだが雰囲気的に彼女のペースなので完全に、手綱を握られた感がするが仕方ないことだろう。カタストロフィも近いんだし。

その結果、彼女と何度もやり合うことになった。

数日後

『たった今……中学校はすごいことになっています』

「……………中学校で立て籠もりねえ。岸本、ネットの反応は？」

「既にスレッドが立っているわね。しかも顔写真が載っているものまで上がっているわ」

ニュースを見た俺は、岸本に頼んで忒チャンネルで調べてみると小学校の集合写真が既に貼られているとのことだった。

そのため、その写真を見てみると実行犯に丸が付けられていてよく見たら西だった。

それを見た俺は、すぐに独自のネットワークを使って聞き込みをしていくとどうやら、警視庁は西一人に対して警視庁が保有している特殊部隊であるSATを使うらしい。

全く、カタストロフィが間近に迫っているのにやるのが派手だ

ねえと思っていると、ニュースキャスターが西がくたばったことを伝えてきたがそれと同時にいつもの寒気が来たので、岸本を見ると彼女も感じたようなのでスーツを着込むために2人で着替え始めた。

同棲を始めた時は、それぞれの場所で着替えていたが何度も身体を重ねた俺達は互いの裸を見ても、動じなくなっていたが着替え中は見ないようにしている。

親しき仲にも礼儀あり、と言う諺があるようにジロジロと見てもそれはそれで失礼に当たるしな。

その結果、互いに着替えを終わると転送が始まった。

恐らくではあるが、これがカラストロファイ前のラストミッションだと思いつながら、俺達は例の部屋に転送されていった。

第34話 ラストミッション

「……………？ 照明が点いてないな」

「竜崎か」

「ねえ、なんで点いてないの？ 気味悪いんだけど」

「点かないんだ。何故だかな」

転送されると照明が点いておらず、外の灯りだけが部屋に入ってきている状態なので互いの顔を認識しにくい。

それでも、誰が誰なのかわかるので既にいるメンバーを確認していくと、西もいたので彼に声を掛けた。

「西、テレビでえらいことになってたよ」

「どーせ、終わる世界なんだ。関係ねーだろ」

「だな」

俺達がそう言い合っていると、それまで黙っていた稲葉が何かを呟きだしてからこう叫んだ。

「だめだ！絶対！ここで！このミッションで！死ぬ！俺は死ぬ！」

急に叫びだしたので、玄野や加藤は驚きの表情を露わにするがそれでも続けていく。

「予感がするー！やばい！死ぬ！だめだちくしょう！俺はもうすぐ死ぬー！」

「稲葉君、大丈夫だよ。ちよつと落ち着こー！」

「確かに今回、生きて帰れる気がしない……………」

「ちくしょう…………ちくしょう…………吐き気がする…………気分悪い…………」

イナバの発言に、鈴木さんは彼を落ち着かせようとしているが桜井も彼の雰囲気を押されて弱気になったが、岸本やレイカ達は普段通りだった。

星人討伐に長い間、付き合っている俺や西はどんな星人が出てきてもどうだって良い訳で、風や玄野のように目的があって生き残っている奴らもイナバのように気圧されていない。

しかし、そんな中でもイナバは自分の思いを露わにしている。

「人間の命は重くない！！見て来ただろ！！ボロクズみたいに壊れちまう

様を!!」

「神なんかいない!!みんなどつかで神がいると思ってる!!でも神なんかいない!! 神がいたら!! 神に慈悲があれば!! 人間があんな風に死ぬかよ!! 俺らこんな目に負うかよ!!」

「寧ろ、悪魔の存在の方が説得力がある……災厄は……悪いことは重なる……確率論なんか無視して重なっていく……この世は悪魔に翻弄されるだけの場所なんだよ……」

イナバの雰囲気、加藤達も飲まれそうになった時に玄野がそれを覆すようにこう言い始めた。

「悪魔がいたとして、知ったこつちやないって」
「!?」

「今まで竜崎達が生き残ったのは! 知恵を使って持てる能力を駆使して生き延びようとした結果だ!! 人間は! 立ち向かうことが出来るはずだ!!」

「……不安を抱えたまま、何もしないのは愚の骨頂だ。最後の最後まで知恵を絞って協力し合うんだ。自分達だけが頼りだ」

「よ、よく……おまえらはこんな状況で……こんな地獄で……」

玄野の発言に、加藤も背中を押されたようにそう言ったのでイナバは顔に手を当てながら、そう呟いたが次の瞬間にはいつもの音楽が流れて武器が取り出せるようになった。

しかし、その音楽は壊れたレコーダーのように途切れ途切れに流れたので不気味ではある。

そしていつものように、現れた画面は文字化けしてよくわからない状態だったので、俺達は100点の武器を取りに行った。

今回の場合、ハードスーツの火力よりも武器単体での火力の方が良い気がする。

言ってしまうと、そういつた予感がしたのでZガンとLロケランを携行して、Xショットガンは太ももに付けた。

岸本達も、ZガンやXショットガンを装備して転送されていくところとは日本ではなく、ヨーロッパのイタリアのようだった。

そのため、周囲を見渡すと既に他のガンツメンバーの死体が散乱し

ていてその中には、ハードスーツを着ているヤツの死体もあった。

そこから推測できるのは、ハードスーツレベルの防御力を持つてしても防ぎきれぬ相手ではないと言うことで、貫通攻撃すら可能だと言うことだろう。

ハードスーツをあの部屋に置いてきて正解だったな。あれ、動きが鈍るし。

そんな訳で、周囲を警戒しながら歩みを進めて広場まで行くとそこには、ダビデ像を模した多くの星人と色んな人種がガンツスーツを着込んで戦っていた。

広場に来る途中、倒れていたイタリア人らしき人物に話しかけられたので英語で返すとどうやら、今回の星人に倒されたらしい。

しかも、他の海外チームも参戦しているがそいつらも全滅するレベルで強いという話だ。

こりや、今までで一番大変なミッションだと思いつつながら加藤達に説明すると項垂れていたのも、みんなを引っ張りながら来たのだが流石に多すぎだろう。

体高が数メートルもある星人もいれば、30センチ程度の星人もいるがそいつらは一貫してスーツの防御力を無視した攻撃力を有している様だ。

そのため、死にたくない思いから加藤は戻る様に指示して俺も四方八方から攻撃されたくないの、来た道に戻ることにした。

しかし、俺達の存在に気付いた星人が少なからずいてその対応に岸本とレイカが、それぞれのXショットガンを使って撃破した。

彼女達が倒した星人は、小型のものであったので中型の星人には俺のZガンを使って倒した。

幸い、西や和泉は既に別行動に移っていて加藤や玄野は俺達と共に戦う意思を示した一方で、桜井や鈴木さん、イナバとは散り散りになっちゃった。

とは言え、現状では彼らに構っているほどの余裕はないので残った俺達は広場に戻って、星人を殲滅していきながら彼らと合流するしかない。

そのため、加藤は自分が持ってきたZガンを使うことにして、玄野は落ちていてそれを使うことになった。

また、岸本とレイカもZガンを保有しているのでXショットガンも、太ももの装着具に引っかけてからZガンで応戦した。

だが今回のミツシヨン、星人の数が多すぎて広場にいた奴らの処理に時間が掛かったが殲滅し終わると、桜井達が走っていった方向へ走った。

このクソみたいな戦場で、運がよければ生き延びているだろうがその可能性が低い以上は応援に向かった方が良い。

その判断で走っていくと、さっきの広場とは別の広場に彼らはいた。

彼ら、と言うはイナバの他に鈴木さんと小島がいたからでその3人は今回の星人との戦闘で、既にボロボロになっていた。

しかし、小島は黒野の姿を確認すると彼に近寄ってきたし、鈴木さんもホツとした表情で俺達に近づいてきた。

イナバは少々、照れくさそうにしながら近寄る素振りを見せたが次の瞬間、大型の星人が降ってきてイナバを踏みつぶした。

その事実には、呆気にとられた俺達だったがイナバがくたばった事実を実感すると、その怒りを戦う意思に変えてイナバを踏みつぶした星人に攻撃を加えた。

そいつは他の星人に加えて、攻撃力と素早さが高く感じられたがオニ星人やぬらりひょんと比べるとまだ楽勝だ。

彼らは本当に強かった、と思いながらチームプレーで攻撃を加えていくと戦いの途中なのに転送が始まった。

(まずい！このまま転送が続けばやる前にやられる!!)

そう思って、がむしゃらにZガンを星人に向けて引き金を引くと瞬間的に背筋が凍ったため、反射的に右に倒れ込むと右足の殆どを巻き添えにする攻撃が来た。

そのため、俺は倒れ込む勢いで寝転がると加藤に続いて玄野も転送されたのを確認できたので、早く俺も転送してくれと思いながら星人を見た。

俺が攻撃した星人は、踏みつけようと近寄ってきたがその瞬間にZガンの攻撃が当たって、身体の半分が消えた。

「よし！これで転送される！」

そう呟くと、転送が始まってあの部屋へ帰還することが出来た。

「竜崎くん！」

「よかった。生きて帰ってきて」

俺がガンツのある部屋に帰還すると、岸本やレイカがそう言いながら近寄ってきて加藤達からも声を掛けられた。

それだけ、今回の星人は強力だった訳だが生きて帰れることを実感した俺は、深いため息を吐いてガンツを見ると桜井の点数が表示されていた。

そして、何よりも俺達の注目を集めたのが「おわり。」という表記。名前は相変わらず、文字化けしていて顔写真も荒くなっているがそれでも誰かはわかるし、他のメンバーにも終わり则表示されているので本当にカタストロフィ前のラストミッションだったようだ。

とは言え、強制的に生き残ることが主目的になった今回のミッションで点数を稼いだ奴らは少なく、逃げに回った桜井や風とタケシのコンビは0点だった。

しかし、その一方で激戦の中でも星人を討伐した加藤には65点を与えられて西も102点と、100点メニューを選べる状態になった。

その事実には、玄野達はイナバの復活を要望したが強い武器を求める西の心には響かず、2番を選んで強い武器を保有して次に表示された和泉も同様に2番を選んだ。

小島や鈴木さん、レイカはある程度の星人を倒したようだが100点には届かなかった。

しかし、岸本が1000点以上の点数を稼いだのでイナバの復活が可能になったが3番を宣言して復活を求めたが、復活させる前に画面が消えた。

それはまるで、古びたコンピュータの不具合で急に止まったかのよ

うな消え方だった。

そこから考えられるのは、今回のミッションは本来だったらヨーロッパだけで終わらせるつもりだったが、彼らだけではミッションがクリアできないと判断したあっちのガンツから要請がきたのだろう。

しかし、こつちのガンツはいきなりの出来事だったので準備が整わないままに俺達を召集、ヨーロッパに送り出したが内部電源の関係で強制的に転送してきたのだろう。

となれば、この事象も納得できるがだからといってイナバがくたばったことには変わりないため、玄野達はなんとかして復活させようとしたがレイカの番が終わって玄野に移った。

玄野の点数は惜しくも100点には届かず、俺の点数も100点には届かず仕舞いだった。

そして、その後のガンツはうんともすんとも言わなくなったので俺達は部屋を出ることにした。

イナバがいなくなったことはショックだったが、だからといって今後の展開で彼が活躍できるかどうかは疑問だったし、例え生き返ってもすぐにくたばりそうな予感がする。

そう思いながら、俺達はそれぞれの家へと帰っていった。

第35話 文明崩壊の序章

「なに……………この空……………」

「空が赤い……………」

岸本とレイカが窓から空を見上げて、そう呟いたが俺はついに来たかと思った。

文明崩壊を告げるカタストロフィは、ほとんどの人達からすれば原因不明の異常気象として捉えられているが数少ない奴らからすれば身近な出来事に感じた。

少なくとも俺や西、和泉からすれば正に文明崩壊の序章として持つてこいな展開である。

なので、一先ずは彼女達にも声を掛けた。

「あー、驚いているときに悪いがスーツを着ていた方がいい。星人討伐みたいな状況に陥っても大丈夫なようにな」

「竜崎くんはこの光景を想像できた？」

「いや全く。だが文明崩壊には持つてこいつて感じだぜ」

俺の言葉に反応したレイカに、そう答えると岸本がこう言うてきた。

「じゃあ、私は竜崎くんを信じるなく。だってとても楽しそうだし」

「楽しそう？」

「だって、普段は楽しそうに笑わないのに気持ち悪いぐらい、ニヤついているわよ？」

彼女に指摘されて気づいたのだが、どうやら無意識のうちに今まで以上に感情が荒ぶっているようだな。

普段は理性で抑えているが、こういうった状況や展開に巻き込まれるのはそう多くないからかなり興奮する。

星人討伐時は、それなりに楽しめるのだがどうやって目の前にいる星人を倒そうか、という考えになるのでこういう無駄に壮大な展開には憧れていたりはした。

そのため、彼女達にもスーツを着せてからこの数日間のことを思い返した。

まず、ラストミッション後の翌日にレイカがアイドルをやめた。

ガンツに呼び出された時から、俺に一目惚れしてたまにデートをしたり、討伐のミッションをこなして行くうちに一緒に生活を送りたいと考えるようになったらしい。

前々から、同居している岸本との取り合いになるのは必至なのでそこから辺はカタストロフィ後に交渉するとしても、今から準備をしても遅くはないと思ってやめたとのことだ。

まあ、彼女が俺達の家に来てからマネージャーやらに電話やチャイムを鳴らされたが、居留守を使つて無視したので暫くしたらいなくなつたようだ。

とは言え、カタストロフィでどうなるかは誰にもわからないのでレイカが来た日の夜は3人でやりまくつたけどな。

その一方で、桜井はCTスキャンで頭を診てもらつたようで脳内の爆弾はなくなつていたようだ。

また、和泉は彼の彼女さんと上手く行つていようでミッション後にデートをしたと言つていたな。

風とタケシも、鈴木さんの家でお世話になつていようだし、順調にいつていたがこの空を見てしまつたら今までの努力が台無しにされそうな感じになる。

まあ、なるようにしかないので思い思いに過ごしているとテレビでアメリカがテロに遭つたことを伝え始めた。

テレビが映し出す光景に、釘付けになつていたがふと外に目を向けると流星群のように何かが降つてきているのがわかつた。

そして次の瞬間、地震の縦揺れのような振動が家全体に襲いかかつたので思わず、尻餅をついてしまった。スーツを着てなかつたら腰を痛めていただろうな。

振動自体は、その一瞬だけだったのですぐに立ち上がつて窓から外の光景を見ると、巨大な釘のようなものが地面に突き刺さつていた。

しかもその釘は1本だけではなく、いくつも地面に対して斜めに突き刺さつていたのでその光景に驚愕しているとそれらは動き出した。

正確には、1本の釘が2体の巨大なロボットの様な存在になつて動

き出し、歩き始めたのだ。

そして、動き出したそいつらは縦横無尽に歩き回って目につく背の高い建物を破壊しまくっているの、それを見てみると岸本がいつの間にか、俺の隣に立って外を見ながらこう言ってきた。

「誠くん。ついに始まったんだよね？ カタストロフィが」

「……………そうだな。だが俺達には関係ないね」

「こんなクソみたいな状況でも生き延びるから、でしょ？」

「よくご存じで」

岸本の答えに、俺はキヒヒに笑うとレイカも岸本とは反対側に立つてこう言ってきた。

「だったら、その『俺達』に私も入れてもらえる？」

「何故？」

「彼女だったら何人いても大丈夫だからよ」

「遅くなったことで」

レイカの言葉に、岸本は驚いていたが俺はそうなって当然だと思った。

何故なら、レイカに対しても私生活で岸本に接したように話していたので、恋愛を行うんだったら何人いても大丈夫だと判断したのだから。

彼女の言葉に、岸本が食い下がろうとしたので俺がストップを掛けて外を見ることを促すと、数十メートルはあるロボットの他に体高10メートルぐらいの人型ロボットのような奴らが歩き始めている。

あれがもし、人間と同等の知的生命体を作ったものだとすると人類、いや地球人の文明を遥かに超越した文明なのだろう。

となれば、米軍や自衛隊が出動しても万に一つの確率でも勝てないだろう。

理由は奴らの母船と思われる巨大な物体が、地上に降り立とうとしているからで恐らくは他の惑星を移動するための宇宙船なのだと推測できる。

そんな奴らが、どのぐらいの時間を掛けたのかはわからないが宇宙を渡ってこの星に来たとすれば、月や火星などの惑星に対して国家単

位で幾つもの障害を乗り換えてようやく、無人探査機を送り出せるレベルの文明しか持ち得ない我々は奴らに勝てる訳がない。それこそ、ガンツの装備が無い限りはな。

そう考えれば、ガンツの装備も他の文明から来たと考えるのが妥当だろうが、今はそんなことよりも生き残る方が優先度が高い。

そのため、俺達はそれぞれのZガンを手にとって外に飛び出していった。

第36話 崩壊する世界の中で

絶ッてエ、諦めねえ!!

最後の最後の最後の最後まで死んでたまるかよ。

生き残ってやる!!

ある高校の屋上では、少年が恋人と共に決意を新たにして……………

「ハアツ、ハアツ……………どーするッ、どーするッ!!」

「にいちゃん……………」

ある駅前では、地下鉄に繋がる入り口で弟を守るために考え、Zガンを手に巨人に立ち向かい……………

「師匠ッ!師匠ッ、守ってください!!」

街中では、恋人を守るために寿命を削ると知りながら超能力を使い……………

「うおおおおおー!ー!ー!!」

別の場所では、小さな相棒を守るためにその筋力を使って巨人の背骨を壊し……………

「ふん!ー!」

他の駅前では、己の経験と勘を使って恋人を攻撃しようとした巨人をZガンで倒していた。

既に自衛隊は、総力を挙げて防衛出動を行っていたが数が多すぎる上に彼らの装備では全くと言っていいほど、歯が立たない状態なのでいたずらに犠牲者を増やしていった。

そして、各々が対峙した巨人を倒しきる頃には自衛隊による組織的な抵抗は不可能になり、実質的に日本は負けたことになるがそれでも一部では抵抗を続ける奴らがいた。

その1つが、竜崎達がいる場所だった。

「いっちらー!帯の討伐は完了。スーツにダメージは?」

「大丈夫……ノーダメ」

「私もよ。これもミツシヨンの一環かしらね？」

「わからんが転送はされないからダメージは受けられないぞ」

俺がそう言うのと、彼女達は頷いたが周囲にいた生存者達から感謝された一方で、現状ではどこまでやれるかわからない状況だ。

何故なら、今回の件で奴らは軍隊や警察機構の様に異常なまでに数が多いので、戦い続ければ最初に体力切れに陥るのはこっちが早い。

日本中のガンツメンバーをかき集めても、今回は勝てる見込みが低いのが現実だ。

となれば、前回はこの時のための予行練習みたいなものだったのか。そんな予行練習は嫌だが。

そう考えるとあの強さに納得できるが、こうなった以上はどちらかが負けるまで戦い続けるデスゲームになるな。

侵略してきたのは向こうだが、俺にだって地球で生きてきたプライドのプの字ぐらいはあるし、誰かに塀の中で生かされるよりかは外を歩き回る自由のために戦ってくたばる方がいい。

そう思いながら、岸本達とガンツがある部屋に向けて歩き始めようかと考えて声を掛けようとした時、10体ぐらいの巨人が俺達の周囲に降り立った。

「Oh……マジかよ」

「誠くん……」

「やるしかないよね？」

「ああ……セーのっ！」

周囲の人達は、絶望して叫んでいるだけだったがそんな中でも冷静だった俺達は掛け声と共に、それぞれのZガンの引き金を引いて3体の巨人を瞬殺した。

そのため、奴らも自分達が使う武器の引き金を引いた様で銃口に光が集まり始めたので、弾が発射する直前で高く飛び上がった。

理由は、あいつらが使う弾は地球で使われている弾丸とは違ってCDやDVDの様な巨大な円盤を丸鋸のように撃ち出すタイプなので、左右に軽く避けた程度では巻き添えを食らう。

その結果、スーツを着てないために高く飛び上がれなかった人達の殆どが、体などを真つ二つにされて死んでしまったが見知らぬ人の生死に構っていられるほどに余裕はない。

そう考えながら、Zガンの引き金をさらに引いて2体ほどの巨人を倒して着地すると奴らの反撃が始まった。

やられると一発アウト、と意識しながら攻撃の手を緩めずに対処して行くと思われぬ奴らも殲滅できた。

「誠くん、大丈夫？」

「なんとかな。今回は流石に危なかつたけど」

岸本が聞いてきたので、そう答えたのだが今回の星人は今までの星人と違って野生の動物の様に暴れ回るよりも、軍隊の様に統率の取れた動きをしている。

そのため、流石の俺でも一瞬でも気を抜くとくたばりそうな予感があったので、岸本達のフォローができなかったが彼女達も無事な様だ。その事を確認するといきなり、周囲からバチバチという音と共にガンツスーツを着た奴らが現れた。

いきなり、現れたので多少は警戒したがどうやら他の都道府県から来たメンバーらしく、他の場所で巨人を捕虜にしたらしいので一先ずは見に行くことにした。

何故なら、今回の侵略を起こした奴らがどういった存在なのかを確かめる必要があるからだ。

そんな背景から、巨人がいる場所に向かうと全身を覆っていた鎧を脱がされている様で中の人物がよくわかる様になっていた。

姿形こそ、俺達と似ているが顔はどちらかと言うと犬に似ている上に目は2対4つと微妙に違っている。

装備は外されているとはいえ、宇宙を渡って来た奴らだ。

どんな装備を身につけているかはわからないので、警戒するに越したことはないが今の所は大丈夫だとして一先ずは手を頭の後ろで組ませて跪かせると、複数人いるうちの1人が何がを喋り出した。

恐らく、彼らの言語だろうが俺達からすれば訳の分からない言語なので警戒度を高めた。

一方、岸本やレイカは自分達と似た種族が侵略して来たことに驚きを隠せない様でほぼ棒立ちになっていた。

しかし、喋り出した奴が急に手をピストルの形に変えると雷の様な弾をガンツメンバーに放った。

すると撃たれた奴は、スーツの防御力を無視した攻撃で即死したのでその場は軽い混乱状態になったが、ガンツメンバーの反撃で捕らえられた巨人達は全滅した。

彼らは思い思いに愚痴を呟いたが、その場が落ち着くとアイドルであるレイカが一緒にしていると気が付いた彼らはかなり興奮した様子だった。

とは言え、日が暮れ始めたようで辺りが暗く始めたので一旦はお開きとなって、それぞれの帰る場所に戻っていった。

玄野 side

竜崎達が生き残り、自宅に戻る時間と同時刻に玄野達は学校から休める場所に移動している最中であった。

学校を襲った2体の巨人は、彼の恋人である小島多恵との共同撃破によって殲滅されていたため、巨人族の英雄の弟が戦死していることは兄には伝えられていない。

これは、小島多恵が敵は一体残らず殲滅せよとの岸本の教えを守った結果であり、それを見た玄野はやや複雑そうな表情をしていたが玄野自身も友人を殺されたりしているのでなんとも言えなかった。

そして、日没直前の巨人族の動きを見て気が付いた。

(そろそろ夜になる。それに合わせてあのデカイのが全部、要塞に向かっていくとなると夜は攻撃してこないのか? ……いや、交代で戻っているだけかもしれない。だけど交代中は休めるんだ!)

そのことに気が付いた彼は、恋人である多恵を見ると彼女も同じことを思っていたようで近くのホテルに入って休むことにした。

例えば、星人討伐のミッションをこなして行っても人間というものは

疲れるものだ。

疲れがあると身体の動きが鈍り、眠気があれば正常な判断が出来なくなるため、休める時に休むのがサバイバルでの鉄則である。

異星人の侵略によって、政府機能の殆どが麻痺している現状では警察機構や自衛隊に頼ることは実質的に不可能であり、自分の身は自分で守るしかない。

玄野の場合、家族関係はあまりよろしくないので特に気にしていないが小島の場合、実家から高校に通っていたので心配している様子だった。

可能なら、実家に帰らせたいがこれからどうなるかがわからないのであまり無理はさせたくはない、と玄野は思っている。

そのため、2人で抱き合っていると彼女から話し始めた。

「なんか、大変なことになっちゃったね」

「ああ、これがカタストロフィってヤツなんだな」

「竜崎くんが言っていたこと？」

「文明崩壊なんて言っていたけどまさか、異星人侵略だとは思っていなかった」

小島の言葉に、玄野は自分の思いを吐露していくと彼女は彼にキスをしてからこう言った。

「私は計ちゃんと一緒にいられるから良いかなあって思ってる。お父さんやお母さんに会えないのは辛いけど」

「……………必ず、会いに行こう。会って家族になることを伝えよう」

「うん」

玄野は、小島の悲しそうな笑みを見て決意を新たにす。

彼女を守り、彼女と共に歩み、共にこの惨劇から生き延びると言うことを。

そう思いながら、2人は寄り添って眠りに入っていた。

第37話 宇宙船の中は……………

竜崎 side

「ああクソ、こんな時に転送されるとは……………」

「でもよかったんじゃない？ ガンツは起動してるみたいだし」

「そうね。あのまま、戦い続けても勝ち目は薄かったと思うし」

「だからってこの人数を集めるとなると本拠地に攻め込め、なんて命令が下されそうだけ」

日没と共に俺達は一旦、家に戻って休んでいたが急に寒気がしたので岸本達を起こして待機していると、転送が始まったので行った先はどこかの公園だった。

そして、俺達と同じようにガンツスーツを着ている奴らが100人前後もいることから少なくとも、関東近郊から召集されたことが予想できる。

また、公園の中でも段差があつて目に留まりやすい場所には複数のおっさん共がいて、ガンツと思われる黒い球がいくつつかある。

そこから考えられるのは、あのおっさん共はガンツをコントロールすることが出来ると推測できるので、ここは素直に彼らの命令に従いつつも生き残るとするかな。

「竜崎！ それに岸本とレイカさん!!」

「……………玄野達まで飛ばされてきたのか」

「ああ、どーなつてんだ？」

「わからんがあまり荒波は立てない方がよさげな感じがする」

俺達はそう言いつつ、周囲を見渡すと黒い集団の中でもずば抜けて背の高い風の姿を見つけたので、彼の元に近寄ると鈴木さんの姿が見当たらない。

そのため、彼にそのことを聞くと今回の件で巨人族の攻撃でくたばってしまったらしいので、そのことにショックを受けていると和泉を近づいてきた。

「和泉。無事だったか」

「ああ、なんとかな」

「彼女さんは大丈夫かい？」

「無事に家まで送り届けたさ」

「どうやら、悪い話ばかりではないようなので前向きに生きようと考えていると、おっさん共からの発言があった。

「良く聞け！ 注目!! 注目!!」

その声の大きさに、ざわついていた奴らは静かになったのでおっさんは話を続けた。

「今から諸君に！ 敵陣地の真っ只中に切り込んで行ってもらおう!!」

「はあ!? 何言ってるんだてんめえー!!」

「ぞっけん!!」

「諸君は我々に抵抗は出来ない!! 生殺与奪の権利は我々が掌握している!!」

招集されたメンバーから、拒絶の反応が出たもののおっさん共はそれを受け流して説明を続けていったので、まとめると以下のようなる。

1つ目、公園にあるガンツは全て制御している

2つ目、頭に爆弾を入れ直した

3つ目、できる限りのダメージを相手に与えて情報を持ち帰る

説明自体は、非常にシンプルではあるが俺達からすれば受け入れられるものではなく、殆どの奴らから反対の意見が出て血気早い奴らはZガンやXショットガンを構えて撃とうとした。

しかし、おっさん共の中でパソコンを使う奴がいてキーボードを叩いてコマンドを入力すると、構えた奴らの頭が吹き飛んだのでおっさん共の命令には従わないといけないようだ。

その結果、転送されながら奴らの命令を聞くことになった。

「我々も無闇に戦力を失いたくない!! できる限りの生還を望む!!」

「あつくつそ!!」

「ちくしょう!!」

そして俺達は、始めて異星人の文明と接触することになった。

く 巨大要塞の内部 く

「でかすぎだろ……………」

「んだ……………どこだよ」

俺達は、転送されたのは良いんだが文明が違いすぎて圧倒されていた。

まず、要塞の内部は無機質な天井や壁で覆われているかと思いきや天井に当たる部分は、恐らくではあるが東京の建物が氷柱のように映し出されている上に、壁も外にいるのと変わらないように広がった。

と言うより、空間を拡張する技術よって外見よりも圧倒的に広い空間が広がっている。

その中に、建物やモノレールと思われるチューブ状の何かが通っていて、俺達が転送された場所はその中でも公園と思われる場所だった。

有り体に言えば、文明のレベルが大きく違っていて火薬を使って鉛玉などを撃ち出し、化石燃料に依存しないと移動にすら困る俺達からすればまともに勝てる相手ではない。

まさに、ガンツの装備がなければ速攻で占領されておしまいだったろう。

しかし、冷静に分析している間にも転送されたメンバーと巨人族との間でイザコザがあり、しかも撃つかどうかさえもまとまらない状態ではダメージを与えるどころの話ではない。

そんな中、巨人族の方で頭が吹き飛んだ奴がいたので撃った奴を探すと、さっきのおっさん共の中の1人がXショットガンを撃った奴に向けていたので、一瞬の沈黙の後に民間人に向けて撃ちまくっていた。

その結果、公園にいた民間人はいなくなったので落ち着いたが、このスケールに玄野達も圧倒されているようだ。

「宇宙船の中ってあれ、確かにでかかったけど……………」

「まじかよ……中ってこれ、広すぎねえ……か？」

「多分……と言うより、ほぼ確実に空間拡張やそれに類するの技術を使っているんだろうな。人類だと数百年の時間を使っても開発できるかわからんが」

「マジもんのハリウッド映画そのものだな」

前世の記憶の中には、21世紀半ばには火星に移住することが可能だと言っていた気がするが、だからといって空間に関する技術なんてF小説などのそういった類いにしかなかった。

そのため、ガンツの最終的な目的は文明そのものの侵略に対する力ウンターなのではないかと思う。

しかし、呆然としている時間はないうで巨人族の民間人が去ってから少ししてから、東京を蹂躪した奴らが輸送機に運ばれてやって来た。

「相手のフィールドでやるとか、ハードすぎるだろうーが!!」

「加藤!!」

「計ちゃん!! やるしかねえってよ!!」

「多恵ちゃん、やりましょ!!」

「わかってます! 岸本さん!」

『逃げて無駄だ!! 闘って死ぬか、自力で生き延びろ!!』

呼び出したリーダー格のおっさんが何か、ほざいているがそんなのは関係ない。

俺はただ、目の前の敵を潰すまでだと考えてZガンの引き金を引いて敵を減らしていくことに専念した。

とは言え、敵も黙っている訳ではないので相手からの攻撃にガンツメンバーは、次々にやられていくので必然的に消耗戦になっていく。

しかも、相手の戦力がどの程度なのか分からないので徒労に終わるだけかもしれないが、何もしないでくたばるよりかはマシだ。

そう思いながら、攻撃していくと如何にも強そうなヤツが降ってきた。

「なんだよ! アイツ!!」

「猛者っばいぞ!!」

「強かろうと関係ねえよ！　じゃなきや、やられるからな!!」

俺が玄野達にそう言った瞬間、猛者がさらに2体も降ってきたのでどいつが相手だと迷っていると、リーダー格のおっさんが携帯端末で何かを言うとハードスーツの腕の部分が彼に装備された。

どうやら、本当にガンツを制御できるらしいな。

そして、少しの間を置いて猛者達が動き出したので公園は再び戦場と化した。

猛者達が高速で動く度に、複数人のガンツメンバーがくたばっていきるので俺達も動き出して迎撃に当たるがとにかく早い。

Xショットガン程度だと、着弾までのタイムラグでまともに当たらないし、Zガンでも予め動きを予測しながら攻撃しないと掠りもしない。

そのため、しばらくは唯々消耗していく戦力があのおっさんの攻撃で止まった。

おっさんもまた、星人討伐をしてきたようで腕だけにも関わらず、顔色1つ変えずに攻撃したので猛者2人のターゲットになったらしい。

それを確認した俺は、もう1人の金髪長髪の猛者に目を向けるとそいつと目が合った。

ヤツの顔を見ると、表情を変えずに冷酷な目をしてみてきたので俺は俺で、あの猛者のターゲットにされたらしい。

全く、今日は厄日だぜと思いなから構えるとそいつも構えを取ったので俺達は動き始めた。

第38話 再結集

「ハア……………ハア……………」
「……………」

俺と金髪ロングの巨人は、互いの技量を生かして互角の戦いをして
いると思いたい。

俺はZガンを使って攻撃の際を与えないし、向こうは向こうでこっ
ちの攻撃を物ともせずには躲し続けている。

彼我の体格差があり過ぎて、格闘術は全くと言って良いほど使えな
いから使える選択肢が少ないので相手の強さが把握できない。

全く、チートとは言っても巨人族からすれば小人同然の俺が生身で
暴れても歯牙に書けないんだろなあ、と思つていてついに俺達の
転送が始まった。

「……………またの機会に、だな」

俺がそう呟くと、金髪ロングの巨人は目を細めた。

多分だが、アイツはまたどこかで遭遇して戦いそうな気がしている
だろうがそれは俺も同じだ。

なんつーか、猛者の勘以上にうまい言葉が見つからないが一先ずは
ここで開きになって、俺達は戦う前に集まった公園に帰還すること
になった。

その際、巨人の1体を捕獲した様で武装解除された状態で公園に來
ていた。

そして、リーダー格のおっさんが発した言葉にその場にいたメン
バーは再び騒がしくなった。

「諸君はここで解散!!各自、自由に移動してくれ!!また、いずれこちら
から強制招集を掛ける!!」

「ふざけんな!!テメエ!!」

「おい!!」

「こいつ、ぶっ殺すぞ!!」

「あの玉の前の奴ら全員ぶっ殺す!!」

「全員、ランダムに転送しろ!!」

そして、おっさんの言葉を理解した俺は玄野達にこう言った。

「玄野！加藤！」

「ああ！」

「なんだ!？」

「転送したら合流しよう！」

「わかった!!」

俺がそう言うのと、転送が始まったのでどこに転送されるのかを考えながら動かないで待っていると、岸本とレイカが俺の手を握ってきた。

どうやら、バラバラに転送されない様にした行動だったがそれは功を奏したのだった。

「台場かー、フ○テレビの本社があるってことは」

「特徴的な球体が崩壊してるわ」

「こんなぐー時世だから仕方ないわよ」

俺たちが転送された先は台場であり、あることで有名になったテレビ番組の建物は球体部分が崩壊してるわ崩れかかっているし、建物全体から煙が立ち込めているのでとても中に入れたものではないな。

そう思いながら、ガンツがある建物に入るために彼女達と共に会話をしながら移動を開始した。

半日後

「みんな、こっちに帰ってきてからスーツにダメージは?」

「俺と多恵ちゃんにはないぜ」

「こっちもだ」

「問題ない」

「こっちもな」

敵地に強襲をかけてから、半日後には東京のガンツメンバーはほぼ再集合ができた。

しかし、桜井の行方はわかってない上に鈴木さんはカタストロフィ直後の巨人族の強襲でたけしを守るために戦死、西は恐らくではあるがあの部屋にいたのであろう。

面倒ごとは嫌う彼は、自分に損しかない様な戦いには参加しないだろうと言うことが経験則からわかっているのです、その程度のこととはわかるんだが桜井に関してはわからない。

多分、身内や大切な人がくたばったとは思うんだが憶測の域を出ないのでそれ以上はなあ。

とはいえ、今の目的はガンツがあるビルの一室に入り込んで強制的な転送と脳内の爆弾を取り除くことが先決だ。

そのため、ロッククライミングの要領でビルの庭の壁を構成している部分を登っていき、その部屋まで登り切るとガンツはまだ部屋にあつたので一安心だな。

「窓は……………開くようだな」

「すげえ……………」

俺が窓の取手に手をかけて、横に動かすと静かに動いたので現状では隠す必要はないということなのだろう。無闇に探す人もいないだろうしな。

「ガンツ、頭ん中にある爆弾と他のガンツが俺達を転送出来ないようにしてくれ」

「わかった。他にもやってほしいことがあつたら言つて。できる範囲でやるよ」

そんな訳で、部屋に入ると俺はガンツの中にいる人に声をかけるとガンツはいつもの様に展開して、ハゲ頭の全裸男がひよつこりと頭を出してきた。

そのことに、俺と和泉以外のメンバーが驚いていると誰もいない空間が急に、バチバチと電気が走って西が姿を現しながらこう言ってきた。

「おい、竜崎。何勝手に命令してんだよ」

「別にいつも通りだろ。それに、この場では基本的に誰からも命令を受けないと言うのが鉄則だっただろう？」

「……………くそっ!」

俺の反論に、西は悪態をつきながらそつぽを向いたが今は彼のご機嫌を直すよりもやらなければならぬことがある。

それは脳内の爆弾と、他のガンツによる転送を出来なくすることである。

今回、俺達が巨人族の宇宙船に行くことになったのも他のガンツによって転送されたことであり、その対策をしていれば俺達もあそこに行かなくてよかった。実際に西は行っていなかったようだし。

しかし、俺としては敵がどういった存在でどの程度の力を有しているのかを確認するために、玄野達を巻き込んで一緒に行くことにした。

その方が、チーム内でどんな相手なのかというのを把握しやすくなるのと同時に、今の玄野達なら行って帰ってくるだけだったら出来るだろうという確信があった。

カラストロファイが開始した直後に、鈴木さんがくたばるのはジャブ程度に想定外だった。

しかし、ぬらりひよん戦ですぐに戦闘不能になったことやダビデ像の星人の時に、小島がいなければくたばっていたと岸本経由で聞いていた。

そのため、今回の件でくたばる可能性が高いと判断を下した。

そして爆弾を取り除き、転送できないようにした後で強制招集を掛けた奴らの説明をした。

「結論から言うなら、あいつらは六菱や四井と言った大企業やら財閥のトップの連中で、かなり前からカラストロファイ対策を行っていた」「誠くんもやってみたいだけど?」

「個人でやるのと金持ちがやるのでは規模が違うし、彼らの目的は地球の支配者になることだぜ? ただ単に星人相手に暴れ回っているようなヤツと同規模で考えない方が良い」

そう、星人討伐に参加するようになって色んなところから情報を収集して整理した範囲内では、全てのガンツメンバーに対しての生殺与奪の権利を彼らは持っている。

そして何より、メンバーを道具のようにしか見ていないようなので頭の爆弾を平気で作動させるし、強制召集やランダムに転送する愚行も行える。

俺だったら、事前に通告して希望者のみを集めたりはするが、実際に目の当たりにしないと参加するヤツはそう多くないだろう。嫌々、やらされていた奴は多そうだし。

アメリカは崩壊したとニュースになっていたが、中国も日本が巨人族の攻撃を受けたのと同時期に攻撃を食らったらしく、西によると崩壊したとのことだった。

そんなことを聞いて、玄野達は呆れていたがそれでも巨人族を撃退したいという思いや、攫われた人達を助けたいという気持ちはあるらしい。

「こんなことを言うのはなんだけど、日本全国のガンツに中継をつなげてもいいか？」

「良いけど何をする気だ？」

「人を集めるんだよ。助けに行くためにな」

「なーる。別に構わんよ」

些か、人助けをするのは本意では無いがそれをきっかけに巨人族への反撃も同時並行で出来るなら、特に問題はない。

そう思いながら、ガンツの前に座った玄野の演説を聴くことにした。

第39話 集った意思は名も無き勇者か、それとも抵抗組織か

竜崎 side

「俺達は東京のチームで今、日本全国のチームに呼びかけている。東京は現在、異星人の攻撃によって殆どの人が囚われて、あの巨大な宇宙船に中にいる」

俺は今、玄野達の嘆願でガンツの前に座って演説をしている。

「これは強制ではないので各自の判断に任せるが今、これを見ているチームの人の中で我こそはと思う奴がいれば俺達と一緒に宇宙船に行つて、囚われている人達を助けに行つてほしい」

正直に言えば、演説を発案したのは玄野なので言い出しつぺの法則で彼がやればよかったのだが長い間、ガンツに関わつてリーダー的存在に立った俺が適任だと言うことになった。

全く、大多数の人前で演説するなんてことは今までにやったことがないから、どういう風に言えばいいのかがわからないが少なくとも俺が言いたいことは言った。

とは言え、そう言いきつてからしばらくしても無反応だったからレイカに頼んで、お願いという形で呼びかけた。

すると、他のガンツからの反応が幾つも上がって合計で10人ぐらいが来るらしい。

そのため、当初は誰も来るはずがないと高をくくっていた西は予想に反した出来事に困惑したが、他のガンツからの転送が始まったので実際に来るらしい。

それがわかると、俺達はガンツの正面から退いて転送される人間を迎える準備をした。

「思った以上に人数が少ないな………なるほど」

「人命救助の協力に来てくれたのかい？」

「……………それもあるが、どちらかというとな彼女目当てだ」

最初に転送されたのは、黒髪の長髪で眉目秀麗な顔立ちをしている青年だが、俺の言葉にそう返しながらレイカを見た。

どうやら、人助けはサブミッションとして受け止めているようなのだが、それでも来てくれただけでも多いに助かるな。

それを確認すると、互いに握手しながらこう言い合った。

「武田^{たけだ} 彪馬^{ひょうま}、神奈川のチームから1人だけ来た」

「竜崎誠、ひよんなことから東京チームのリーダーを務めている」

自己紹介を済ませると、実物のレイカを見て感嘆としていたが挨拶してから彼女の隣にいた加藤に突っかかっていた。

どうやら、彼女の有無を問いたですようだがカタストロフィ前は有名なアイドルだった、という点を考えればフアンの1人や2人が来てもおかしくはないわな。

まあ、問いただされた加藤はいい顔をしなかったがそんなことはお構いなしに再度、レイカと挨拶してから握手をして他のメンバーを見て回った。

そして、見終わるのと前後して次の転送が始まった。

「前嶋^{まえじま} 龍二^{りゅうじ}、広島から……………」

「竜崎誠、よろしく」

次に来たのは、小柄ではあるが金髪強面の青年で武器の類いは持つてきていない。

武田の場合はZガンを持ち込んできたが、彼の場合はXショットガンやYガン、ガンツソードの類いですら持つてきていないのでどうやら素手で闘うようだな。

来た理由は、俺に賛同しただけなのでどうにかして助けられたのだろうか。

そのため、この場にいるメンバー全員にこう言ってきた。

「よろしくなー！ 1人でも多く人を助けようぜ!!」

そう言った後、彼はガンツの前に座り込んだ。

「……………」

「あー、日本語はわかるかい？」

「……………ええ、もちろんよ」

「スマンな。ぱつと見、外国人に見えちまったからよ」

3人目はメアリー・マクレーンという女性で、金髪と外国人と見間違うほどの端正な顔立ちをしているが外国人ではない上、英語などは喋れないとのことだ。

とは言え、見た目が外国人なので転送されてから数秒間は俺と彼女とで黙りこくってしまったが、岸本の裏拳が俺の鳩尾にヒットしてから話し始めたのだ。

殴られた際、岸本は不機嫌そうにしていた上に俺は「グハツ」と漫画みたいに言ってしまったので妙に恥ずかしい。

そんな状況とは裏腹に次々と転送されてきた。

「関根 誠人、京都から……………」

そう言ったのは、眼鏡を掛けてよく言えば知的な、悪く言えばインテリっぽい顔立ちをした青年だが俺自身、色々と知識を蓄えているからどつちもどつちだ。

「吉川 海司、25歳って年齢は良いか。群馬から……………」

関根の次は、短髪で精悍な顔立ちをしている青年で持ってきた武器は2本のガンツソードなので、二刀流なのかもしれない。

「死ぬ覚悟がある奴らか……………良いじゃねえか。みんな、いいツラしてやがる」

彼の言葉に、俺は首を傾げたがその意味を後で知ることになる。

「おつ……………おいおい、オッサンは俺だけかよ」

次に、転送されてきたのは中年男性で今回の転送の中では今までで1番年齢が高いだろう。

鈴木さんが生きていれば、おっさんコンビとして活躍できたとは思うが既にくたばった以上は仕方ないと割り切ろう。

そう思っていると、中年男性は風に近づいてからこう言った。

「矢沢年雄、北海道から。オッサンどうし、ヨロシクな！」

（中年男性もとい、矢沢さん。確かに、風の見た目はおっさんそのものだが彼は高校生だぞ）

「……………あ」

「加藤くん……………」

そんなやり取りと、個人的な心の声の後に転送してきたのは童貞くさい大阪のメンバーだった。

「生きて……………たんですね、加藤君」

「ありがとう……………来てくれて」

「うううううううう」

彼がこつちに来た理由は、加藤の生存確認をするためというのが大きいだろう。

ぬらりひよん戦の後、加藤を目標とする発言をしていたがどうやらダビデ像星人との戦いも無事に生き残ったようだ。

そんな彼は、加藤との再会に涙を流していたがもう1人来てその人物は、加藤との共同生活を送ると決めたといい女性で山下杏と言うらしい。

まさか、こんな所で再会できるとは思っていなかったよう互いに抱き合っていたが、それを見ながらガンツに問いかけた。

「ガンツ。後何人、転送してくる？」

「後4人だね」

「4人も来るのか……………」

「どんな人なんだろうね」

俺の言葉に、岸本達が返してくれたがそれに反応した童貞もとい、眼鏡くんが残り岡を始めとした大阪チームの猛者達だと言う。

実際に来たのは彼の言葉通り、岡や色男といった俺達と顔見知りのメンバーで再会を喜びあった。

「しっかしまあ、あんたらが来るとは思ってなかったよ」

「なあに、人助けのついでに敵地にダメージを与えられたらと思っただけ」

「寧ろ、後者目的だったりするんよ」

「それだったら、強制転送を掛けた奴らの指揮の元で戦った方が良くない?」

「うちらは誰の下にもつきとーない。そう言うこっちや」

「なる、だったら歓迎するよ」

色男達から話を聞くと、彼ららしい反応が返ってきたので大阪気質満載だな、と思っていると玄野が吉川に話しかけた。

「そーいやあんた、さつき……」

「あん?」

「死ぬ覚悟とかなんとか、言っただけどあれってどう言う意味?」

そーいえば、そんなことを言っていたので俺からも聞いてみた。

「一応、武器は無制限に使用可能。生き返らせることも可能なのがガンツの常識だが変化があったのか?」

「ああ、あったよ」

「もしや再生ができないとかか?」

「よく知ってんじゃん」

「想定範囲内ではあったがな」

吉川とのやり取りで、元々の東京チームのメンバーは驚きの表情をしたが俺自身、前々から再生できない状況も想定していた。

以前にも話したが、ガンツはファックスの本体であると定義したがその本体が壊れたり、印刷できない状態になったらファックスの意味がなくなる。

地球産のファックスの場合、本体を交換する他に部品の交換や修理に出したりできる一方で、ガンツの場合はそう言ったのは一切できない。

前々からクローン羊のドリーみたいに、ほいほいとクローン人間が生産できてしまったら社会が混乱するんだろうなあ、とかを考えたかもしれない。

そして何より、死んだ人間をそう簡単に再生してしまっているのだろうかとも思っていた。

確かに、再生機能があればこんな地獄での目標になり得る訳だがそ

んな都合よく、再生できるとしてもたかが100点を取っただけで出来るとしたら人の生死に対しての論理感が崩壊するかもしれない。

そう考えがあったからこそ、いつでも再生できない状態でくたばることを念頭に行動してきた。

そのため、俺は特に驚きはしなかったが西や玄野達は受け入れ難い事実に混乱して再生を試みた。

結果は、残念ながら再生はできないとのことだったのでこう切り出した。

「てことで、戻りたい奴は素直に戻った方がいい。少なくとも俺達は責めたりしないから」

俺の言葉に、この場にいるメンバーは誰一人として立ち去る奴はいなかったのだ、このメンバーで人命救助を行うことになった。

第40話 人命救助と戦闘

「どうやら、宇宙船の弱点を発見したらしい」

俺はガンツを通して、アメリカのニューヨークに住んでいたはずのセバスと会話をしていた。

ニューヨークにも、東京に着陸したのと同規模の宇宙船がいて国としては負けたのだが政府高官の生き残りや民間の軍事会社が一体となって、ガンツの装備で迎撃に当たっているので向こうは優勢らしい。

中国やヨーロッパ方面でも、それぞれの形で迎撃しているので比較的、近いうちに着陸した宇宙船を破壊できるとのことだ。

こうして見るとやっぱり、日本の財閥と呼ばれている奴らが強い武器を保有しているのがわかる。

こういった場合、他の金持ち達も独占こそはしているが有能な人材を雇用している企業が多いので、日本だけが立ち遅れている感じがする。

いや寧ろ、自分達の狭い人間関係だけでこの局面を乗り越えようとしているので、柔軟な考え方や戦い方が出来ないといった方が正しいかな。

何はともあれ、俺達が出会った財閥のおっさん共は石頭が多そうなので、想定外の自体になったらまともに戦えないんじゃないだろうか。なんとなくだけど。

それはともかく

セバスがくれたのは、弱点があるという情報と宇宙船内部の人間が収容されている場所の地図だけだ。

後は自分達でなんとかしろ、ということだったので西が激怒したが俺達はおまへの道具じゃないから自分で聞き出せよ、と伝えるとブツブツと呟きながら黙った。

そのため、俺達はすぐに宇宙船に乗り込んで人命救助に当たること

にした。

何故なら、巨人族の攻撃は日中に行われるのが基本なのでそれに合わせて行動した方が効率的だ。妨害工作にもなるしね。

そんな訳で、夜が明けて少ししてから俺達は宇宙船で東京の人達が収容されている場所へと向かった。

「作戦開始!!」

「この人を転送して!!」

「流れを止めろ!!」

俺達が転送された場所は、流れるプールを深くして流れを強くした感じの施設なのだがそこには、裸になった人達が強制的に流されていたので俺達は救出しながら流れを止めた。

ちなみに、現在の装備は俺と岡がハードスーツを着込んで他の皆はそれぞれが使いやすい装備を使っている。

ZガンやLロケラン、Oガトリングガンなどは俺が出して他のメンバーに渡してあるが、理由は敵地に潜入しているんだからあらゆる敵に対抗できるようにしてある。

しかし、人命救助には必要ないので近くの壁に立てかけて救助に当たり、俺と岡で周囲を見張るのが今の役割分担だ。

そして、1回目の救助は不気味なほど簡単に終わったのだが巨人族にとって地球人が逆侵攻するなんてことを、予想や考えもしなかったのだろう。

そのため、施設の奥に目を向けると巨人族の施設で既に殺された人達が屠殺場で殺された豚が、天井に吊されるように天井から逆さ吊りで流れていた。しかも、心臓の部分から大量の血を放出しながら。

(全く、無関係の人と言っても気分が悪くなるな。俺達が日常で肉を食べる前に、加工される過程で同じことを豚や牛なんかに行っていると
は言え)

そう思いながら、次の施設へと向かった。

「全員、転送終わったか!」

「次々行くぞ。急ごう」

「休めないな……………」

「腹ごしらえもガマンだな…」

「ちよつと待った」

玄野や加藤が急いで次に行こうとする中、関根と吉川がヤレヤレといった感じでそう呟いたが前島がそう言って、さっきまで水が勢いよく流れていた場所に小便をぶちまけた。

正確には、ガンツスーツの股間に当たる部分を脱いで男の象徴を出す勢いよく出した。

あまりの光景に、俺達は少し唾然としたがここで悪乗りするのも悪くないだろう。

現に、矢沢さんも「俺も俺も」といつてやり始めたからな。

「おまえらなー、女性のいる前で……………」

「恥ずかしくはないのかあ?」

「あつ」

「えつ……………」

その行為に、武田や色男である桑原もそう言ったが男共は全員で同じ行為をした。

まあ、こんな状況にしたクソツタレ巨人族にはこのぐらいのお見舞いをしてほしいと思っていたんだ。

女性陣は引いた感じで見ていたが、俺達が一斉にやる光景はなかなか様になっていると思う。

そんな訳で、出し切った俺達は次の施設へと向かった。

「敵襲ーーー!!」

「転送早くしろお!!」

施設をいくつつか、回って案外楽勝かと思った時に巨人族の警備隊らしき奴らが壁を破壊しながらやって来た。

そのため、裸の人達はパニックに陥ったが集ったガンツメンバーはすぐに切り替えて、戦闘態勢に移行したのでまずは俺と岡のハードスーツでビームを放った。

向かう先は、双頭の獣で筋肉隆々の巨大な人型の体躯に狒犬のような顔のそいつは、実力を発揮せぬままに両方の頭を破壊されて終わった。

そのことに啞然としている中、吉川が2本のガンツソードを取りだして片方の巨人族に向かつていったので、島木と武田がそれぞれのZガンをもう片方に構えて引き金を引いた。

すると、もう片方は見るも無惨な姿に成り果てて吉川が向かった巨人も、手足をバラバラにされた後に首をちよんぱされた。

ここまで余裕だったのは、相手が警備員レベルの武装でやって来たことで例えるなら、機関銃やら対戦車用のロケランやらを装備した武装集団と拳銃だけを装備して警察犬しかいない警備隊とが戦うようなものだ。

どちらが勝つかは、子供でもわかるほどに装備が違いすぎるので特にこれと言って被害を出さずに済んだが、これももしも軍隊レベルの組織だったらどうなるかはわからない。

少なくとも、誰一人として死なずに帰還させることは不可能な訳で、それでも1人でも多くの人を救いたいという玄野達の気持ちから裸の人達が全員、転送しきったら一先ずは腹ごしらえをすることにした。

腹が減っては戦は出来ぬ、というしね。

「しっかし、あれだな。宇宙船はやっぱ広いなあ」

「一晩掛けて60%か……まだまだな」

「寝なくて大丈夫か？」

「時間が掛かりそうだから交代で攻略していった方が良いかもね」

「ガンツ、ハッキングはちゃんとしてる？」

「転送時にいくつか、ダミーも含めて他のガンツやネットワークを経由しているから大丈夫」

「ハッキング？ 必要かそれ？」

俺達が戻ったのは、昼前になってからで思い思いに休んでいた。

現状では、宇宙船にある施設を全て破壊するには時間が掛かるの

で休み休みで行くことになった。

カラストロファイが始まってから数日は経つが、こうしている間にも人々は宇宙船へと連れ攫われているのであまりのんびりとは出来ないが、休むことも仕事として飯を頬張ったり、仮眠を取ったりしている。

そうしている中、俺がガンツにハッキング対策について尋ねたので玄野が聞いてきた。

そのため、俺はこう言った。

「だって奴らは宇宙を渡ってくるんだぜ？ ハッキングの技術はかなり進んでいるし、俺が巨人族側だったらまず、ガンツ側の要であるコイツを叩くね」

「……………」

そう言いつつ、コンコンとガンツを叩くと玄野達はガンツの重要性を今更気付いたようで、そのことにため息を吐きつつもガンツに他の国の状況について聞いた。

こうやって、武器を取って巨人族と戦えるのはガンツがあつてこそであり、それが無い米軍や自衛隊は壊滅してしまった。

そのことから、今ここでガンツを失うと言うことは通信と移動手段の殆どを失うのと同じなので、慎重に行動するに越したことはない。

そう思いながら、俺はガンツが集めてくれた情報を整理すると意外なことに気が付いた。

第41話 不利ではあるが絶望的ではない

「どうした？」

「ネットでボロカスに叩かれてる。ホラ」

「……………確かにな」

「テロリスト……………俺達のことか？」

飯を食い終え、休憩もそこそこに次の施設に向かう時に玄野が自身の端末を見ていると、微かに驚いたのでそれを見せてもらった。

すると、先程まではネットですら使えなくなっていたのにネットが繋がっていて、その中には民間人を撃ち殺した瞬間を捉えた画像の他に巨人と人間とが手を重ねた画像が乗っていた。

そのため、詳細はわからんがネット上では俺達に対しての悪口しか乗っておらず、ゴキブリなんて言われている。

まあ、あの場には写真や動画を撮っていた奴はそれなりにいたのでそいつらがネットに上げたものを、情報操作で俺達を悪者に仕立て上げようとしたのだろう。

日本は情報戦で弱いのは、近代史から見ればわかるのだがまさかここまでとはね。

確かに俺達は今まで自分の命優先で黙っていたとはいえ、手を重ねた写真がどこで取られたのかさえもわからないのにそれにまんまと乗せられた奴らが騒いでいるようだ。

それに、俺の端末でも確認すると宇宙船の中で撮られたと言っていたが、だったら最初から文明を崩壊するほどの攻撃をするかね。

こちらから奇襲をかけた、などだったら反撃のために仕方ないとしてももう少しまともな交渉の場を持ってもおかしくない、とは思うんだがねえ。

そう思えるのも、俺達が抵抗できる力を有しているからでそれを持つていない奴らからすればいつまで我慢しないといけないのか、という不安から一刻も早く解放されたいのだろう。

だから開示された情報に飛びかかるし、宇宙船に行こうとする奴らが増えるので俺達はすぐに行動に移した。

西side

「ムリだよ……………」

「くそツ、なんで出せねえーんだよツ!!」

「なんかプロテクトが……………ハッキング?あり得ない」

俺は、竜崎が使う巨大なロボットを出せないことに苛立ちを隠せず
にガンツの壁面を殴ったが、それよりも気になる単語が出てきた。

「ハッキングされてる?お前が?」

「あ……………あ!!そうだ!!ヤバい!!」

ガンツの焦った声とともに、敵の兵器がこの部屋に転送されてきた。

竜崎side

「……………おかしいな」

「変な所に転送されたぞ」

一方、俺達が転送された場所は東京でも例の部屋でもない場所、つまりは宇宙船のどこかに飛ばされたようだ。

そして、ついさっきまではすぐに転送されたのに今回の転送に時間が掛かったので、どうやらガンツに何か起きたのだろう。

(クソオ……………こうならないように、ガンツ自身にもハッキング対策の強化と転送時の安全性を伝えて高めたつもりだったのになあ)

俺はそう思いながら、顎に手を当ててこれからどうするかを考えていると岸本とレイカが不安そうに見てきた。

その一方で、裸の人達は俺達が話し合っているのを見て勝手な行動を取り始めて、自分達の家に帰ろうとしているようだ。

正直に言えば、ここがまだ宇宙船内部の可能性が非常に高いので勝手な行動は慎んでもらいたいが、俺達が悪者だと言う風評が出回って

いる以上は強制的に止めることはできない。

そのため、やるべきことが増えたと思っただがそんな中でも眼鏡くんと山下という女性が彼らの説得を試みるようだ。

俺達の話素直に聞くとは思えんが、転送できない状況では少なくともできることをやる方がいいと判断して、2人が去った後で俺達は作戦会議を行った。

「取り敢えず、状況をまとめよう」

「……………」

「どうやらガンツに何かあったらしい。そしてここは奴らの宇宙船の中だから、ガンツが俺達をここに飛ばしたかは怪しい」

「……………」

「もしもこれから戦闘があつた場合、傷の回復はできないし、食事や休憩も難しくなる可能性が高いと思うんだがどうだろうか？」

関根はそう言つて、俺を見てきたので反応を返す。

「ああ、状況からしてガンツの支援は期待しない方がいいな。現状、裸の人達も一緒に転送されたから彼らを援護しながら徒歩で、この宇宙船を脱出しないといけなくなる」

「……………アイツら、別にスルーしてもよくね？」

俺の言葉に、桑原が面倒そうにそう言つたので玄野と加藤が怒りを露わにして他のメンバーも驚きを隠せなかつた。

元々、大阪メンバーは人の生死に冷淡な部分があつて戦い自体も楽しんでる面があるので、玄野達を制しながら桑原に返した。

「確かに、戦力にならない人達を守りながら戦うとくたばる可能性は高くなるだろう。だが奴らに有効なダメージを与えると、この点では一致しているはずだよ？」

「そりゃあ、そうだけだよ……………」

「まあ、俺自身も全員を守れるとは思っていないから自分の命を守ることを最優先にして、それぞれの考えの下で戦えばいいと思うよ」

そう言つと、玄野達は不満げな顔をしたが価値観の違う奴らが利害の一致から一緒に戦っているんだ。

これぐらいが落とし前だと思つているので、当面の目的は脱出経路

を探しながら裸の人達を説得して一緒に行動させることだ。

その結果、俺達は2人が向かった建物に走って行き、出入り口付近で待機していたが一向に来る気配がないので説得は難航しているのだろう。

そのため、加藤が向かう方向でまとまりかけたがそれと同時に、大きな地響きが辺りに響き渡った。

その音を頼りに、辺りを見回すと建物よりも遥かにデカイと推測できる生き物が歩き回っていた。

幸い、そいつは俺達の存在には気づいていないようなのでその場で動かずに見上げていると立ち去っていった。

「行ったぞ……………追うか？」

「いや……………」

「やめといた方がいい。戦う理由がない限り、無駄な消耗は控えるんだ」

「ふーっ」

「ハアツハアツ、ハアツ」

そいつが立ち去った後、俺達は緊張感がマックスの雰囲気から脱して肩の力を抜いた。

あんなデカイのがいるとなると、ここにいる理由が大まかにはあるがわかった気がする。

「ここは……………ガンツが転送した場所じゃ……………ない。俺らは地獄に送り込まれたかもしれない」

「ああ……………」

「とにかく移動しよう。行った2人がどうなっているのかを確かめるんだ」

関根の言葉に、玄野が答えて俺がそう言うところの場にいるメンバーは賛成してくれて行動に移した。

第42話 戦場では想定外が当たり前

「……………おや?」

「おっ」

「だめだーッ」

「もうだめだ!!」

俺達が移動していると、他のガンツメンバーである3人と遭遇したのでそつちに顔を向けると彼らは気になることを発言していた。

「だめだーッ」

「逃げられない!!」

「みんな死ぬ!!」

「……………?」

その不可解な発言に、俺達は近づいてみるとその内の1人は腹が裂けて内臓がはみ出ている上にもう1人は大量出血からか、腕を押さえながら力無く膝を降ろすとへたれ込んでしまった。

そして、最後の1人もガンツスーツの耐久力が限界に達して身体のあちこちから、ゲル状の物体が漏れ出ているので彼らも巨人族と戦っていたのだろう。

とは言え、こんな所に負傷者や戦闘能力が皆無なヤツを放置するのはいかななものか、と思いつつ近づくとその疑問はすぐに解決した。

何故なら、彼らの後ろにあるプールのような正方形の穴の中に大量の裸の人とガンツメンバー、そして自衛隊員の死体が横たわっていたからだ。

遠くの空からみれば、まるでプールの水のように大量にあるので彼らもまた、人命救助のために宇宙船に乗り込んだのだろう。

そして、巨人族との戦いで負けたと言うことか。

「俺らも……………あんた達と同じだ。攫われた人間を救出するために宇宙船の中に入って……………こつちも猛者を集めてきたんだ。でも……………全員やられた」

「うっ……………」

スーツが使い物にならなくなったぞ。自分達が体験してきたことを俺達に伝えるとレイカは口に手を当てたが、あまりの死体の数と損傷具合を見れば吐き気も催すわな。

そして、そいつは話を続ける。

「アイツらの戦力をナメていた……文明のレベルが違いすぎる。俺らは……脆弱すぎた」

「……………」

「どうやってもいい……逃げるんだ……人間を救うとかそんな……甘いこと……言ってる場合じゃ……ない」

「……………」

「奴らにとつては……人間の叡智や歴史なんてクソの価値にもならない。そもそも、敵だとも思っていないのかもしれない」

「……………そうは言ってもなあ、俺達は強制的にここに転送されてきたんだよ」

俺はそう言うと、そいつは驚きの表情を浮かべて反応を返してきた。

「そうか……球までハッキングできるのか……そうか……もうだめだ……もうだめだ」

「俺は関西の2人の所へ行く」

「ああ……俺らも行こう……」

そいつの言葉に、なんとも言えない気持ちになりつつも加藤と玄野がそう言ったが、臆病になったそいつを誰も責めることは出来ない。

何故なら、彼らも巨人族と戦って仲間がくたばっていくのを見て心が折れたからだ。

必死に戦って、抵抗して、もがいた結果が惨敗というのであれば心の1つや2つが折れてもおかしくはない。俺でさえも一旦は頭を冷やしたいぐらいだ。

そのため、俺達は説得するために離れた奴らと合流するために移動しようとして、生き残ったそいつが何かを見つけたようである方向を指さして叫んだ。

「あッ！ 来た!! 来たアア!!」

その方向を見ると、2人の子供とよくわからんヤツが数体いてそいつは、慌てた様子で子供達にこう言った。

「来るな！ 向こうへ行け!! 近づくな!!」

「このこまいごなのー」

「まいごなのー」

子供達の中で、女の子の方が持っている球体の鳥のような生物を見てそいつは慌てふためいているので、恐らくは巨人族が生産した生物なのだろう。

となれば、巨大な怪鳥になるのだろうか。

いや、変化している間に攻撃されれば速攻でお陀仏だろうから身体が弾け飛ぶのだろうか。

「あああああもうだめだ!!」

星人相手でも、前もって渡される情報が役に立たずに手探りで戦っていたなあと思いつながら、見ているとそいつは絶望的な表情になって鳥が弾ける直前のポップコーンのように、急に大きくなって弾け飛んだ。

そして、その身体から光の球が幾つも飛散して俺達に近づいてきたため、そいつは伏せながら俺達にこう言ってきた。

「伏せろッ！ 光に触れるな!!」

「触れるとどうなるんだ!?!」

そいつの言葉に、玄野が質問したが何も答えなかったので仕方なくではあるが伏せて、通り過ぎるのを待ったが光の球の1つが関根の身体に当たってしまった。

そのため、彼の腕に変化が現れて軽いパニック状態になった。

「くッそッ、なんだよこれ!?!」

「関根に光が入っちゃった!! どうすりゃ良い!?!」

「入った!?! 入ったのか!?! じゃあもうダメだ!!」

そいつの言葉に、関根は軽くショックを受けていたが諦めるのにはまだ早いと思ったようで、すぐに切り替えてこう言った。

「もうダメってかよ………被害を最小限人抑える方法はないのかッ!?!」

「球を頭に行かせるな!! とにかく、頭を乗っ取られるな!!」

「吉川!! 俺の腕を切ってくれ!!」

「なっ!？」

彼の言葉に、吉川はかなり驚いたが一刻の猶予もないように驚く吉川を急かした。

「俺の腕! 落としてくれ! 早く!!」

「いいのか!？」

「良いから早く!!」

「だったら肩に近い方を切れ! 手先の方だと残った光が頭に行くかもしれない!!」

関根と吉川のやり取りの間にも、肘から手首の間の腕がブドウのように腫れ物が幾つも膨れあがっていたので自分の力では、頭に行かないようにするのが限界だった。

そのため、吉川は押さえている部分から先を切ろうとしていたので俺がそう言うと、少し迷ったが押さえている部分の上から切り落とした。

その痛みに、関根は悲鳴を上げたが切り落とした腕を投げ捨てると腕は変異を起こして、プラナリアのように頭や腕が生え始めた。

その現象を見て、軽い吐き気を催したがすぐに破壊すれば良いだろうと思つてレイカに合図した。

「止血しましょう!!」

「ちくしょう……腕が……くっそ……」

関根は顔を歪ませながらそう呟いたが、腕を切り落とした後に彼の身体からは異常が見られないことから俺の判断は正しかったようだ。

そして、止血を終えるとよくわからん奴が背中からトンボのような羽を生やして飛び上がったので、敵性勢力と断定して俺達は攻撃を加えた。

倒すと、さつきの変な鳥と同じように光の球が大量に発生させたので、負傷した関根を庇いながら回避することになった。

そして光の球を回避しながら一体ずつ、確実に倒していくと今度は外見は骨だけの奴が複数体出てきた。

そのため、OガトリングガンやLロケランも併用して攻撃していたがダメージらしいダメージが見受けられない。

Zガンやハードスーツのビームでも効果がないようで、そのことで戸惑っている。吉川がガンツソードを持って向かっていった。

ダメージを与えられない奴に、接近戦で立ち向かうのはハイリスクだがそれ以外に方法が見つからないので見守るしかない。

余りの状況に、生き残ったそいつは何かを喚いたので黙らせると吉川はかなり不利な状況に陥った。

なんせ、二刀流なのにその片方を手から離してしまったからだがその瞬間、玄野は叫んだ。

「諦めるな！諦めるなあ!!」

その言葉に、背中を押されたようで敵の攻撃を回避すると首に攻撃を加えると簡単に破壊できた。

その事実がわかると吉川が攻略法を叫んだ。

「首の後ろだ!!ピンポイントで脆い所があるぞ!!」

その情報に、俺達はそいつらに向かって走り始めた。

第43話 危険な賭け

「ふんー！」

「どるうらあ!!」

俺と岡で、奴らの兵器1体を相手にしていたのだが彼らの兵器という要素と、ハードスーツのお陰で接近戦を躊躇ってしまふな。

何故なら、ハードスーツはその巨大さから的になりやすいので注意しながら殴り合っていると、岡が相手の隙をついて脚部にパンチを食らわせてバランスを崩した。

そのため、うつ伏せに倒れこんできたので顔に当たる部分を殴り上げると簡単に頭と胴体が泣き別れした。

呆気なく倒せたので、周囲を確認すると死傷者はゼロの状態でなんとか倒せたようだ。

ちなみに岸本やレイカ、小島の3人と負傷した関根は後方待機だったので問題なかった。

そして、この場にいる敵はいなくなったことと新たな負傷者がいないことを確認してから離れた2人の元へ移動した。

山咲 side

「ハア……………ハア……………」

「もう……………ダメだ……………ハア……………ハア……………」

眼鏡くんがそう言うたけど、たった2人でよくまあここまで持ったなど思った。

だって、ウチらの前には無数の虫みたいなやつとよくわからん生物の残骸、そして光の球に当たって肥大化した裸の人達の死体があるのやから。

やけど私も眼鏡くんも、スーツが使い物にならんほどにダメージを受けたさかいもう戦いたくはあれへん。

今ここで、天井からぶら下がるとるアイツが降り立って襲ってきた

らもう無理や。

戦える気がしいひんと思いながら、天井を見上げとるって巨大な何ぞがウチらの前に降り立った。

「あアツぐうアア!!」

そいつらが敵だと認識した瞬間、眼鏡くんの右足首の辺りが爆発したかのように吹き飛んだので彼が悲鳴をあげると後ろにいた裸の人達も絶望的な悲鳴をあげた。

こないな奴らに、スーツがダメになった私1人で立ち向かえるはずもないと諦めて、惚れてもた人の顔を思い浮かべながら思った。

(さよなら……………加藤君……………)

そう思った瞬間、そいつらの1体が爆発した。

竜崎 side

「ビームは効いてねえようだな!」

「だけど刀の攻撃は通るようだ!」

「向こうの攻撃は全てかわせ!触れるとスーツごと持ってかれるぞ!」

俺達はそう言い合いながら、大阪チームの2人と裸の人達を守るようにそれぞれの武器を構えた。

既に、ハードスーツの防御力ですらも彼らの前では怪しいので攻撃を受けないように立ち回って、攻撃を加えるしかない。

幸い、俺以外にもチートじみた奴らが集まっているので1人辺り、1体を倒していけば問題はないので確実に倒して行こう。

こうして、俺達は目の前の強敵と戦い始めた。

和泉 side

一方、ガンツがあつた部屋を強襲された和泉はタケシと共に2人で

歩いていた。

原作に置いて、安全地帯と判断された部屋に残されたタケシは西についてきていたがこの世界では、吸血鬼との戦いで生き残った和泉の方が安全と判断して彼に付いていった。

和泉が何故、例の部屋にいたかというところカラストロファイが発生してから緊張の糸を緩めなかったもので、襲撃を受ける前から仮眠を取っていたのだ。

竜崎達もまた、無理をしてくたばったりしたら大変だと言うことで休ませていたが襲撃を受けた、と言うことでスーツがダメになったタケシと共に脱出していた。

そして、子供用の服がある店に立ち寄ってタケシの体格にある服を適当に見繕って着させてから、ある広場に近い建物に入り込むとハツキング行為をした。

「何してるの?」

「君には悪いが俺も宇宙船に乗り込んで戦いに行くんだ。だからこつから先は一人で行動するんだ」

「とーちゃんを助けに行くの?」

「……………間接的にはそうなるな。だからまあ、辛いだろうけど待っていて欲しい」

「わかった、待ってる」

幼い子供を置いて戦場に向かう。

竜崎に救われた命で彼女のために生き、将来のことも考えて戦っていた和泉は心苦しい感じがした。

オツサン面の風と、彼を父親として慕うタケシとの絆が自分と彼女と将来、生まれてくる子供達の背中が重なったからだ。

だからこそ、このクソツタレな状況を一刻でも早く変えたいと思ってハツキングに成功すると、既に財団のトップが操る巨大なロボットと巨人族との戦いが始まっていた。

そのため、あるコマンドを押して和泉もまた転送していった。

「どーするよ、リーダー」

「リーダーって柄じゃねーんだが」

「……………」

吉川の問いにそう答えたが、この場は異様な緊張感に包まれているのがわかる。

何故なら俺達は大阪チームの2人を救い出し、敵を殲滅した後であれだけの戦いの中でも地面に降り立たなかった敵を見上げていた。

そいつは今でも、ぶらぶらと天井から垂れ下がっているだけなのに不気味さを醸し出していた。

「全員で一斉に……………撃つてくれ」

「……………!?!」

外にも敵がいるし、どうするかなあと思っていると玄野がXショットガンをそいつに構えてから、そう言ったので俺は反対した。

「いやいやいや、全員がまとまっている以上は反撃に遭って一斉にやられる可能性が高いぞ」

「それでもやらないとダメだ!」

「このまま、全員で逃げよう。その方が良い」

「ダメだ!! こいつを今やっとかないと!! いずれこいつに全滅にされる!!」

「……………」

俺や武田の言葉に、玄野は強く反対した。

なんでここまで、必死になっているかはわからないが少なくとも強敵が近くにいる以上は、出来る範囲でリスクを減らすのも一手だな。

そのため、玄野の意思と周囲の及び腰との折衷案を提示した。

「なら、天井にぶら下がっているヤツを倒すチームと外に向かうチームに分けた方が良い。そうすれば無駄に死なせずに対処はできるはずだ」

「わかった。今の内に出てくれ。俺1人でも大丈夫だ」

「だったら私も残るわ。計ちゃんと一緒に生きたいし、一緒に死にた

いから」

すると、玄野や他のメンバーも了承してくれて小島は彼と一緒に戦うという選択を取った。

恋する女は強い、とどつかで聞いたことがあるんだがいつどこで聞いたのかは忘れた。

とは言え、彼らだけにして死なれたら後味が悪いので残って戦うことにした。言いだしたのは俺でもあるんだし。

しかし、俺が残ると決めたら岸本とレイカまで残ると宣言したのでこの5人以外のメンバーは、外に出て裸の人達と共に脱出路を探すことになった。

そして、彼らが立ち去ると俺達は作戦を練った。

「アイツの情報が無いから手探りではあるが、誰かが囷になって敵を引きつける必要がある」

「そうね。5人揃って真っ正面から戦うのはバカ正直すぎるわ」

「でもXショットガンでダメージが通るかが疑問ですね」

「だったら俺が囷になる。その間に奇襲を掛けてくれ」

「奇襲を掛ける側はヒット&アウエー……つまり、一撃離脱をすることが理想ね」

「何はともあれ、ヤツに攻撃させる暇を与えなければ良い。玄野には負担を掛けるが大丈夫か？」

俺の発言に小島は不安げに答えたが岸本やレイカ、玄野は平気そうだったので一旦は彼を残してバラバラに散った後で攻撃の準備に入る。

そして、玄野のXショットガン2丁の攻撃を合図に俺達も攻撃を開始してダメージを与えていく。

まず、玄野の攻撃でぶら下がっていたヤツを地面に落として立ち上がるのと同時に、俺が肘の刀でヤツの機動力を削ぐ。

片足の足首から下を切り落としたことで、片膝をついたのでその隙に岸本とレイカのZガンで再び地面に押しつぶしてから玄野と小島のXショットガンが追い撃ちを掛ける。

すると、攻撃を受けていたそいつは掌を玄野に見せるように挙げる

と、見えない力で玄野が数メートルも吹っ飛んだ。

どうやら、念力の様な力を使うようなので岸本達に仰向けで倒させるように伝えると、ハードスーツを脱ぎ捨てて落ちていたガンツソードを拾い上げた。

何がしたいかというこのまま、チマチマと攻撃を加えても次々に落伍していくのは明白なので防御力を捨てても、一発逆転の奇襲レベルでの攻撃を加えるしかない。

そのため、XショットガンやZガンでヤツの攻撃を引きつけて手押しを切り落としていき、最後にはアイツの眉間の部分にガンツソードをぶっ刺したのだ。

そもそも人間というものは、脳の下に脳幹というものがあって生命活動の全てを担っている重要な器官である。

ここを破壊されると、まるでスイッチを切ったかのように活動をやめてしまうので俺達が攻撃を加えたコイツも脳幹があるのではないかと思っただからだ。

脳みそや心臓を狙う、という手段もあったがそもそもコイツの頭は身体の中に埋め込まれているので正面からしか狙えないし、心臓に至ってはどこにあるのかさえもわからない。

最悪、ミミズみたいに関臓が幾つもあるようだとこっちの命が幾つあっても足りない。

その分、脳幹というのは脳みその下にあることが多いようなので人の顔を持つコイツも、人間と同じように眉間の奥にあるのではないかと推測したのだ。

そして、俺の賭けは成功して眉間の奥深くまで差し込むとそいつはぼったりと倒れてからそれ以降、ピクリとも動かなくなった。

そのため、俺は深いため息と共に仰向けで倒れたそいつから降りると、岸本とレイカから盛大に殴られた。

どうやら、彼女達からすれば危険な賭けだったことに対してかなり怒っていたため、俺は謝り倒しつても玄野の元へと向かった。

今回の戦いは、20分程度で済んだのだがこの戦いで1番ダメージを受けたのは玄野なので、彼の様子やスーツを見てみるとかなり危な

かった。

まず、鼻血が出ているのは良いとしてスーツのダメージ蓄積量になり溜まっただけでもう一回、攻撃を食らえばお釈迦になっていたのだ。

そのため、玄野には前線に出ないように要注意しながら加藤達と合流を図った。

第44話 決別

加藤 side

「よし！ 倒せる。倒せるぞ！」

「もうちよいだ！もうちよい！」

「そっちに行つたぞー！」

竜崎達と別行動を取り、建物から出た瞬間に大阪チームを探しに行つた時に遭遇した相手と鉢合わせになつた。

そいつは足が4対8本、顔が2つの巨大で異様な生物だったが幸いにも動きが遅い上に歴戦の猛者が多数、このチームに加わっていたのでモ〇ハンで猛獣を狩っている感じになつていた。

ゲーム自体は持つていながつたが、学校でやっているヤツのを見せてもらつたからある程度の戦い方は知つていたが、大阪チームの奴らなんかは完全に楽しみながら戦つていた。

ミサイルやガトリングガンでヤツの気を引き、Zガンでダメージを与え、力に自信があるヤツはアイツの頭を破壊しようと行動に出た結果、誰一人として死傷者を出さずに済んだ。

と言つても、関根や眼鏡君は既に手足に傷を負つて戦えない状態なので遠くから眺めているだけではあつたが、それでもチーム内から死人が出てないのは大きい。

これは矢沢さんも言つていたが、よくまあこれだけの猛者が集まつたと思つたよ。

「よし、いったあ!!」

そして、俺達の攻撃でついに異形のそいつが倒れ込んで動かなくなつたので肩の力が抜けた。

そのことを確認した裸の人達は、安堵の歓声を上げて山咲さんが抱き着いてきたが彼女の様子を見る限りではどうやら無事なようだ。

とは言え、自由に転送できなくなつた不安がにじみ出てきているし、風なんかはタケシとの写真を見ているから早く脱出したいところだな。

「お〜い！ 無事なようだな!!」

俺が周囲を見ていると、よく知った声が聞こえてきた。

和泉 side

「自由に動ける……となるとやるべきことは……」

俺は巨大なロボを操縦するため、そいつの中枢であるハードスーツに転移してコントロールされているように行動していたが、ある時から自動行進が止まった。

そこから考えられるのは、巨大ロボの軍団をコントロールしていた財団の奴らの本拠地が襲撃され、彼らごと木っ端微塵に粉碎されたと言ふことだろう。

となれば、やることはいくつかある。

このまま、巨人族の住処を崩壊させるためにあの垂直に伸びた塔を破壊するか、もしくは撤退させるだけの猶予を与えるかだ。

以前の俺だったら、吸血鬼共に襲撃される前だったら前者を選んでいたんだろうが襲撃後に篠崎とデートをしていくと、その考えもどうなのかと思うようになった。

確かに、スリルを味わいたいのは確かだがだからといって俺がくたばることで、彼女を悲しませるのも気が引けてきたのだ。

そして何より、巨人族も屈強な兵士だけではないのはこの宇宙船を見てきたからわかる。

だからこそ、無駄死にを避けて平和的な解決法もあるのではないかと思うのだ。

その思いから、俺はハードスーツを着たままで飛行ユニットを扱って空を飛ぶと、塔の近くにいる巨大ロボに向かって飛んでいった。

「もうちょいッだッ！ ……!?!」

「ふん!!」

塔の近くにいた巨大ロボに乗り込み、コックピットで操作していた

そいつを殴り飛ばすとコックピットから盛大に吹き飛んだ。

そして、互いの姿を確認した後でそいつが来ているハードスーツの顔の部分が割れて、操縦者の顔がわかるようになった。

「なんツだ……くツそッ！」

「西か……」

「和泉!? てめえ……和泉、てめえ！」

悪態をつきながら立ち上がった西は、俺と向き合う形で歩み寄ってきたので語りかける。

「西、もう充分だろう? ここは撤退しろ」

「ハッ、なんなんだよおまえ……」

「奴らもかなりのダメージを受けているはずだ。だから他の道もあると思うんだが?」

「変わったな、おまえ……」

西は呆れた様子でそう言ったが、互いの意見は平行線を辿っただけだったので自分の意志を貫くなら相手と殴り合っけ言うことを聞かせるしかない。

そのため、俺達は敵陣のど真ん中で殴り合うこととなった。

ブン! ブン!

ガキン! ガン!

とは言え、竜崎ほどではないといっても身体を使った戦いにも慣れている俺と、ずる賢く立ち回っているだけだった西との戦闘経験の差は断崖絶壁ほどに開いていた。

ハードスーツのスペックは高いが、彼はそれを便りに戦っているよなので同じスペックに戦闘技術を上乗せした俺のペースに圧倒されている。

その結果、顔面を盛大に殴られた西は数メートルは吹き飛んででんぐり返しをした後で、壁にぶつかると倒れ込んだ。

「なんなの、おまえ? 何がしたいの?」

「おまえこそ、何がしたいんだよ」

「おまえをぶつ殺してこの世の最高権力者になんだよ!!」

西の問いに、俺が平然と聞き直すと彼はそう叫んだ。

はあ、こんなクソガキと手を結んでいたとはな。自分の浅はかさに呆れる。

この塔を破壊したところで権力を得るのは元々、権力者だったヤツか上手く立ち回ったヤツぐらいだ。

竜崎は上手く立ち回っているが、権力自体にはあまり興味がなさそうなのでアイツが権力者になった、て聞いたら嘔き出すな。絶対に。

その分、アイツは自分の得手不得手を弁えている様子だったのでこの戦いが終わったら、自分の気が向くままに生きていきそうだ。

だが西は、子供が夢から覚めるのを嫌がるように権力というものに幻想を抱いている。

自分が偉くなれば。自分が人の上に立てば。

そんなことを捲し立てるコイツは、ここで見逃してもいつかきつと同じことを繰り返えると思うから、ここで殺しても問題はないだろう。

そのため、俺は右手を西に構えるとエネルギーをチャージしてから撃ち放った。

すると、西のハードスーツは胴体が破壊されて腕は肩の部分が崩壊したので只の置物になり、足の部分は単なる脛当て同然となった。

もっと出力を上げれば、コイツを殺すことも出来たがコイツのための罪の意識を持つ必要も無いので、生殺与奪の権利は巨人族に渡してやろう。

そう思いつつ、俺は飛行ユニットに目を向けるとビームの衝撃で意識を失いかけていた西が、俺のやろうとしていることに気が付いたようで声を掛けてきた。

「なにを……………する気だ……………」

「……………」

「俺が死んだら、誰が転送すんだよ」

「……………」

「聞いてんのか!? オイ和泉!」

転送ねえ。そんなもんがなくてもなんとかなるし、そのための飛行ユニットだろ。

そのため、両手にエネルギーを溜めて発射すると俺が乗ってきた飛行ユニットが吹き飛んで、残ったのは西が扱っていた飛行ユニットだけになった。

そして、自然の流れでそれに跨がると俺は地上に向けて飛び立った。

その後ろで、西が何かを叫んでいるが知ったこっちゃないな。運がよければ地上で再会するだろ。

そんな訳で、俺と西との戦いはここで終わりとなってめでたしめでたし、となればよかったんだが物事はそう上手く行っていないように、地上に降り立つ際にちよつとした苦労があった。

何故なら、宇宙船が宇宙へ向けて飛び立ったように俺が出口に到着した時には、宇宙から見た蒼い地球が見えたのだ。

ガガーリンだったかが言っていたが、地球は青いんやなと心のどこかで思いながら息苦しさで顔をしかめつつ、地表に向かって急降下しているというやく地球に辿り着いた、という実感が持てる高度まで達した。

そして、俺が地表に降り立つと周囲にいた人間達が俺のことをテロリスト扱いしてきたので、撃ち返そうかと思っただがそれまで止まっていた公共テレビが映りだした。

その後、ナレーターと思われる男性が今までの巨人族の映像はプロパガンダであり、俺達ガンツチームこそが最後の頼みの綱だと主張した。

竜崎 side

「ケータイだ!」

「携帯?! ……そうか、死んだ奴が持つてるかもな」

「ケータイ探しか……通じんのかオイ」

「やらないよかマシだと思うぞ。探そう！」

和泉がそんなことをしているとは露にも思わず、俺達は途方に暮れていると加藤が思ったことを言ったので俺もそれに賛同して携帯探しとしゃれ込んだ。

彼は飛行ユニットで脱出できたが、その一方で俺達には足となる乗り物がないので徒歩での移動となって、延々と歩き続けられないといけないかと思っていたのだ。

そのため、あつちこつちに散らばって探していくといくつかの生きている携帯があつて、見てみると電波もかろうじて通っているようだ。

それを見た俺達は、頼みの綱として片っ端から掛けていったが誰も電話を取らないまま、全ての携帯が圏外となってしまった。

そのことに落胆しつつ、歩いていればどこかの出口に辿り着けるだろうという考えで移動を開始した。

そうしていると、足をやられて矢沢さんに背負ってもらっている眼鏡君が持っていた携帯に、電話がつながったようで少しのやり取りをしてから俺に渡してきた。

「戦争が終わるのか？ どーなってる!？」

「こつちは九州のチームで斉藤って言います」

俺は期待を込めて会話をすると、どうやら世界中のガンツチームが敵の母艦に集まっているようで、アメリカのチームが追い込みを掛けているようだ。

どうやら、セバスがやってくれたようだと思いつつ必要な情報を聞くとチーム内で共有した。

「どーやら、アメリカのチームが向こうの母艦で勝ち掛けているようだ。俺は現場に行くつもりだが強制はしない。地上に降りたいヤツは申し出てくれ」

「ああ、いくぜ」

「俺も行くが、迷っている奴はいるんじゃないか？」

前島や岡を中心とした大阪メンバーは、行くつもりらしいが加藤や

風は迷っている様子だった。

まあ、頼りにしてくれる人を持っている奴らからすればその人達が心配なのは、十二分にわかっているのではらく待っていると加藤達は母船に行くことを決意した。

そのため、スーツ組は母船に向かって裸の人達は地上の安全な場所に転送してもらうことにした。

その方が効率的だし、言い方は悪いが彼らはお荷物になっていたのなるべく身軽で行きたいのが本音だった。

そして俺らは、始めて敵の母船へと乗り込んだのだ。

第45話 事実

「ここは……………」

「宇宙、かよ……………」

「母船の中ってマジだったのかよ」

「すげえな、壁や天井が映像だって言われても信じてしまいそうだ」

俺達が転送されてきたのは、壁の向こう側が真空の宇宙空間で近くには武装解除された巨人族が手を頭の後ろに回しているのが確認できる。

そして、壁にはある程度の大きさで光っている地球が見えることから月と地球の間に母船がある、と言うことも事実のようだ。

そのことに驚いている俺達を尻目に、電話をしてきた斉藤という人物が声を掛けてきた。

「あつちでアメリカが最後の戦闘をやってます！」

彼の指さす方向には、多くの巨人が武装解除されていて他のガンツメンバーもそつちに移動しているようだったので、そのことを確認した俺達に彼はさらに話を続けた、

「ここに来たのは意味があるんです。驚きますよ、きっと」

「意味？」

彼の言葉に首を傾げつつ、移動を開始しようとしてあることに気が付いた。

「……………ってあれ？ 関根、腕が生えてね？」

「？ って、うわっ！」

応急処置を受けた関根は、出血で顔を青白くしていたが転送されてから血色がよくなったので腕を見ると切り捨てた腕が元通りに戻っていた。

そのことに、彼はかなり驚いていたがいつも通りの生活を送ることが出来ると安堵して、足を失った眼鏡君も元通りになっていたことから自分で歩くことにした。

そのため、俺達がそれぞれの足で移動していくとまあお国柄がよく反映されている光景に出会った。

互いに抱き合って快樂に溺れる者、日本では禁止されている薬を吸っている者、酒に溺れる者。

そして、普段の日本ではまずお目にかかれない光景も巨大な通路にはあった。

それは複数の男性が、裸にした巨人族の女性を背景に写真を撮ることや巨人族の性交を見世物のように楽しむ人達、何よりも巨人族の女性相手にやり出す強者までいて加藤達には刺激が強すぎなども思った。

そしたら案の定、前嶋が先陣を切ってそいつらを殴りに行ったので大阪メンバーを除く、男性陣が殴り飛ばしていた。

「そんなことやってる場合じゃないです!!」

とは言え、斉藤は彼らを止めるかのようにそう怒鳴って駆け出すと俺達もついていき、それを確認した彼はこう言った。

「あんなこと、戦場では日常茶飯事なんですよ！ あのイギリス人達を殴ったって何にもなりませんよ!!」

駆け出した俺達に、イギリス人達が何かを言ってきたが俺には関係ないわなと思つて無視していたが、加藤や前嶋と言つたメンバーは怒りの表情でやりきれない感じだった。

その後、矢沢さんが前嶋と話し合つていたがどうやら前嶋自身が童貞らしい。

眼鏡君もそうだとはわかつていたが、それに対して武田や吉川から突っ込まれていた。

俺も、ほんの数ヶ月前まで童貞だったが岸本達とやりまくつたせいでとつくに捨てているので、彼女を作るのが面倒だったら風俗嬢とやれば良いんじゃないですかね。性病になつたら面倒だが。

その傍らでは、メアリーが風と会話してどうやら武道一辺倒の風と共通点を見つけたらしい。

まあ、彼女も格闘家として生きていたようなのでお似合いのカップルだな。いや、タケシも生きていたら良い感じの家族になりそうだ。

そんな訳で、俺達は通路を抜けてある場所に向かうとそこにはガンツが鎮座していて、外国人が声を掛けてきた。

そのため、俺がある程度の会話をするとどこかに転送されて宇宙の真理がわかるらしい。

宇宙の真理と聞くと、途端に胡散臭くなるのだが何はともあれ、行くことにした。何事も体験するのが一番良いからな。

そして、俺達は真っ白な空間へと転送された。

「なんだ、ここは……………」

白い空間、というよりは出口のない白い部屋に飛ばされたようだ。

その中心には、巨大な二体の像の様なものが手を広げて立っていて周囲にいた海外のガンツメンバーが、次々にその像へ質問を投げかけていた。

それを見ていた俺達は、急に視界が歪んだかと思ったたら目から涙が出るのを感じて手を当ててみると、涙が赤くなつて流れていた。

そのため、加藤達も同じような涙を流していたので菊地さんが声を掛けてきた。

「菊地さん、無事だったか。あの黒い球が作られている工場の写真を見た時は驚いたよ」

「竜崎くんも無事でよかった。まあ、吸血鬼を返り討ちにした時からそう簡単に死なないとは思っていたよ」

互いに無事なことを確認すると、加藤が赤い涙のことを菊地さんに聞いたが彼もわからないようでかれこれ30分はここにいららしい。

このことをカメラに収めようとしたらしいが、録画ボタンを押してもカメラ自体は動くが記録に残らないようで無用の長物となっている。

それと、この部屋がどういった部屋なのかを聞くと真理の部屋だという。

俺が想像していたのは、ただっ広い空間と目の前に巨大な扉がある某錬金術師の空間をだったのだがここでは全く違うらしいな。

そんなことは今はどうでもよくて、俺達が聞きたいということを書いてみたが日本語もわかるようで流暢な返事と共に今までの経緯を説明してくれた。

ある惑星系、太陽のような恒星の周りを幾つもの惑星が公転している星々が消滅の危機に遭ったため、30年前から移住先に地球が選ばれて移住が始まったらしい。

今までに戦ってきた星人は、その移民達であって巨人族はその中でも最も強力な種族で、文明も戦力も地球よりも遥かに上だとのこと。

俺達は移民達のカウンターとして生み出された訳だが、そのきっかけになったのは真理の部屋にいる巨大な像が属する種族が地球に情報を送ったとのことだった。

理由は、巨人属は彼らのいる惑星群に強襲を掛けたが撃退されて次に選ばれたのが地球だったため、巨人属を撃退できる最低限の軍事技術を信号として送ったらしい。

そして、その信号がドイツの富豪の娘がキャッチしてガンツを量産して世界中に設置した。より資産を増やせると信じていたからこそその行動だったらしい。

まあ、ゲームや採点自体は地球の方で勝手に変換しただけで特に何もしてないとのことだったし、球の中にいる人間は地球人の複製らしいので本当に軍事技術だけを送ってきた感じではある。

そのため、加藤も含めたガンツメンバーから感謝の言葉が上がったが像は特に気にしない感じで、それらを一蹴すると次のようなことを言った。

「傲慢な人類よ。君達は、地球上で特別な存在だと思っているがそうではない」

「……………」

「私達が残す選択をしたのは地球そのもののある程度の秩序であり、君達人類を救うためではない」

「!？」

その言葉に、加藤達は啞然としていたが俺は思い当たる節がある。

それはこの世界、星人と戦う世界に転生する時に見た担当官の目

だった。

彼らは、本当に気怠げに俺達を見て事務的に流していったので神と自称する彼らからすれば、俺達は蚊なんかの小さな昆虫でしかない。それからは、神という都合の良いものは存在しないというのが持論だ。

そして、その像はこう言った。

「君達の存在は、我々からすれば極微小な昆虫と変わらない。君達が例え、何百何千万単位で死んでも私達から見れば大したことはない。君は子供の頃、庭のホースで蟻塚の蟻を大量に殺しただろう？」

「……………」

「蟻の命と人間の命は重さが違うと人間は思っている。我々からすればとても傲慢な考え方だ」

「……………」

「そして、君達が継る神などというものは存在しない。人間の命はチリやゴミと何ら変わらない」

「……………!!」

あーあ、言い切りやがった。

確かに彼ら、超文明の異星人からすれば俺達は塵芥の存在なのだろう。地球の歴史で言えば、大航海時代のヨーロッパの人達が黒人を人ではなく、動物を売り買いするかののような感覚かな。

当時のことを直接、見聞きした訳じゃないからわからないけど少なくとも同じような感じで、俺達を見ているのだろう。

その事実を包み隠さず、ただ淡々と告げられたことに加藤達は動揺することになった。

第46話 死んだ先は……………

「——では……………わかりやすく見せてやろう。人間は只のモノに過ぎないことを」

「!?」

超高度異星種族の発言に、加藤達は反論したのもそれでも彼らの考えは変わらないようでそう言うのと同時に、目のまで何も無い空間に物体が固まり始めた。

そして、徐々に物体が大きくなっていくと心臓になってそれが人間の形になると、既にくたばった奴らが全裸の状態で再生された。

鈴木さんや桜丘だったかの女性、坂田や東郷さんの4人だ。

「……………? 竜崎、おまえが再生したのか?」

「状況はかなり複雑になってね。一言で言えないんだが……………」

「竜崎、ここはどこだ?」

「真理の部屋だ。俺達が戦ってきた理由がわかるんだが……………」

鈴木さんや桜丘は玄野と会話をし、坂田や東郷さんは冷静に状況を分析しようとして俺に話しかけてきた。

そのため、ある程度の会話が進んだところで俺達を戦わせたそういうことがあることをいった。

『証明しよう。人間が只のモノであることを』

「!? ハッ、いやだ。いやだ……………やめろお!!」

「やめてくれ!!」

「オイオイマジか。ここでやる気かよ」

そいつらがやろうとしていることを、玄野達は悟ってやめるように嘆願したが気にする素振りを全く見せず、鈴木さん達の身体は徐々に崩壊していった。

そのため、俺は坂田と東郷さんにこう言った。

「坂田! 東郷さん!」

「!?」

「ああ!」

「来世で会おう!」

「わかった！」

彼らの返事を聞いた瞬間、身体全てが崩壊して彼らのいた場所は血溜まりといくつかの内臓と骨が残るだけになった。

そのことに、加藤達は泣き叫んだが当の俺はここで特攻を仕掛けてくたばろうとは思わない。

巨人族のカウンターとして、生産した俺達の武器は彼らにとっては取るに足らない武器であり、巨大ロボを転送してヤツに殴りかかっても逆に崩壊させられるだろう。

だからここは一旦、悔しさを胸に引き下がるしかない。地球上の軍隊が、巨人族の武器に勝てないのと同じだからだ。

そのことを実感して、歯を食いしばったが玄野はそこまで我慢強くなかったようだ。

超高度異星種族に向かって走り出したので、俺はハードスーツの腕を使って叩き潰すかのように彼を倒して動けなくした。

そして、俺はあることを聞いた。

「人間は本当に只の物質でしかないのか!? ここで再生された奴らやこの場にいるメンバー、そして全ての人間には魂というモノは存在しないのか!？」

「……………人間が死ぬ時に約21グラムの情報が分離し、異次元に移動する情報のことか?」

魂という言葉に、そいつは眉をひそめながら答えた。

「どうやら、地球上で魂と呼ばれているものは彼らからすれば情報の固まりでしかないようだ。」

そのことから、俺はその情報の行き先が気になって尋ねた。

「今ここで散っていった奴らの魂、その約21グラムの情報はこれからどうなるんだ?」

「それぞれ、この次元の別の個体へと入り、またその個体が消滅すると異次元へと移動する」

「……………」

「坂田研三は2ヶ月後、ロシアの男性の個体として生まれ、東郷十三はフランスの男性として半年後に生まれる。桜丘聖は20年後にその

フランス男性の元で生まれ、鈴木良一は同じ年にロシア男性の元で生まれてこの次元で関係のあったモノは永遠に関係が続いていく」

「どうやら、輪廻転生みたいなことがこれからも続いていくということだろう。」

それがわかれば、俺達の気持ちも少しは晴れるというものだ。

そして、全ての質疑応答が終わったようなので彼らは最後にこう言った。

「これを持って、すべてを終了する。この先、我々は地球人に干渉することはないだろう」

その言葉と共に、まばゆい光が溢れて目を閉じて開くとそこは巨人族の建物の中だった。

また、俺達を転送してくれた奴らが操作できないことを言っているようだが、日本に転送してもらおうように頼んでみるか。

『あー、ちよつと良いか?』

『?』

『俺達を日本の東京に転送してもらえないだろうか』

『コイツなら無理だぜ。中に入っていた男が死んじまつてさ』

『死んだ!? 本当か!?!』

その言葉に、加藤達も驚いているようなのだがこの辺りのガンツが機能停止しているようだった。

そのため、俺達は移動してガンツを見かけたら転送してもらえるかを聞いて回ったが、そのどれもがダメになっているようだった。

その事実が俺達に重くのしかかり、あんなに近くに見えているのに帰れないと言う絶望が、俺達を支配し始めていた。

それに、海外のメンバーは巨人族に聞き出そうとして言い争いになっていた。

しかし、そんな中でも1つの光明が見えた。

「どうやら、アメリカチームのガンツが生きているようだ。」

その情報を元に、他のガンツメンバーと共に生きていられると言われている場所に向かうと、大勢が同じ方向に向かおうとしているのがわかる。

そして、その場所に向かうと巨人族とガンツのチームが決闘形式で既に闘っていた。

そいつらの周囲を確認すると、ガンツは1個だけが稼働しているようで行列が既に出来上がっていて、俺達は最後尾に並ぶことになった。

とは言え、巨人族の兵士と思われる奴らの数は10人にも満たないようなので、もう少しで人類の勝利が確定する。

それと同時に、取材用のカメラを持った男性がその光景を映像にして地球に流し、菊地さんが説明を記者のように加えていった。

巨人族は追い詰められているとは言え、人類が思いつかないような装備を隠し持っているので一発逆転される可能性もあるが、俺達もそれなりの数が集まっているので彼らが勝てる見込みは少ない。

そう思っていると、決闘をしている巨人が手首を操作して本来の四肢では出来ない方角から、アメリカカチームに向かってパンチを入れた。

そして、それが少し続いたがアメリカカチームのヤツはノーダメで回避して逆に、その攻撃網を潜り抜けて巨人を裁ききった。

その後も、海外チームが順調に巨人族を殺していき、次で俺達の番になるところでガンツを操っているメンバーから声を掛けられた。

『君はモンゴル人のようだな。モンゴルに転送してやろう』

「あ……………あ……………あ？」

『違う違う！ 東京だ。日本の東京に転送してくれ！』

『そーか、そーか!! あんたら日本人なんだな、分かッた……………つてリニューザキ!』

『久し振りだな、セバス。調子はどうだ?』

『相変わらずさ。俺達のチームを見てくれよ』

『確かに精強に見え……………うおっ!』

セバスとの偶然の再会に、話が弾んだが決闘の余波は俺達の所まで来た。

そのため、ガンツが吹っ飛んだが幸いにもセバス達は無傷だし、ガンツも無事なようだ。

それを確認して、設置し直している背後では巨人族がまた1体、撃破されたように残る兵士は2体となったがその内の1体は、俺との決着を付け損ねた巨人だ。

そいつがもう片方を押しつけて、決闘の場に出たのだがそれまでタイマンで巨人を駆逐していたアメリカチームを圧倒する強さを見せた。

第47話 決闘とその結果

『アアアアアアアア!!』

『なんてヤツだ!! 動きが完全に理屈を超えてやがる!!』

『ぎゃあああああ!!』

俺が一戦交えたそいつ、金髪ロングの兵士は精強だったアメリカのチームを圧倒して、既に3人ほどを汚いミンチに変えた。

何で圧倒しているのか、と言えば一見するとスピードのような気がするが戦闘スキルも尋常じゃないぐらいに高い。

何度か、巨人族の広告で見かけたがそれ程までに強いということなのだろう。

それを見たアメリカチームは、ワンツーマンで挑まずに全員で挑むことにしたが結果は散々たるもので、集団リンチをしようとした彼らは逆に全滅してしまった。

そして、彼らの死体の中でも頭部だけが無事に残ったヤツをつまみ出すと、それをマイク代わりにこう言ってきた。

『俺と闘ったヤツは出て来い……………』

彼の要求はこうだ。

自分達は負けたから、彼と戦って負けるか来ない場合は自爆させる。勝てば生殺与奪の権利を渡すがあまり期待しない方が良く、言うものだ。

正直に言えばこのまま、名乗らなくても良いかなとも思ったのだが帰るべき故郷がないのはあまりにも寂しすぎる。

そのため、並んでいた列の中で手を挙げて顔が見えるようにハードスーツの面を開いて、彼からも直に見えるようにした。

すると、彼は目を細めて摘まんでいた物体を投げ捨てたので俺も歩みを進めて、彼の正面に立つと面を閉じて息を整える。

こういった決闘は初めてだし、オ二星人やぬらりひよん時なんかはチームで当たったし、作戦なんかを考えればなんとかなる相手だっ

た。

だが今回の相手、巨人族の中でもトップクラスの兵士ともなれば体格差や兵器以上に、戦闘スキルが重要になってくる。

その事実が鼓動を早め、冷静さを失わせる要因になるのだが何も変わったことをする訳でもない。

普段通り、敵を攻撃して殲滅していくだけの簡単な作業だ。それ以上でもそれ以下でもない。

そう思っただけで何回か、深呼吸をしてからこう呟いた。

「ふー、行くぞ」

俺がそう言うと、戦闘の突端が開いて互いの闘志を乗せた殴り合いが始まった。

殴り合いといっても、体格差が絶望的に開いているので彼の踏みつぶしやトンファーのような武器に対して、ハードスーツのパンチで返しているのだがガンツソードの方が良かったかな。

ガンツソードだったら長さ調整が出来るし、重くなった分をスーツのパワーで補えば良いからそっちの方がやりやすい。

そのため、1回は蹴り飛ばされてハードスーツをダメにした方が良いなど思っていると、勢いよく蹴りが胴体に入ったので吹き飛ばされて柱に当たった。

すると、すぐに故障したようで面の内側に移っていた画像が大きく乱れ始めた。

とは言え、その下にあるスーツにまではダメージが通っていないよ。うなので足から着地すると、ハードスーツを脱ぎ捨てると走り込んで近くにあったガンツソードを拾い上げた。

それを確認した彼は、ニヤリと口角を上げるとスピードアップして俺を翻弄しようとした。

普通だったなら、動きを止めて様子を見るんだがこの程度のスピードなら、スピードアップの装備があるので問題ない。

俺はそれを使うのと同時に、ガンツソードをかなりの長さまで伸ばしてそいつと戦うことにした。

すると、そいつは楽しそうに笑って斬り合いに応じてくれた。

種族の違いによる体格差は別にして、自分と同等の領域に到達していることが嬉しくて仕方ないのだろう。

しかし、時間というものは残酷で俺からすれば5分、周囲の間では30秒という短い時間のスピードアップはすぐに終わりを迎えて、身体が徐々に遅くなっていくのを実感した。

そして、完全に元の世界に戻ってくると互いに息を荒くしながらも対峙していたが数秒間、向き合ってからさらに斬り合いに興じていく。

(剣で戦うのがここまで楽しいとはね！)

(フツ、私と対等に戦えるヤツと出会えて人生の最後にいい出会いがあったものだ！)

俺がそう思うと、彼もそう答えてくれた気がしてこの時間が延々と続けば良いのにとさえ、思い始めてしまった。

ここまで気が合い、互いの命を賭けて戦うのは竜崎誠という人生に置いて二度と無いのかもしれない、と思うぐらいに充実している。

だが互いに譲れないものがあり、何にも縛られず、誰かのためにという目的も無しにただ戦う高揚感、体格差というものでいとも簡単に塗り替えられてしまう。

俺がそいつを真つ二つにしてやろうと居合の振り下した瞬間、そいつはしやがみ込むと俺に向けて蹴りをいれた。

当然、回避行動を取っていなかったためにその蹴りをマトモに受けて10メートル以上、吹き飛んだがすぐに起き上がると必殺の踏みつけが既に来ていた。

回避しきれねえ、と思いながら横に転がると入れ替わるように前嶋が、その蹴りに対してパンチを繰り出した。

その行為に、巨人族のそいつは邪魔するなど言わんばかりに前嶋に攻撃を繰り出したが、彼はギリギリの所でそれを回避して行く。

そして、その行動に勇気づけられた東京に集ったメンバーも戦いに参加して、そいつを追い詰めていく。

だがしかし、チート能力を持った俺ですらそいつと互角に戦うのがやっと、というのに他のメンバーでは足下にも及ばなかった。

「よし！ もろおた!! ……………あぐう!!」

「撃て撃て撃てエ!! ……………あばあ!!」

「あああああああああ、あ、う!!」

「があッ!! くッそお!!」

そいつの戦闘力に、東京のメンバーが次々とやられていく中で彼は周囲のメンバーに気を取られている。

でなければ、俺が地面に両腕をつけて力を溜めていることに気が付いたはずだ。

その行動に気が付いた誰かが、そいつの注意を引くために大きくジャンプして斬りかかった。

しかし、スピードも遅くて対応可能だったのでそいつに迎撃されて吹き飛ばされたが、その直前に満身の力で飛んでいった俺への対処は出来なかったようだ。

何故なら、周囲にいたメンバーを一掃してようやく俺との戦いを再開できると確信した表情で、俺も見た瞬間に驚きの表情へと変わったからだ。

とは言え、俺の体当たりがそいつの額に当たって勢い余って壁に設置されていた階段に、激突する俺を尻目にそいつは仰向けで倒れ込んだ。

そして、そいつがピクリとも動かなくなったのでカメラを持った人が頭の方に回り込むと、そいつが戦死したことが地球上で広く知られ渡るようになった。

そのことを実感した俺達は、生き残った兵士に向かって頼み込んだ。

「自爆はやめてくれ!! これ以上、こちらも攻撃はしない!!」

「お願いだ!! もう戦闘はしたくないんだ! ……どこか、無人の惑星を見つけて移動してくれ!!」

生き残った兵士は、しかめっ面をしていたが生きて恥をかくよりも軍人としてきたばる方を選んでしまい、持っていた刃付きのトンファーで自分の首をかき切ってしまった。

それを見て、玄野は悲痛な声を上げたがその直後から宇宙船が大き

な振動で揺れ動いた。

それが意味しているのは、この宇宙船が自爆すると言うことだろう。

「自爆!?!」

「始まったのか!?!」

「ああクソ!! やりやがったぜ、クソツタレがあああああ!!」

その事実には、双方が生き残るといふ道が潰された事による悔しさでそう叫んだが、そうしている間にも振動は余計に大きくなっていく一方なので、俺達はすぐに転送してもらおうことにした。

『ソレなら大丈夫だ!! やッて やれるぜ。』

「死んだ人間も再生して転送できるらしい!!」

「やってくれ!」

「早く! 早くやってくれ!!」

この危機的状況下でも、多くのメンバーや死んだメンバーを転送するため、セバスが作業してくれたようだ。

そのため、死んでいったメンバーは転送先で再生されるように彼らが転送されたのを確認すると、生き残った俺や玄野、加藤や武田、菊地さんや女性メンバーも転送が開始した。

そして残るのは俺や玄野、加藤の他にも海外のメンバーが数人で俺達も東京に転送してもらおうとして、それが出来なくなってしまうた。

何故なら、爆発によって瓦礫と化した通路がガンツの上に落ちてきたからだ。

「セバス!!」

『ちくしょう! ここにきて何だよ! 潰れちまった!!』

「どっどっどうすれば!!」

「帰れない!!」

「走れ!!」

この状況では、くたばった奴らに気を配れないので飛行ユニットがある場所まで走るしかない。

巨人族の宇宙船は俺達、地球人には広すぎるので走るだけでは到

底、脱出は出来ないからだ。

自爆で起きる振動の中、走るのは困難な上に瓦礫が上から落ちてくるので走っている間にも、何人かが下敷きになってしまった。

そんな中でも、飛行ユニットがある場所まで走ると残っていたメンバーは次々に乗り込んでいき、脇目も振らずに飛び立った。

「玄野!! 加藤!! 大丈夫か!?!」

「あああ!!」

「なんとかな!!」

全速力で飛んでいくと、出口が見えてその先には蒼き地球が見えたのであれが本当の出口なのだろう。

そして全速力のまま、出口から飛び出して地球へと向かった。

最終話 戦後

カタストロフィが発生し、巨人族の襲来があったあの時から5年が経過した。

崩壊した社会からの復興が進み、今ではカタストロフィの時にボロボロになった建物は取り壊されて当時の面影は殆ど見られなくなつた。

しかし、彼らの攻撃によつて世界人口の2割が帰らぬ人となつたため、その悲しみに包まれている人をたまに見かける。

日本に置いてても、2400万人以上の人が亡くなって一時はパニックに陥るのではないかと思われたが、総理大臣を始めとする閣僚は前もつて地下施設に逃げ込んでいたので政治的空白は起こらなかつた。全く、これだから金持ちと政治家は困るとぼやいたのは良い思い出だ。

その一方で、宇宙船に乗り込んだガンツメンバーである加藤達と再会することができた。

俺は難なく、地上へと着陸できたが加藤と玄野は洋上に落ちたらしく、3日経ってから海岸近くに漂流していたところを発見した。

生きて帰つて来た後、特に後遺症もないままで生活できていることから問題はないだろう。

俺達が戦つた巨人族のあいつ、金髪ロングの兵士との戦いで死んでしまった仲間は無事に再生されたようでそれぞれの生活を送っている。

当の俺はと言うと、まずは大学を中退した。

何故なら、俺が通っていた大学も建物や教師陣の被害が大きくてマトモに機能していなかったからだ。

そして、中退した俺は前から持っていたコネを使って民間警備会社に就職した。

これは元々、格闘術や武術を習得していて英語も堪能と言うことから採用はすんなりと通つた。

また、就職した時のコネとは別のコネを使って岸本計の新たな戸籍

を習得することができて、彼女は渡辺計として新たな人生を送ることになる。

と言っても、戸籍を取得してすぐに婚姻届を出したので今は竜崎計として共に生活している。

しかし、レイカも俺のことを好いているのでこっちは事実婚という形になった。これは、彼女と議論をしていく中でそれでもいいから一緒に生活したいと言うのでこうなった。

前々からやろうと思っていたことは比較的、穏やかに過ごすことが出来たのだが世間的にはかなり騒がれてしまった。

何故なら、強力な兵士との一騎打ちをした挙げ句に世界を救ったことから英雄として崇められ、世界各国から取材のアポが殺到したからだ。

そのおかげで俺の名は多くの人に知られる結果となり、レイカとの関係が発覚した時にはボロクソに叩かれることになったが今では随分と落ち着いている。

元々、カタストロフィ前から引退していた訳だしね。

そんな彼女達も、今では立派な社会人として働いている訳でそれぞれの場所で頑張っている。

子供を設けても良いが、彼女達はまだ20歳を越えたばかりなのでまだ3人で頑張っている、と言うことでまとまっている。

そう思っていると、仕事の先輩に声を掛けられた。

「竜崎、今日は六本木3丁目の本店クラブだ。行ってくれるか？」

「アイサー」

そう返して、俺はスーツ姿から「TOKYO SECURITY」と書かれたTシャツと長ズボンに着替えて、その週に割り当てられた店へと向かった。

この星は巨人族の襲来によって、国家間でのパワーバランスが大きく変化した。

まず、世界最強と謳われたアメリカはその中心的存在であった原子力空母10隻の内、6隻が轟沈したかドック入りしている間に攻撃を

受けて修理が不可能になった。

その結果、他国に軍艦を回している余裕が無くなったので日米同盟は形骸化して、日本は独自の力で自分の国を守らないといけなくなった。

それでも、隣国の中国は中国共産党のトップに君臨していた人物達が軒並み、この襲撃で亡くなったということで混乱は今でも続いている。

そのため、日本は日本国憲法を大幅に変更して自衛隊を国防軍に改編。陸軍と海軍の他に、宇宙航空軍とそれぞれの部隊に派遣されている統合サイバー軍が新設された。

これは軍事費を2倍に増額して陸軍を縮小、海軍を増強するのと同じ時に民間の技術を積極的に空軍に導入した結果、航空自衛隊は宇宙航空軍へと変化した。

また、巨人族との戦いでセキュリティがザル過ぎたという指摘があったため、ネットワークを自国で守ろうという考えから統合サイバー軍が新設された。

その一方で何故、陸軍（元陸上自衛隊）を縮小したかという本土に上陸するには大量の輸送船が必要な上、上陸を許した時には既に制空権を奪われているので装甲師団がマトモに運用できないとされたからだ。

それでも、一定レベルの装甲車や戦闘車両は必要だと言うことで戦闘機自動車などの導入を急ぎ、急変する状況への対応が迅速に行えるように国や軍の組織がスマートになった。

しかし、圧倒的な強さを持っていたアメリカの抑えが効かなくなつたために世界各国では、紛争やらなんやらが多発するようになって現代版戦国時代になりつつある。

そのことから、当面は気が抜けない世界情勢だが一般市民である俺達からは縁遠い話なので、加藤達がどうなったかを話そう。

まず、玄野と小島のカップルはこの5年で結婚までしたのだが相変わらずの相思相愛で、将来的には子供を2人以上は作りたいと言っていた。

加藤は山咲と結婚したが、互いに弟と息子がいるので子供を新たに設けず、共に仕事をして幼い2人をしつかりとした大人にすることだ、という目標があると語っていた。

風とメアリーはカタストロフィ後、しばらくしてタケシと一緒に歩いているところを発見したがメアリーが、赤ん坊を抱いているのを知って彼らも子供を作ったんだなあと実感した。

和泉も彼女さんと一緒にいるのを、たまに見かけたりしているので問題はないように思える。

西に関しては、人命救助中にガンツがいた部屋が襲撃を受けた後に巨大なロボを使って、空間圧縮を管理している塔を破壊しようとして和泉に妨害された後、行方不明になったので恐らくではあるが巨人族の宇宙船でくたばったんだらう。

また、他のメンバーもそれぞれの道を歩んでいてSNSを使ってちよくちよくと、現状報告の連絡を取り合っている。

その中でも、俺が一番驚いたのは金髪ロングの熟練兵士と戦っている映像はかなり、高評価だったようで菊地さんの他にも幾つもの大きなテレビ業界の取材を受けた。

あの戦いの再現を頼まれたが、俺達が地球に帰還した時点でガンツスーツは只のラバースーツになっていたし、すべての武器や乗り物は只のガラクタになっていたから無理としか言いようがない。

そもそも、Xショットガンを始めとする武器のすべては対星人用の武器であって、地球人に向けて撃って良いようなものではない。

と言っても、人間にも有効だがそれで戦争をすると想定されてない訳だしね。

巨人族レベルの技術力になるのは、後数百年は必要だという科学者もいるから今はただカタストロフィ後の平和を享受するだけだ。

そう思いつつ、今日も都会の喧騒の中を目的地に向けて移動していった。

IFストーリー エロメイン 番外編① メアリーとの性行為

「ホント、未体験なのかあ？」

「そうだってえ、言ってるじゃん」

「そうとは見えないぐらいに出来上がってるな」

カタストロフィ時において、共に巨人族と戦ったメアリー・マクレーンを一人前の女性にする夜が来た。

大仏戦の時に、岸本がくたばって先の戦いにおいてレイカが僅かに手が届かずに戦死したので、結局は1人やもめかと思えながら虚しく仕事をしながら生きていたのだが、そんな生活の中でメアリーが懸命に俺の住所を探し出して来てくれたのだ。

そのため、そこまでして来た理由を聞き出すと俺の戦い方に惚れて無我夢中で探し出したらしい。

そんなことを、真剣な眼差しで言われたら断る理由はないも同然なので一先ず、同棲をして互いの性格やら態度について知っていこうと相談してから、ついに体を重ねる日がやって来たのだ。

その際、風も格闘家としてその道を極めていることを伝えると、それでも俺の方がいいとの反応が返って来たのでやることにした。

「んう……ねえ、あんたって童貞じゃないでしょ？」

「そりやそうだがどうしてわかるんだい？」

「なんて言うか、触り方がいやらしいんだよね。手慣れているってかさ」

「そりやね。やった回数こそ、少ないが童貞じゃねえな」

「やっぱり……んあ！」

メアリーの突然の質問に、答えると不貞腐れる表情を見せたのでそんな生意気な彼女の乳首を軽くつねると可愛い声が聞こえた。

「まあ今はそんなこと、どうだっていいじゃん。やるんだし」

「そおだけど、やあん。触り方が変態い……」

「そう言いながら、こっちはべしよ濡れじゃないか」

「だって……………だってえ……………」

俺の言葉に、顔を赤らめた彼女をベッドに仰向けで押し倒してから自分の逸物を露わにした。

「はあ……………はあ……………」

「こいつがメアリーの中に入っちゃようよ」

「んう……………やあん……………んんっ……………」

そして、逸物を彼女の秘所に押し当てて擦ると軽く喘いだ一方で、秘所の方は十分に濡れていたから一気に挿入した。

「んああああ!!」

「ああ、メアリーの中って気持ちいいぜ」

「それはあ！ よかったねっ！ やあ！ そんなに動かないでえ!!」

「そりゃ、無理な相談だ。メアリーが可愛すぎるから」

「動かしながら言わないでえ!!」

腰を前後に動かすピストン運動をすると、彼女は淫らに乱れていたので豊満な胸を触りながら乳首を弄った。

すると、先程の言葉で軽く締め付けていた秘所が更に締め付けて来たので、逸物の奥から込み上げてくりものがあつた。

「メアリーはホント、乳首が弱いよねえ」

「やあん！ んああ！ ひゃあああ！」

「このままだと、すぐにイっちゃうよ」

「うん！ 来てえ！ 誠のせーえき、私の奥に打ち込んでええええ!!」

「うっ、イクう！」

彼女の言葉に、抑えが効かなくなった逸物から大量の白濁色の液体が噴射して、彼女の奥を満たした上に溢れた液体が逸物と秘所の間から漏れ出して来た。

「はあ……………はあ……………これで私も一人前の女ね」

「そうなるな」

「だけどこれだけじゃあ、終わらせないわよ！」

「はいよ。じゃあ、次はどうする？」

「じゃあね……………」

「下から見るメアリーも壮観だな」

「でしょ？私、こう見えてもスタイルには気をつけていたんだ！」

「ああ、豊満な胸がたゆんたゆんしてる」

「揉みたかったら揉みなよ。そのための巨乳なんでしょ？」

「じゃあ、遠慮なく揉ませてもらおう」

正常位の次は、騎乗位での性行為で下から見る彼女の胸はとても揺れていた。

しかも、実際に揉めるとなるとかなりの眼福感があつてメアリーが来てくれたのは幸いだつた。

じやなきや、失意の中で仕事を続けて孤独の中で死ぬんだから性行為をすることで踏ん切りがつきそうだ。

そのため、胸を揉んでいくとほぼ同時に絶頂した。

「んああああああああ!! 熱いのが来てるう!!!」

「メアリーの締め付けもスゲーな！ 最高だぜ!!」

こうして、俺達は満足するまで性行為をして翌日には婚姻届を役所に出しに行った。